（財）大阪府文化財センター調査報告書　第117集

茨木市

総持寺遺跡 Ⅱ

大阪府営茨木三島丘住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書

2004年 9 月

財団法人　大阪府文化財センター

建物416（02－1調査区　2トレンチ）　北から

16溝（03－1調査区　3・4トレンチ）　南東から

02－1調査区2トレンチ南壁土層断面　北から

03－1調査区3トレンチ南壁土層断面　北から

建物811－75ピット（02－1）　北から

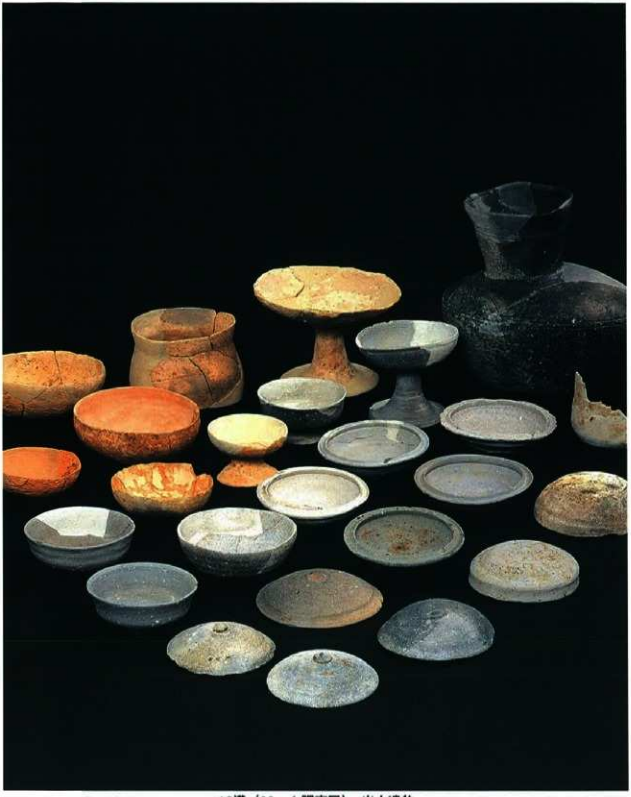
建物10－126ピット（03－1）　東から

建物12－136ピット（03－1）　東から

建物14－157ピット（03－1）　西から

建物13－141ピット（03－1）　西から

建物13－142ピット（03－1）　西から



16溝（03－１調査区） 出土遺物

（外面）

製塩土器（245～250＝17溝　251＝建物6－54　252・253＝包含層）　（内面）

序　　文

茨木市に所在する総持寺遺跡は、北摂山地から淀川右岸の平野に向かって延びる富田台地上に展開する遺跡です。周辺には太田茶臼山古墳（伝継体天皇陵）や今城塚古墳といった大型前方後円墳、古代官衙である嶋上郡衙跡、平安時代創建の伝承をもつ総持寺など著名な遺跡が存在し、数多くの文化財に恵まれた地域と言えるでしょう。

しかし当遺跡は近年の開発によってその姿が大きく変わろうとしており、それに伴い多くの埋蔵文化財が調査されてきました。当センターでは住宅・都市整備公団の住宅建設事業に先立ち、平成6年から同9年にかけて調査を実施したところ、古代の大規模な集落跡や中世の土壙墓を伴う集落跡が検出されました。特に、中世の土壙墓から出土した烏帽子は、当時としては全国的にも出土例が少なく、注目されました。当センターは調査報告書『総持寺遺跡』を平成10年3月に刊行し、その成果を一般に公開しました。

今回報告する当遺跡の調査は、大阪府営茨木三島丘住宅の建て替えに先立ち、平成14・15年度に実施したものです。その成果は古代の掘立柱建物群などを検出し、当時の遺物がまとまって出土したものですが、それらは地域史を解明する上で貴重な資料を提供したものと確信しております。

最後に、調査に際しては大阪府教育委員会、大阪府建築都市部、地元自治会、茨木市教育委員会各位をはじめとする関係者の方々のご援助に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第です。

平成16年9月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　　水野　正好

例　　言

1．本書は、大阪府茨木市に所在する総持寺遺跡の発掘調査報告書である。02－1調査区は三島丘一丁目に、03－1調査区は同二丁目に位置する。

2．調査は、大阪府営茨木三島丘住宅（建て替え）建設工事に伴う総持寺遺跡発掘調査として、大阪府建築都市部住宅整備課から財団法人大阪府文化財センターが、2002年10月1日～2003年2月28日と2003年5月1日～2004年3月31日の間委託を受けた。現地発掘調査を2002年10月29日～2003年2月21日までと2003年8月12日～11月28日まで、整理作業を2003年5月1日～8月11日までと2003年12月1日～2004年3月31日までおこない、2004年9月30日に本書刊行をもって完了した。

3．調査は以下の体制で実施した。

2002年度　調査部長玉井　功　北部調査事務所長小野久隆、調査第一係長森屋美佐子、技師市木芳三　調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、技師山元　建

2003年度　調査部長玉井　功　中部調査事務所長小野久隆、調査第一係長辻本　武、主査片山彰一〔写真〕、技師信田真美世、非常勤専門調査員小野亜由美　調整課長赤木克視、調整係長森屋直樹、主査山上　弘、技師山元　建

4．調査の実施にあたっては、三島丘自治会をはじめとし、下記の方にご指導ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

阿部幸一・奥　和之・小浜　成・阪田宵功（大阪府教育委員会）　荒木浩司（豊鳩町教育委員会）
宮脇　薫（茨木市教育委員会）

また、発掘調査および整理事業の過程で次の非常勤職員が参加した。

－発掘調査－

喜田真澄・高田泰子・中川寿美・波岸初美・山本香織

－整理作業－

奥村福子・喜田真澄・高田泰子・中川寿美・那須三枝子・波岸初美・樋口玲子・山本香織・米子千智

5．本書の作成にあたっては、各担当者がそれぞれ寄稿し、執筆分担は目次に記した通りである。連名となっている章のうち、「第2章　調査の経緯・経過と方法」では02－1調査区に関しては市木が、03－1調査区に関しては信田が執筆した。「第3章　調査成果　第1節　02－1調査区」では遺構については市木が、遺物については信田が、「第2節　03－1調査区」では遺構については信田が、遺物については信田と小野（亜）が執筆した。

6．本書の編集は、市木・信田・小野（亜）がおこなった。

7．本調査に関わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、すべてm単位である。

2．遺構図の座標は、総持寺遺跡が世界測地系移行以前から継続して調査がおこなわれている遺跡であることをかんがみ、日本測地系で表記した。国土座標に則った平面直角座標系、第Ⅵ座標系に準拠し、表記はすべてm単位である。

3．遺構図に付した方位は、すべて座標北である。

4．土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』24版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。

5．遺構番号は、02－１調査区、03－１調査区毎に、通し番号を付した。ただし、03－１調査区では複数の遺構の集合体である掘立柱建物と柱列には、別途に番号を設定した。

6．各遺構の実測図の縮尺は、建物を１/60に統一したほかは、１/20・１/30・１/40・１/50・１/80のいずれかである。遺物実測図は、25が１/６であるほかは、すべて１/３である。いずれも各図のスケールに明示している。

7．遺構図の断面位置は、「　」によってその位置を明記した。

8．遺物番号は、実測図掲載順の通し番号である。写真図版、カラー図版にのみ掲載しているものは、実測図の最終番号に続く番号を付した。

9．掲載遺物一覧表の法量は、（　）を付したものは復元値、＜　＞を付したものは残存値である。受部（かえり）をもつ器種（須恵器杯H・杯G蓋・杯B蓋）の口径は、受部（かえり）の先端で計測したものである。

10．写真図版の縮尺は統一していない。

11．土器の器種（アルファベット）分類は、以下の文献を参考にした。

1962 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所

1976 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』 奈良国立文化財研究所

1978 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所

1991 『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』 奈良国立文化財研究所

目　　次

カラー図版１～４

序文

例言・凡例

目次

第１章　位置と環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（信田）・・・・・・・　1

　第１項　自然環境　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

　第２項　歴史環境・既往の調査成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

第２章　調査の経緯・経過と方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・（市本・信田）・・・・・　7

　第１項　調査の経緯・経過　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

　第２項　調査の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7

第３章　調査成果

　第１節　02－１調査区

　　第１項　層序と地形　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（市本）・・・・・・・　11

　　第２項　遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（市本・信田）・・・・・　11

　　　１）弥生時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

　　　２）古墳時代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

　　　３）古代　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11

　　　４）中世　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　33

　　小結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（市本・信田）・・・・・　33

　第２節　03－１調査区

　　第１項　層序と地形　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（信田）・・・・・・・　39

　　第２項　遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（信田・小野）・・・・・　39

　　小結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（信田）・・・・・・・　66

第４章　総括　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（信田）・・・・・・・　69

　第１項　遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　69

　第２項　遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　69

　第３項　総持寺遺跡の地形と変遷　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　70

挿図目次

図1　総持寺遺跡の位置 ・・・・・・・・・・・・・・・1
図2　調査地周辺地質図 ・・・・・・・・・・・・・・・2
図3　遺跡周辺地図 ・・・・・・・・・・・・・・・・4
図4　既往の調査区 ・・・・・・・・・・・・・・・・5
図5　02－1調査区　トレンチ配置図・地区割 ・・・・8
図6　03－1調査区　トレンチ配置図・地区割 ・・・・9
図7　基本層序位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・12
図8　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図9　竪穴住居　平面図 ・・・・・・・・・・・・・・15
図10　建物115・477　平面・断面図 ・・・・・・・・・18
図11　建物416　平面・断面図・・・・・・・・・・・19
図12　建物445・516　平面・断面図 ・・・・・・・・・20
図13　建物457・458　平面・断面図 ・・・・・・・・・21
図14　建物475・514・515　平面・断面図・・・・・・・22
図15　建物513・810・811　平面・断面図・・・・・・・23
図16　建物416・515　柵512　出土遺物・・・・・・・・24
図17　柵113・122・162・512・517　平面・断面図・・・25
図18　28・41・86～88・137・141・144～
146・486・487・497・505ピット　平面・断面図・26
図19　42・77・90・494・503ピット
105・432・813土坑　出土遺物・・・・・・・・・・27
図20　470土坑　11・66・469溝　平面図
492土坑　平面・立面図・・・・・・・・・・・・・28
図21　66溝　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・29
図22　11・25・46溝　出土遺物 ・・・・・・・・・・29
図23　46溝・410落ち込み　平面・立面図・・・・・・・30
図24　37・469溝　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・31
図25　82・410落ち込み　出土遺物・・・・・・・・・・31
図26　包含層（1～3トレンチ）出土遺物 ・・・・・34
図27　1・2トレンチ　平面図 ・・・・・・・・・35・36
図28　3～8トレンチ　平面図 ・・・・・・・・・・37・38
図29　基本層序位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・40
図30　基本層序 ・・・・・・・・・・・・・・・・・41
図31　遺物1・2　平面・断面図 ・・・・・・・・・・42
図32　遺物14　平面・断面図 ・・・・・・・・・・・43
図33　遺物3・8　平面・断面図 ・・・・・・・・・・44
図34　遺物5　平面・断面図 ・・・・・・・・・・・46
図35　遺物6　平面・断面図 ・・・・・・・・・・・47
図36　遺物4・7　平面・断面図 ・・・・・・・・・・48
図37　遺物10・13　平面・断面図 ・・・・・・・・・49
図38　柱列9・11　建物12・15　平面・断面図 ・・・51
図39　建物5～8・10・12・13　柱列9　出土遺物 ・・52
図40　76・133・144ピット　24溝　出土遺物 ・・・・52
図41　29・30土坑　出土遺物 ・・・・・・・・・・・53
図42　7・8土坑　平面・断面図 ・・・・・・・・・・54
図43　28・138土坑　平面・断面図・・・・・・・・・55
図44　7・8土坑　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・55
図45　16溝　平面・断面図 ・・・・・・・・・・・・56
図46　16溝　出土遺物（1）・・・・・・・・・・・・57
図47　16溝　出土遺物（2）・・・・・・・・・・・・58
図48　16溝　出土遺物（3）・・・・・・・・・・・・59
図49　16溝　出土遺物（4）・・・・・・・・・・・・60
図50　16溝　出土遺物（5）　16溝直上包含層
出土遺物（201～217＝包含層）・・・・・・・・61
図51　17・44溝　平面・断面図 ・・・・・・・・・・64
図52　44溝　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・64
図53　17溝　17溝直上包含層
出土遺物（227～237・239＝包含層）・・・・・・65
図54　1～5トレンチ　平面図 ・・・・・・・・・67・68
図55　総持寺遺跡　地形図 ・・・・・・・・・・・・71

図版目次

図版1　調査地遠景
図版2　総持寺遺跡周辺航空写真(1)
図版3　総持寺遺跡周辺航空写真(2)
図版4　02－1調査区全景(1)
図版5　02－1調査区全景(2)
図版6　02－1調査区全景(3)
図版7　02－1調査区全景(4)
図版8　02－1調査区全景(5)
図版9　02－1調査区　竪穴住居
図版10　02－1調査区　掘立柱建物（1）
図版11　02－1調査区　掘立柱建物（2）
図版12　02－1調査区　掘立柱建物（3）
図版13　02－1調査区　柵
図版14　02－1調査区　ピット
図版15　02－1調査区　溝・土坑・
落ち込み
図版16　02－1調査区　出土遺物（1）
図版17　02－1調査区　出土遺物（2）
図版18　03－1調査区全景（1）
図版19　03－1調査区全景（2）
図版20　03－1調査区全景（3）
図版21　03－1調査区　掘立柱建物（1）
図版22　03－1調査区　掘立柱建物（2）
図版23　03－1調査区　掘立柱建物（3）
図版24　03－1調査区　掘立柱建物（4）
図版25　03－1調査区　ピット
図版26　03－1調査区　土坑・溝
図版27　03－1調査区　溝
図版28　03－1調査区　出土遺物（1）
図版29　03－1調査区　出土遺物（2）
図版30　03－1調査区　出土遺物（3）
図版31　03－1調査区　出土遺物（4）

表目次

表1　掲載遺物一覧表（1）
表2　掲載遺物一覧表（2）
表3　掲載遺物一覧表（3）
表4　掲載遺物一覧表（4）
表5　掲載遺物一覧表（5）
表6　掲載遺物一覧表（6）
表7　掲載遺物一覧表（7）
表8　掲載遺物一覧表（8）
表9　掲載遺物一覧表（9）
表10　掲載遺物一覧表（10）

第１章　位置と環境

総持寺遺跡は、大阪府の北東部、東に隣接する高槻市との市境にあたる茨木市三島丘一丁目・二丁目、三島町、総持寺一丁目に所在する。本書で報告する02－１調査区は三島丘一丁目、03－１調査区は三島丘二丁目に位置する。

国土地理院発行1/200，000地形図「京都及大阪」・「和歌山」を縮小して使用

図１　総持寺遺跡の位置（1/300,000）

第１項　自然環境

遺跡は北摂山地南麓の丘陵地帯に立地する。

北摂山地は、中国地方を東西に走る中国山地の南東端にあたる、東西に長い山地である。東は京都盆地、西は六甲山地、南は大阪平野、北は亀岡盆地に接する。山地からはいく筋もの河川が南の沖積平野に流れ出ており、遺跡の立地する、千里丘陵以東の地域ではそれらが合流しあい、淀川水系を形づくっている。

遺跡周辺は、地質学上低位段丘とされる。西は安威川、東はさらに南東で芥川と合流する女瀬川が開析しており、北摂山地から南へ張り出す形状を呈するため、「富田台地」と呼ばれている。遺跡が立地しているのは、この標高10～30mの「富田台地」の南西部分である。

本書で報告する調査地のうち、西部の02－１調査区は「富田台地」の西端にあたり、西側が高低差７～８ｍを有する段丘崖となっている。

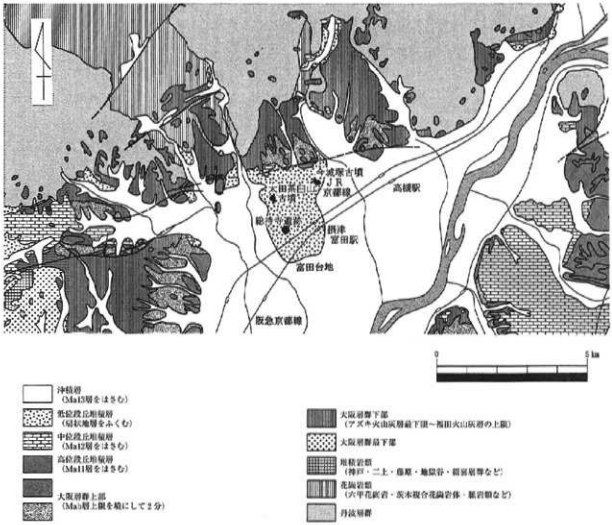


図２　調査地周辺地質図

第２項　歴史環境・既往の調査成果

遺跡の立地する北摂山地南麓の低位・中位段丘には、旧石器時代の遺跡が数多く分布していることが明らかになっている。遺跡周辺においても高槻市郡家今城遺跡をはじめとする石器製作址が確認されている。総持寺遺跡のこれまでの調査では旧石器は出土していないが、今後この時代の遺構・遺物がみつかる可能性は低くはないと思われる。

縄紋時代も、旧石器時代とほぼ同様の遺跡分布が想定される。茨木市耳原遺跡で晩期の甕棺墓、同徳大寺遺跡で晩期の竪穴住居が検出されているほか、さらに南の沖積地においても茨木市東奈良遺跡・牟礼遺跡で晩期の土器が出土している。しかし、この地域ではまだ縄紋時代の遺構の検出例が少なく、実態は明らかになっていない。

弥生時代の遺跡周辺では、丘陵地・沖積地ともに遺構が増加し、展開していく。特に茨木市東奈良遺跡、高槻市安満遺跡は、環濠を持つ拠点集落である。

総持寺遺跡でこれまでに検出された最も古い遺構・遺物は、弥生時代のものである。大阪府教育委員会（以下府教委とする）の調査で後期の周溝墓・土器棺墓が検出されているほか、財団法人大阪府文化財調査研究センター（以下センターとする）の調査でも柱状片刃石斧・太型蛤刃石斧が出土している。

古墳時代になると、茨木市から高槻市にかけての丘陵地に前期から後期にわたって多くの古墳が築かれる。前期の茨木市紫金山古墳、中期の茨木市太田茶臼山古墳、後期の高槻市今城塚古墳が代表的なものである。

総持寺遺跡では、前期と後期に集落が、中期には古墳群が営まれる。府教委による調査で竪穴住居が検出されたほか、総持寺古墳群が発見された。

古墳は計41基で、円墳が１基あるほかは方墳である。規模は小さいもので１辺４～５m、大きいもので１辺約15mである。出土した埴輪のうち、形象埴輪の多くと円筒埴輪の一部が高槻市新池埴輪製作遺跡産のものと分析されている。遺跡の北方約１km、富田台地の最高所に位置する太田茶臼山古墳にも新池埴輪製作遺跡産の埴輪が供給されている。全長約226mの前方後円墳と総持寺古墳群との関連が注目される。

総持寺遺跡では７世紀代に集落が展開する。府教委の調査区では竪穴住居が６棟検出されている。概要報告書では７世紀前葉、中葉よりは下らない時期とされている。また、府教委・センター調査地ともに７世紀代の掘立柱建物の存在が示唆されている。

茨木市内では宿久庄遺跡・郡遺跡・総持寺北遺跡・鮎川遺跡・東奈良遺跡などで６～７世紀代と思われる遺構・遺物が、太田遺跡で７～８世紀と思われる遺構・遺物が確認されている。しかし、当該期の集落を明らかにし得る具体的な資料はまだ蓄積されていない。高槻市内では嶋上郡衙跡において７世紀代の掘立柱建物をはじめとする遺構群が検出されている。

奈良時代以降、周辺地域で遺跡数が増す。茨木市内では総持寺北遺跡・庄田遺跡・宿久庄西遺跡などで掘立柱建物などが検出されている。高槻市内では７世紀から続く嶋上郡衙跡のほか、郡家今城遺跡・土室遺跡・大蔵司遺跡・安満遺跡・梶原南遺跡等で掘立柱建物が検出されている。また、古曽部・芝谷遺跡・岡本山東地区遺跡では火葬墓等が確認されている。

総持寺遺跡でも前述した７世紀以降、古代末まで連続して集落が営まれる。掘立柱建物・井戸・溝等で構成される集落が、10世紀まで続いていく。

図3　遺跡周辺地図（1/50,000）

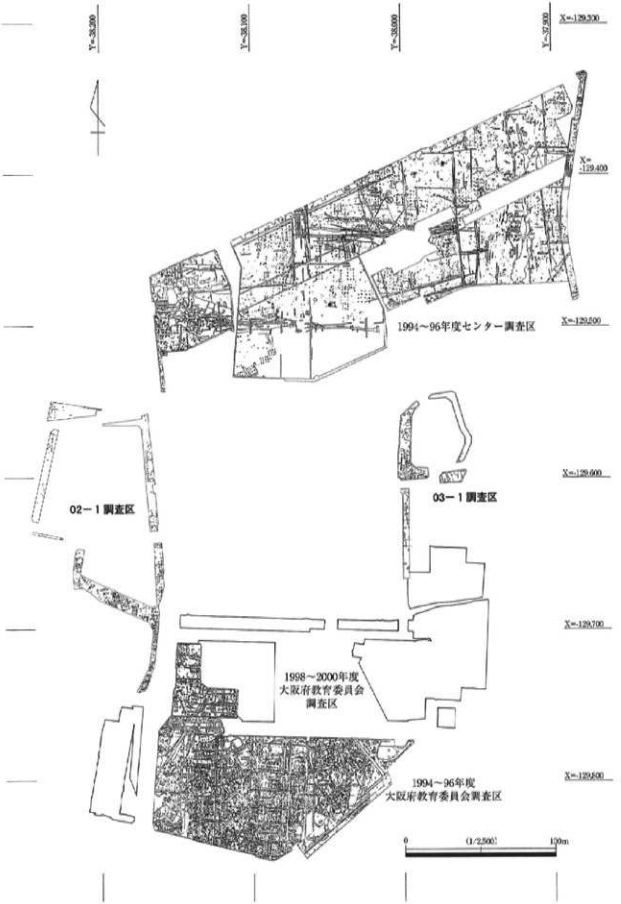

Y=-36,500
Y=-36,100
Y=-35,600
Y=-35,200
X=-129,300
X=-129,400
X=-129,200
1994～96年度センター調査区
X=-129,600
03－１調査区
02－１調査区
X=-129,700
1998～2000年度
大阪府教育委員会
調査区
X=-129,800
1994～96年度
大阪府教育委員会調査区
0
(1/2,500)
100m

図４　既往の調査区

遺跡の立地する茨木市をはじめとする大阪府北東部は、古くは三島と呼ばれた。摂津国のなかでも緒名川の流れる河辺郡とともに広い平野部を有し、比較的早くから耕地が展開していたと考えられる地域である。

古代の行政区画では、総持寺遺跡周辺は島下郡または島上郡に属す。東の島上郡と西の島下郡、両郡の境界は、総持寺遺跡周辺に想定されているが、詳細は不明である。島上郡衙は高槻市川西町周辺に所在したことが明らかになっている。一方、島下郡衙は茨木市郡・郡山に推定されてはいるものの、確証は得られていない。『倭名類聚抄』には、島上郡に濃味・児屋・真上・服部・高上の5郷、島下郡に新野・宿人・安威・穂積の4郷が記載されている。

北摂山地南麓沿いには山陽道が設置されていた。都と西国諸国を結ぶ幹線道路である。『続日本紀』によると摂津国内には和銅4（711）年、島上郡に大原駅、島下郡に殖村駅が置かれた。10世紀に編纂された『延喜式』には、草野・須磨・葦屋がみられ、前記2駅は廃止されたと考えられる。草野駅の位置は不明であるが、箕面市萱野・牧・牧落などが候補に上げられている。山陽道は、中世以後も西国街道として継承され現在にいたっている。島上郡衙跡では高槻市教育委員会の発掘調査により山陽道の遺構が西国街道に沿って検出されている。遺跡周辺では北方約1㎞の地点、太田茶臼山古墳の南側に西国街道が通っており、総持寺遺跡の北方に山陽道が設置されていた可能性が高いと思われる。

また、西国街道の南側、茨木市東太田には太田廃寺がある。明治期に舎利容器を納めた塔心礎が出土しており、のちに単子葉弁紋の瓦片も採集されている。

三島地域では沖積地を中心に、条里地割が広く認められる。遺跡の立地する富田台地上も、開発の活発化する近年までは一面水田が広がっており、整然とした条里地割をみることができた。ただし、台地南西隅部にあたる総持寺遺跡周辺では、地割は微地形に規制され、やや乱れている（図版2・3）。

総持寺遺跡では12世紀後葉～13世紀にも集落が展開する。府教委・センターの調査区ともに掘立柱建物・井戸・溝等のほか、土壙墓が13基検出されている。

地名の由来となった総持寺は、富田台地南西端に位置し、南側は急な崖に面している。9世紀後葉に藤原山蔭によって創建されたといわれ、西国三十三箇所観音霊場の第二十二番札所となっている。

総持寺遺跡では現在のところ中世後期以降の集落遺構は確認されていない。中世前期の集落が廃絶した後は、近年までみることができた水田の広がる景観が形成されていったと思われる。現在は、西国街道にかわって国道171号線がセンター調査地の北側を東西に通り、周辺地域では住宅・店舗等が急速に増加している。

参考文献

1969 『茨木市史』 茨木市史編纂委員会
1995 「総持寺遺跡発掘調査概要」 大阪府教育委員会
1997 「総持寺遺跡発掘調査概要・Ⅱ」 大阪府教育委員会
1997 「総持寺北遺跡の発掘調査（ＳＪ－Ｎ・95－1、ＳＪ－Ｎ・96－1）」
『大阪府茨木市　平成8年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会
1998 『総持寺遺跡』 財団法人　大阪府文化財調査研究センター
1999 「総持寺遺跡98053」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報3』 大阪府教育委員会
2001 「総持寺遺跡99007」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報4』 大阪府教育委員会
2002 「総持寺遺跡00026」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報5』 大阪府教育委員会
2002 「総持寺北遺跡」『大阪府茨木市　平成13年度発掘調査概報』 茨木市教育委員会

第２章　調査の経緯・経過と方法

第１項　調査の経緯・経過

総持寺遺跡の調査は大阪府営茨木三島丘住宅の建て替えに伴い、1994～2001年にかけて大阪府教育委員会が実施している。今回の調査地の南に位置し、調査面積は約23,500㎡に及ぶ。

また、これら周知の遺跡の北辺部では、住宅・都市整備公団（現　独立行政法人都市再生機構）の住宅建設に伴い、財団法人大阪府埋蔵文化財協会（その後の財団法人大阪府文化財調査研究センター・現財団法人大阪府文化財センター）が1994～1997年にかけて調査を実施している。今回の調査地の北東方向に位置し、調査面積は約25,500㎡である。

今回は府営住宅の整備に係わり、現道路の拡幅と新たな設置に伴う道路敷部分の調査である。既調査地に隣接しており、埋蔵文化財の包蔵が予想された。

調査箇所は全部で９箇所であるが、大きく西部（５箇所）と東部（４箇所）にわけられる。発掘調査は西部を2002年度に、東部を2003年度に実施し、前者を02－１調査区、後者を03－１調査区と呼称している。

02－１調査区は2002年10月～2003年２月にかけて調査を実施し、面積は約2,037㎡である。03－１調査区は2003年８月～11月にかけて調査を実施し、面積は約1,076㎡である。報告書作成は、2003年５月～８月と2003年12月～2004年３月にかけておこなった。

第２項　調査の方法

当センターでは2003年度より新たな調査マニュアルが導入された。そのため、02－１調査区と03－１調査区では依拠するマニュアルが異なる。ただし、継続して調査がおこなわれている遺跡であることをかんがみ、地区割、座標系などは従前から使用しているものに統一している。そのため、現地調査の方法は大きく異なっていない。

02－１調査区

02－１調査区は財団法人大阪文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』1988に依拠した。トレンチは１～８トレンチに分割し、実施した。盛土は重機により掘削をおこない、その後、包含層・遺構内埋土を人力により掘削した。

検出した遺構面はクレーンを使用して写真測量をおこない、遺構平面図を作成した。測量に関しては、2002年度より日本測地系から世界測地系へ測量法が変更された。しかしながら、当調査地は隣接した既調査地の成果と合成する必要があり、地区割および写真測量は第Ⅵ系日本測地系を使用した。

地区割は上記マニュアルをもとに、日本測地系の座標軸を基準線として設定し、遺構図の作成、遺物の取り上げを行った。

遺構番号は性格に係わらず、連続番号ですべての遺構に与えた。

出土遺物はコンテナ11箱分である。登録、洗浄、注記を行い、データ・実測遺物の抽出を行った。注記は「ソウジジ2002・1」のように調査年度と登録番号を記した。図化可能な遺物をできる限り抽出し、実測図を本報告書に掲載した。

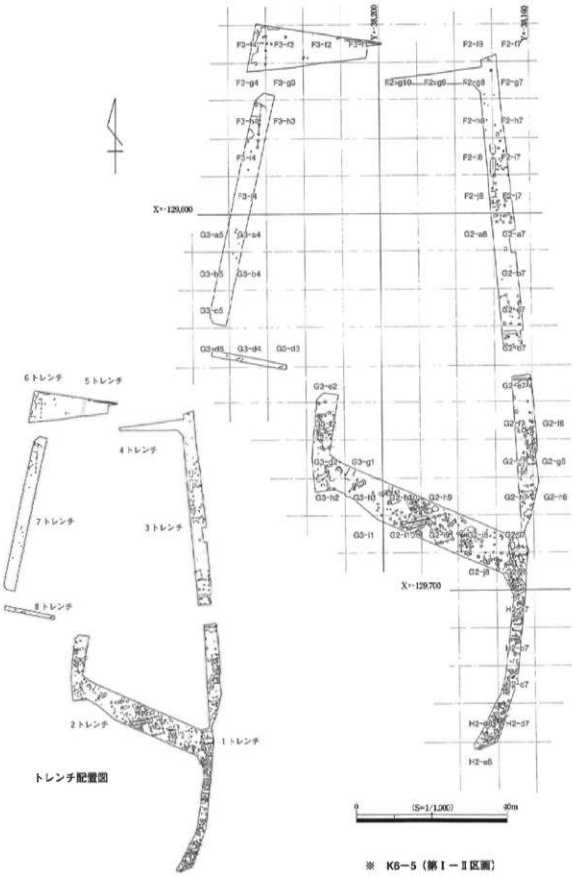
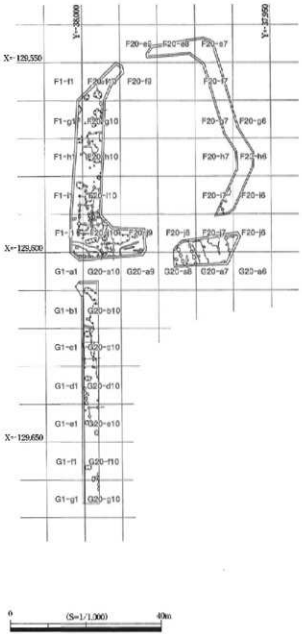
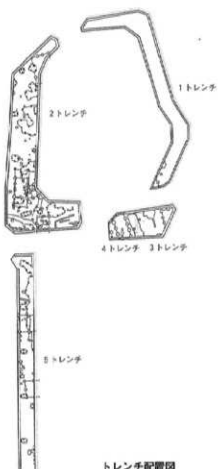


図5　02－1調査区　トレンチ配置図・地区割（第Ⅲ・Ⅳ区画）





トレンチ配置図

※Y=-38,000以西　K6－5（第Ⅰ－Ⅱ区画）
　Y=-38,000以東　K6－6（第Ⅰ－Ⅱ区画）

図６　03－１調査区　トレンチ配置図・地区割（第Ⅲ・Ⅳ区画）

03－1調査区

03－1調査区は財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』2003に則って調査をおこなった。

調査箇所は計4箇所である。うち1箇所は調査の都合上2分割した（3・4トレンチ）ため、1～5トレンチの計5トレンチである。

表土を重機で掘削したのち、以下の層と遺構内埋土を人力により掘削した。表土層以下の層は、最下層である古代の包含層と、より上層の作土層と考えられる層とにわけて掘削した。

遺構面はクレーンを使用した空中測量をおこない、1／50の平面図を作成した。個別の遺構図、土層断面図は、空中測量と同一の測量成果を用い、実測作業をおこなった。いずれも座標表記は、02－1調査区と同様、日本測地系を使用している。

遺物の取り上げなどに使用する地区割も同様に、第Ⅵ系日本測地系の座標軸を基準線とする『遺跡調査基本マニュアル』1988で設定されたものに基づいている。

遺構番号は、遺構の種類に関係なく、連続番号で付した。また、複数の遺構の集合体である掘立柱建物、柱列には、別途に番号を設定した。

出土遺物はコンテナ約30箱分である。取り上げ単位毎に登録番号を付し、洗浄、注記をおこなった。注記は、調査区名「ソウジジ2003・1」のあとに登録番号とした。図化可能な遺物をできる限り抽出し、実測図を本報告書に掲載した。

第３章　調査成果

第１節　02－１調査区

第１項　層序と地形

包含層の残存状況は不良であり、１トレンチ南半から中央部、２トレンチ東半、３トレンチ南端に残存していたのみである。他トレンチは盛土を除去することにより、黄褐色から明褐色の粘土或いは礫層の地山面が検出された。遺構面は地山面１面を基本とするが、１トレンチ中央部では浅い谷地形を挟んで２面存在する。

包含層は１層のみである。褐灰色から灰黄褐色シルトであり、厚さ５～10cmを測る。また、１トレンチ中央部のX=-129,700、Y=-38,165付近は浅い谷地形になっており、深いところで約30cmの厚みを有する。包含層と同様の埋土である。

なお、遺構面の標高は北端の５・６トレンチでT.P.約22.1m、南端にあたる１トレンチ南端でT.P.約20.8mを測る。

調査区北半の遺構面が大きく削平を受けている。

第２項　遺構と遺物

各時代の遺構を同一面で検出した。１・２トレンチでは遺構を特に密集して検出した。

１）弥生時代

弥生時代の遺物は、66溝と包含層から出土したのみである。66溝以外には弥生時代のものと確認できる遺構はなく、包含層から出土したものもきわめて少量である。

〔溝〕（図20・21）

66溝（図20・21）

１トレンチ南側において検出した。幅1.6～3.0m、深さ約0.3mを測り、東西方向に伸びる溝と考えられる。

遺物は、弥生土器広口壺（14）が破片の状態で調査区西端寄りの溝北肩部で出土した。頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部は外反する。口縁端部には竹管紋をもつ。表面の遺存状態が悪く、調整等は不明である。ほかに、高杯（16）や、頸部に突帯をめぐらし、体部に直線状と波状の櫛描紋を施す壺の破片が出土している。

２）古墳時代

須恵器杯・杯蓋等、６世紀代の遺物が包含層等から出土しているが、明瞭な古墳時代の遺構は確認できなかった。

３）古代

出土遺物のほとんどが古代のものであり、検出した遺構の多くがこの時期のものと思われる。

6トレンチ
5トレンチ
No.23
No.24
No.22
No.21
4トレンチ
No.20
No.19
No.18
No.17
X=-120,670
3トレンチ
No.16
No.15
7トレンチ
No.25
No.26
No.27
No.28
No.29
8トレンチ
No.14
No.13
2トレンチ
No.12
No.11
No.10
No.9
No.8
No.7
No.6
No.5
No.4
1トレンチ
X=-120,700
No.3
No.2
No.1
0
(S=1/800)
40m

図7　基本層序位置図

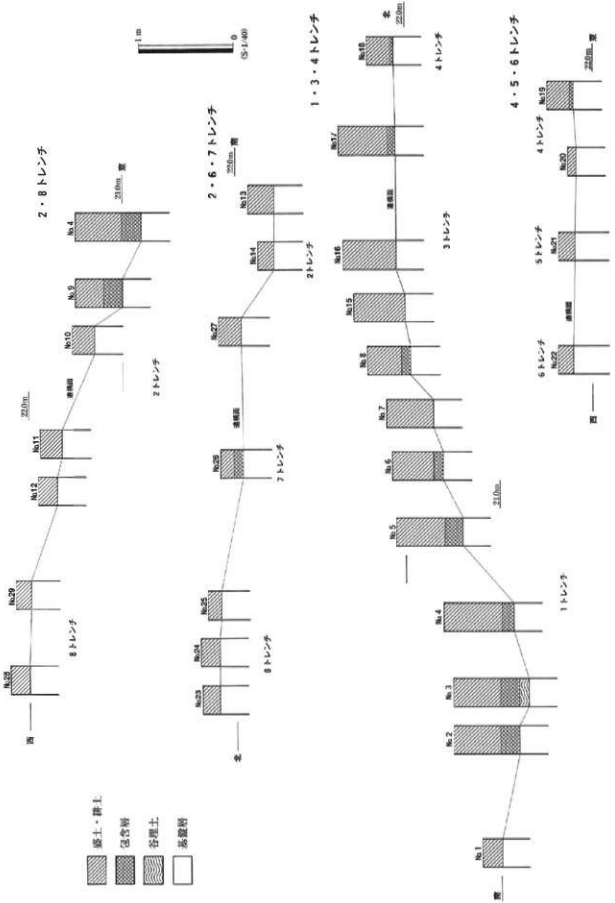

2・8トレンチ
2・6・7トレンチ
1・3・4トレンチ
4・5・6トレンチ
1m
0
(S=1/40)
220m
210m
200m
西
東
北
南
赤城層
遠橋層
8トレンチ
7トレンチ
6トレンチ
5トレンチ
4トレンチ
3トレンチ
2トレンチ
1トレンチ
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
No.12
No.13
No.14
No.15
No.16
No.17
No.18
No.19
No.20
No.21
No.22
No.23
No.24
No.25
No.26
No.27
No.28
No.29
盛土・耕土
泥炭層
砂質土
基盤層

図８　基本層序

〔竪穴住居〕（図9　図版9）

1トレンチ南端において竪穴住居を7棟検出した。4辺が完全に残存するものはなく、1辺或いは2辺のみを検出した。壁溝が残存するものもある。内部の柱穴は確認し得ていない。埋土はいずれも黒褐色粘質シルトである。

117竪穴住居（図9　図版9）

北東－南西方向に伸びる長さ3.0m以上、高低差0.04mの段差を検出した。住居址は段差の南側に展開する。柱穴は後世の攪乱のため、117竪穴住居に属するものを断定することはできない。遺物は出土していない。

118竪穴住居（図9　図版9）

南隅のみが残存する竪穴住居址であり、東西0.6m以上、南北2.0m以上を測る。竪穴の深さは0.15mの残存である。柱穴は後世の攪乱のため、118竪穴住居に属するものを断定することはできない。壁際には幅約0.2m、深さ0.03mを測る壁溝が巡る。遺物は出土していない。

119竪穴住居（図9　図版9）

北隅のみが残存する竪穴住居址であり、東西1.2m以上、南北2.6m以上を測る。竪穴の深さは0.10mの残存である。柱穴は後世の攪乱のため、119竪穴住居に属するものを断定することはできない。壁際には幅約0.2m、深さ0.03mを測る壁溝が巡る。トレンチ西壁の観察より柵122より新しく、建物811より古いことがわかる。120・121竪穴住居と重複するが、先後関係は不明である。遺物は出土していない。

120竪穴住居（図9　図版9）

北東隅のみが残存する竪穴住居址であり、東西0.8m以上、南北2.8m以上を測る。竪穴の深さは0.10mの残存である。柱穴は後世の攪乱のため、120竪穴住居に属するものを断定することはできない。壁際には幅約0.1m、深さ0.03mを測る壁溝が巡る。遺物は出土していない。

121竪穴住居（図9　図版9）

東西3.6m、南北2.3m以上を測り、東隅と西隅が残存する。竪穴の深さは0.10mの残存であり、柱穴は後世の攪乱のため、南東の809ピットのみが確認できた。809ピットは直径約0.2m、深さ0.04mを測る。壁際には幅約0.2m、深さ0.03mを測る壁溝が巡る。遺物は出土していない。

123竪穴住居〔図9　図版9〕

北西－南東方向に伸びる壁溝のみを検出した。長さ2.5m以上、幅約0.2m、深さ0.03mを測る。溝の伸びる方向が118竪穴住居と同一方向であり、118竪穴住居と123竪穴住居は同一の竪穴住居の可能性がある。そうすれば、1辺約6.1mの竪穴住居址となる。遺物は出土していない。

124竪穴住居（図9　図版9）

北西－南東方向に伸びる壁溝のみを検出した。長さ1.3m以上、幅約0.1m、深さ0.03mを測る。住居址は溝のどちら側に展開するか不明である。遺物は出土していない。

〔掘立柱建物〕（図10～16　図版10～12・14）

掘立柱建物を13棟検出した。主軸方向はN－5°－WからN－18°－WとN－1°－EからN－20°－Eとの2方向に分類することができる。調査トレンチが細長いため全体規模が明らかな建物は少ない。

建物115〔31～34・411ピット〕（図10　図版10・14）

1トレンチ中央部と2トレンチ東端にかけて検出した。N－5°－Wの方位を持ち、2間以上×2間以上の規模を有する。建物南北方向2.8m以上、東西方向3.0m以上、柱間間隔は1.4～1.6mを測る。ピッ

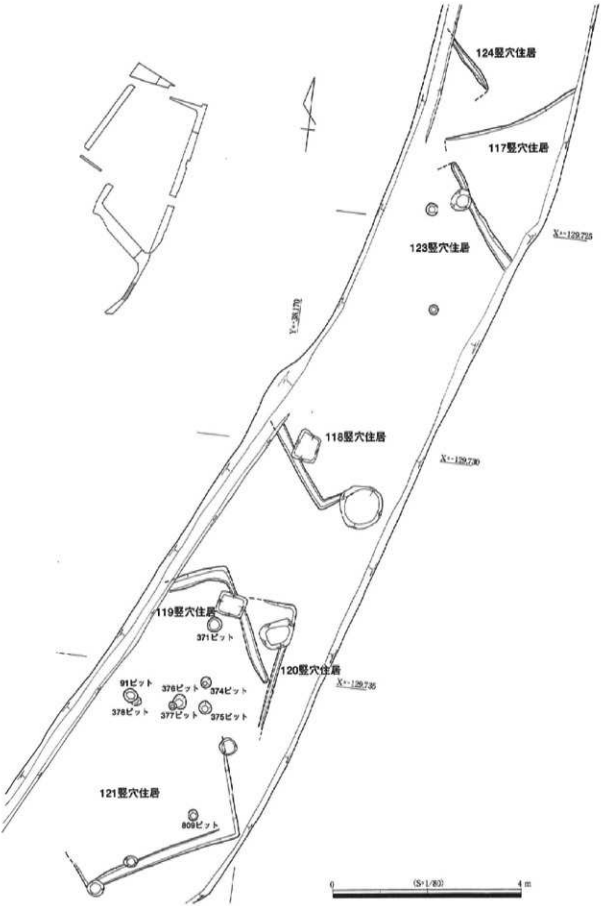

124竪穴住居
117竪穴住居
123竪穴住居
X=-129,725
118竪穴住居
X=-129,730
119竪穴住居
371ピット
120竪穴住居
X=-129,735
91ピット
378ピット
374ピット
378ピット
377ピット
375ピット
121竪穴住居
809ピット
0
(S=1/80)
4 m

図９　竪穴住居　平面図

トの平面形は0.7～1.0m×0.6～0.8mの隅丸長方形を基本とし、規模が大きい。

遺物は、土師器小片、須恵器杯蓋・甕等の小片が出土している。かえりを持たない須恵器杯B蓋の小片が31ピットから出土している。

建物416〔417～426・448～451ピット〕（図11・16　図版10・11・14　カラー図版1）

2トレンチ東半に位置する。N－18°－Wの方位を持ち、4間×3間の規模を有する。建物南北方向約7.0m、東西方向約4.6m、柱間間隔は1.6～1.8mを測る。ピット平面は1辺0.6～0.8mの方形を呈し、深さは約0.6mを測る。残存状況は良好で深い。420ピットは攪乱により削平を受けているにも係わらず、その位置を確認することができた。後述する410落ち込みの石列の下部から451ピットが検出されており、410落込に先行することが確認できている。

遺物は、426ピットから出土した土師器高杯（1）を図示しているほか、各ピットから土師器煮炊具、須恵器杯・高杯・甕の小片が出土している。須恵器杯H蓋が419ピットから、須恵器杯H身が422ピットから、脚部の2方に透かしを持つ須恵器高杯片が421ピットから出土している。

建物445〔412・414・427・429・433・438・447・553ピット〕（図12　図版10・14）

2トレンチ東端に位置する。N－1°－Eの方位を持ち、3間以上×1間の規模を有する。建物南北方向4.4m以上、東西方向約2.3m、柱間間隔は南北方向1.4～1.6m、東西方向約2.3mを測る。ピットの平面形は1辺0.3～0.7mの隅丸方形を基本形とする。

遺物は、土師器煮炊具、須恵器甕等の小片が出土している。

建物457〔452～456・459ピット〕（図13　図版11・14）

2トレンチ東半に位置する。N－16°－Wの方位を持ち、2間以上×2間以上の規模を有する。建物南北方向3.8m以上、東西方向3.7m以上、柱間間隔は約1.9mを測る。ピットの平面形は1辺0.3～0.5mの隅丸方形を呈する。建物458と重複するが、先後関係は不明である。遺物は、出土していない。

建物458〔460～465・519ピット〕（図13　図版11・14）

2トレンチ東半に位置する。N－16°－Wの方位を持ち、2間×2間の規模を有する掘立柱建物である。南北方向約3.1m、東西方向約2.7m、柱間間隔は1.3～1.6mを測る。ピットの平面形は1辺0.3～0.5mの隅丸方形を呈する。建物457と重複するが、先後関係は不明である。

遺物は、出土していない。

建物475〔468・473・474ピット〕（図14　図版11）

2トレンチ東半に位置する。N－21°－Wの方位を持ち、1間以上×1間以上の規模を有する。柱間間隔は1.4～2.0mを測る。ピットの平面形は1辺約1.0m×約0.7mの隅丸長方形を呈し、規模が大きい。

遺物は、468ピットから土師器と須恵器の小片が出土している。

建物477〔478～483ピット〕（図10　図版11・14）

2トレンチ西端に位置する。N－16°－Wの方位を持ち、2間×2間以上の規模を有する。建物南北方向約4.0m、東西方向3.7m以上、柱間間隔は1.5～2.5mを測る。ピットの平面形は1辺0.6～0.9mの隅丸方形を呈する。

遺物は、土師器煮炊具、須恵器甕の小片が出土している。

建物513〔61・62・131・148ピット〕（図15　図版14）

1トレンチ中央部に位置する。N－18°－Wの方位を持ち、2間×1間以上の規模を有する。調査区外西側に展開すると思われる。建物南北方向は約3.6m、柱間間隔は約1.8mを測る。ピットの平面形は直

径0.5～0.8mの円形或いは1辺0.5～0.7mの隅丸方形を呈する。

遺物は、土師器、須恵器甕の小片が出土している。

建物514〔484・485・498・694・697ピット〕（図14　図版11・14）

2トレンチ北西端に位置する。N－13°－Wの方位を持ち、東西方向2間以上、南北方向は2間の規模の約3.6mを推定することができる。建物東西方向は4.2m以上、柱間間隔は1.6～2.4mを測る。ピット平面形は1辺0.4～0.8mの隅丸方形或いは隅丸長方形を呈する。

遺物は、485ピットから土師器小片が少量出土している。

建物515〔488・489・677ピット〕（図14・16）

2トレンチ北西部に位置する。N－27°－Wの方位を持ち、1間以上×1間以上の規模を有する。調査区外北側に展開すると思われる。柱間間隔は南北方向で約1.4mを測る。ピットの平面形は、1辺0.6～0.8mの隅丸長方形または隅丸方形を呈する。

遺物は、土師器煮炊具、須恵器杯・甕の小片が出土している。須恵器杯H蓋（2）・須恵器杯H身（3）は489ピットから出土したものである。

建物516〔142・157～160ピット〕（図12　図版12）

3トレンチ南半に位置する。N－15°－Wの方位を持ち、南北方向2間、東西方向1間以上の規模を有する。建物南北方向は約3.6m、柱間間隔は約1.8mを測る。ピットの平面形は1辺0.4～0.6mの隅丸方形或いは円形を呈する。遺物は、出土していない。

建物810〔76・89・130・134・364ピット〕（図15　図版12）

1トレンチ南端に位置する。N－20°－Eの方位を持ち、2間×1間以上の規模を有する。調査区外東側に展開すると思われる。建物南北方向約3.8m、柱間間隔は約1.9mを測る。ピットの平面形は1辺0.5～0.6mの方形を呈する。

遺物は、土師器杯小片、製塩土器の可能性がある小片などが出土している。

建物811〔71・75・84・111・372ピット〕（図15　図版12・14　カラー図版2）

1トレンチ南端に位置する。N－11°－Eの方位を持ち、2間以上×1間以上の規模を有する。調査区外東西側に展開すると思われる。建物南北方向は約3.8m、東西方向は4.2m以上、柱間間隔は約2.0mを測る。ピットの平面形は1辺0.7～0.9mの隅丸方形を呈する。切り合い関係から118～120竪穴住居、柵122より後出する。

遺物は、土師器、須恵器甕等の小片のほか、製塩土器の可能性のある小片も出土している。

〔柵〕（図16・17　図版12～14）

柵を5列検出した。主軸方向は掘立柱建物と同様である。

柵113〔1～4ピット〕（図17　図版12・14）

1トレンチ北半中央部に位置する。N－7°－Eの方位を有する3間以上の柱列である。延長4.5m以上、柱間間隔は1.2～1.8mを測る。ピットの平面形は2～4ピットでは1辺0.5～0.6mの隅丸方形を呈する。ピット列東側の調査区外にピットが展開する可能性もあり、建物も想定される。

遺物は、須恵器の小片が出土している。

柵122〔83・365～368ピット〕（図17　図版12・13）

1トレンチ南端に位置する。N－67°－Eの方位を有する4間以上の柱列である。延長5.4m以上、柱間間隔は1.0～1.7mを測る。ピットの平面は1辺0.4～0.8mの隅丸方形を呈する。119・120竪穴住居、建

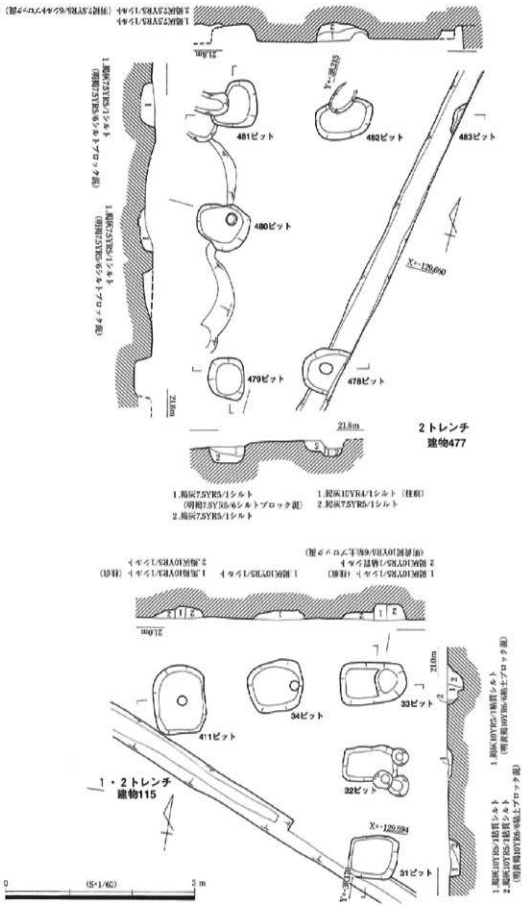


図10　建物115・477　平面・断面図

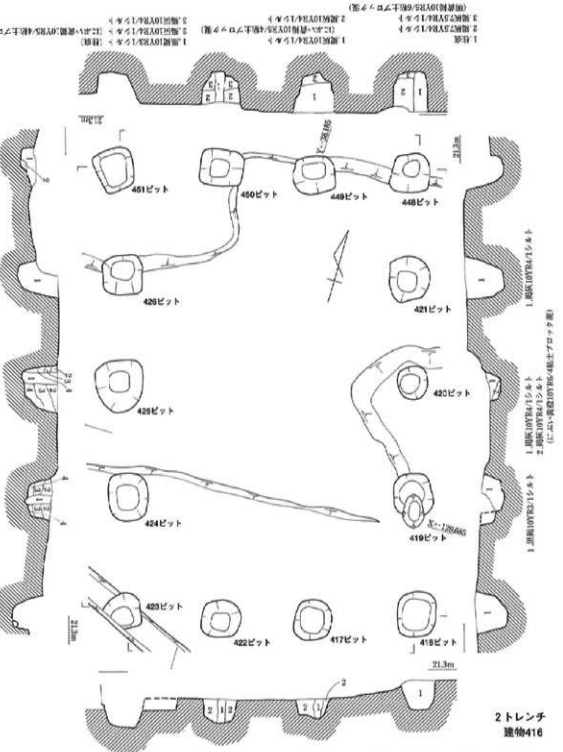


図11　建物416　平面・断面図

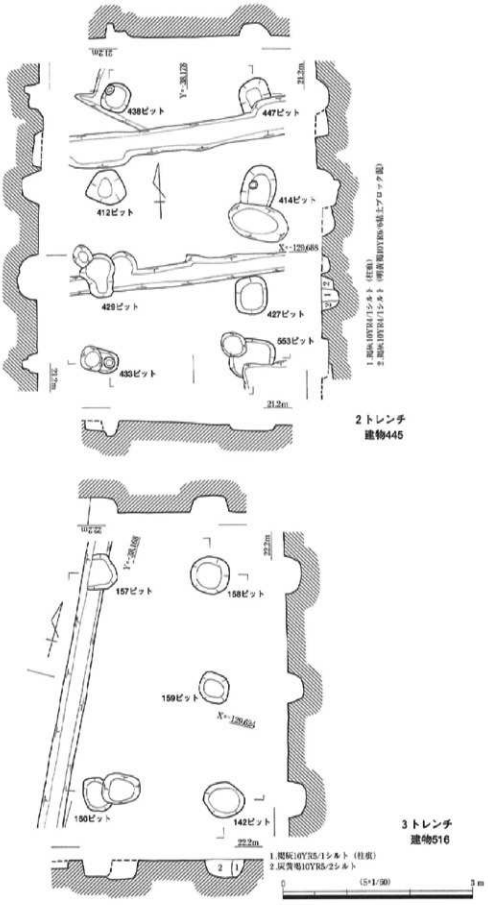


図12　建物445・516　平面・断面図

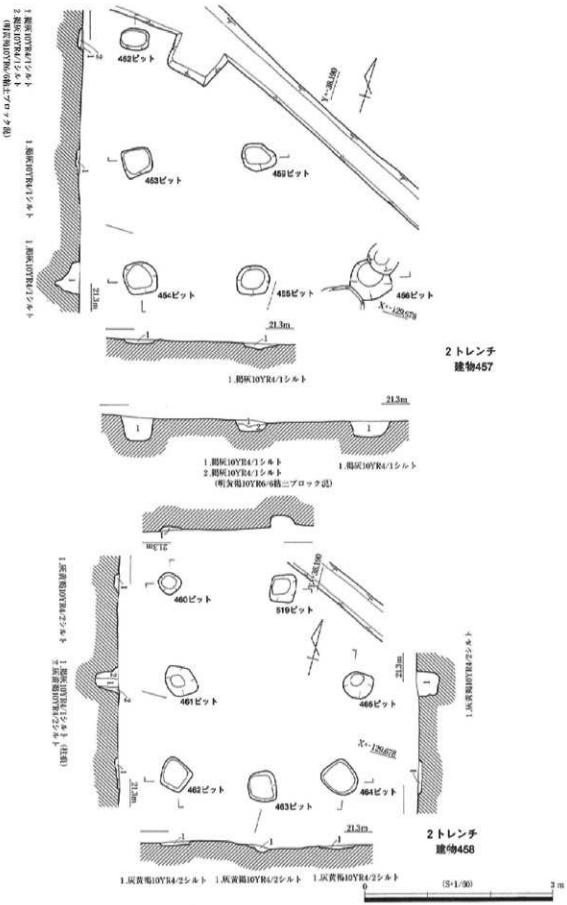


図13　建物457・458　平面・断面図

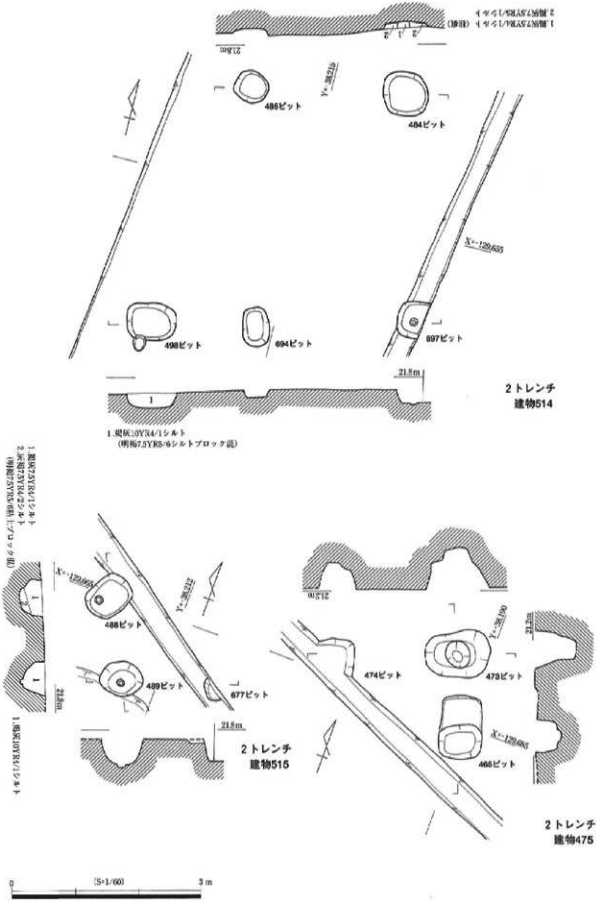


図14　建物475・514・515　平面・断面図

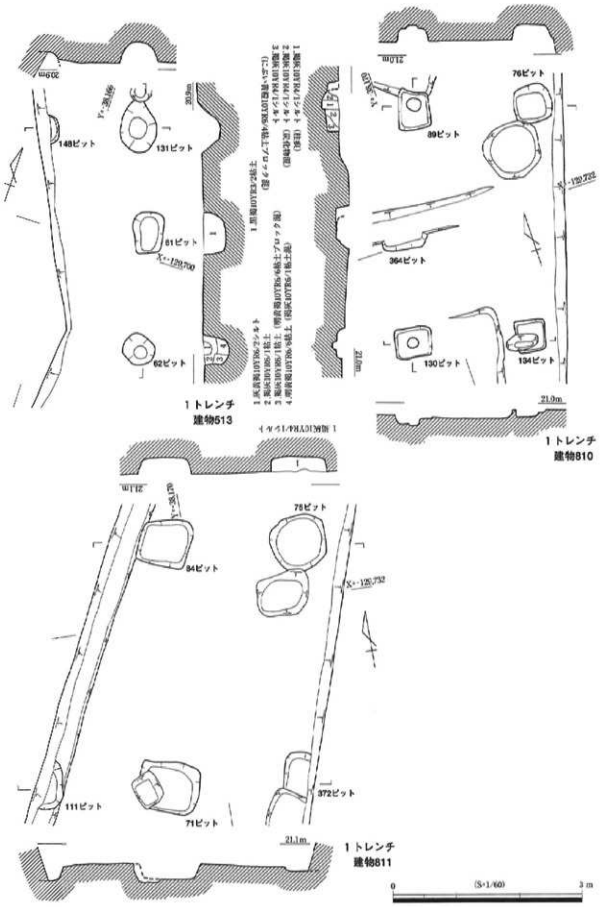


図15　建物513・810・811　平面・断面図

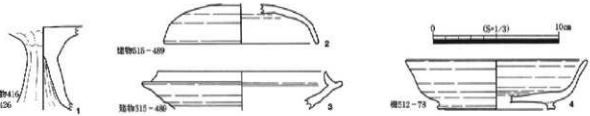


図16　建物416・515　柵512　出土遺物

物811よりも古く、柵512とも重複関係を有する。

遺物は、土師器の小片が出土している。

柵162〔149～154ピット〕(図17　図版13・14)

7トレンチ北端に位置する。N－5°－Eの方位を有する6間以上の柱列である。延長11.0m以上、柱間間隔は約1.8mを測る。153ピットと154ピットの間は攪乱のため、ピットの存在は確認できなかった。また、北端の154ピットから北側や南端の149ピットの南側は双方共、攪乱があるため、柱列が続くか不明である。遺物は、出土していない。

柵512〔78・81・92・109・133ピット〕(図16・17　図版12)

1トレンチ南端に位置する。N－17°－Eの方位を有する4間以上の柱列である。延長7.0m以上、柱間間隔は1.5～2.0mを測る。78ピットが北端となる。133ピットの南側に、さらに続くか不明である。ピットの平面は1辺0.5～0.8mの方形を呈する。

遺物は、土師器、須恵器の小片が出土している。須恵器杯B（4）は、78ピットから出土したものである。

〔ピット〕(図18・19　図版16)

以上の建物・柵の他に残存状況が良好な方形ピットが検出されている。

1トレンチ南端では1辺約0.8mを測る**86・132・135・348ピット**が検出されたが、建物・柵の復元は不可能であった。

図18に各トレンチで検出した方形ピットの断面図を掲載している。**28・41・87・88ピット**は、1トレンチ中央から南部に位置する。1辺0.6～0.7mの隅丸方形である。**486・487・497ピット**は、2トレンチ北西部に位置し、1辺0.7～0.8mの隅丸方形である。**137・141・144ピット**は、3トレンチ南端に位置する。1辺0.6～0.7mの隅丸方形である。**145・146ピット**は、3トレンチ中央部に位置し、1辺約0.7～0.8mの隅丸方形である。**505ピット**は、4トレンチ東部に位置し、1辺約0.5mの方形である。

また、1トレンチ南端・中央部、2トレンチ北西端部では、直径0.3m前後の小規模な円形のピットを多く検出している。

ピット出土遺物は、図19に実測図を掲載している。全体的に小・細片が多く、図化可能なものは少なかった。大半が土師器、須恵器で、土師器には煮炊具、須恵器には杯・高杯・甕などがある。須恵器のうち、杯と判別できる破片は数点で、杯Bが1トレンチの**42ピット**（5）、2トレンチの**486・501ピット**から、かえりを持たない杯B蓋が3トレンチの**138ピット**から出土している。杯B身は総じて受部の短いものであり、7世紀代を中心とする時期が考えられる。

そのほか、ごく少数ではあるが、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類椀、緑釉陶器が出土してい

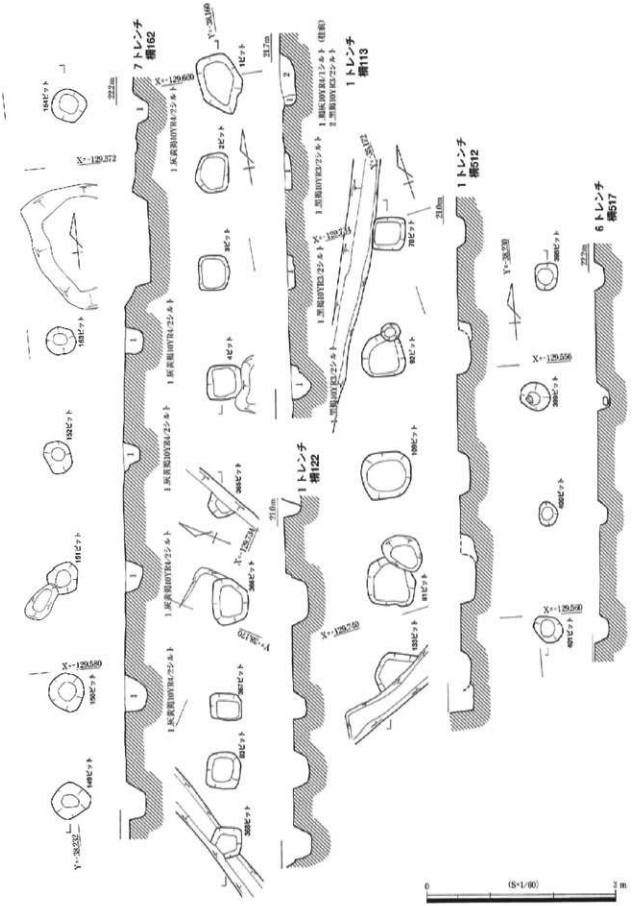


図17　柵113・122・162・512・517　平面・断面図

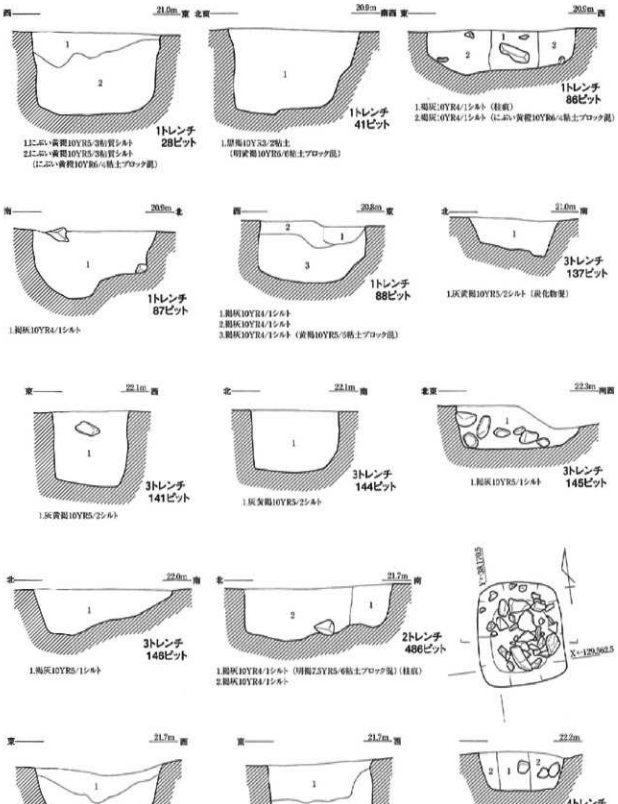


図18　28・41・86～88・137・141・144～146・486・487・497・505ピット　平面・断面図

る。いずれも小規模な円形ピットから出土しており、1トレンチの**23・29・38・77**(7)**・85・96・106・107**(240)**・143ピット**、2トレンチの**493・494**(8)**・500・502・508ピット**などである。「て」字状口縁土師器皿は、総じて器壁の薄いものであり、10世紀中・後葉を中心とする時期のものと考えられる。

〔土坑〕(図19・20　図版15・16)

470土坑（図20）

2トレンチ中央部に位置する。南西側が側溝で全形が不明であるが、東西が約1.0mの平面隅丸方形または長方形であると思われる。深さは約0.1mである。土師器甕の破片が出土している。土師器甕片は、ほとんど接合せず、図化できなかった。体部片にハケ目がみられる。ほかに須恵器甕片も1点出土している。

492土坑（図20　図版15）

2トレンチ中央部に位置する。約2.7m×1.3mを測る平面隅丸長方形である。断面形態は壁面途中に稜

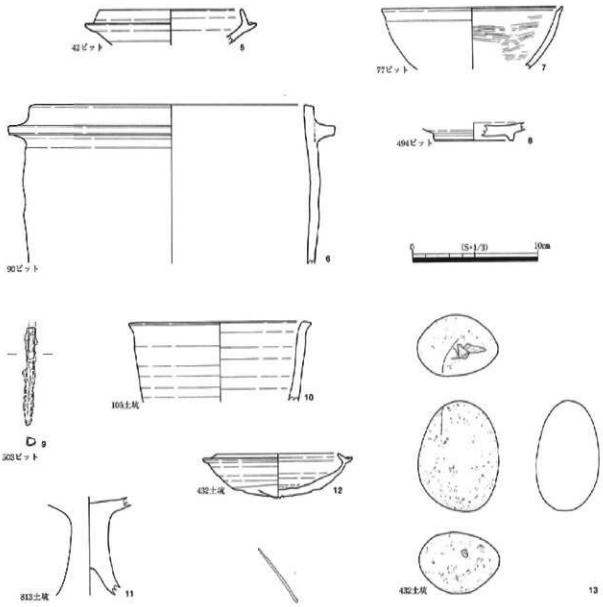


図19　42・77・90・494・503ピット　105・432・813土坑　出土遺物

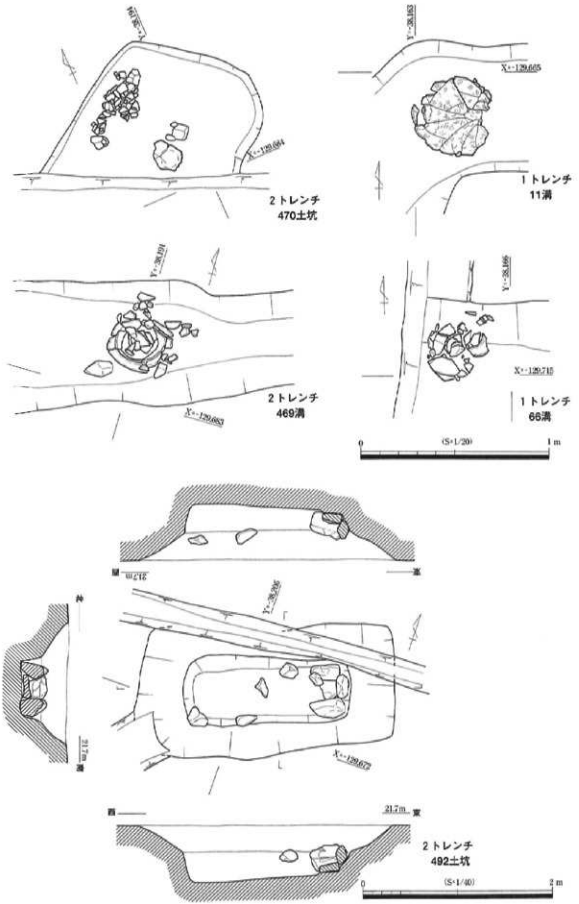


図20　470土坑　11・66・469溝　平面図　492土坑　平面・立面図

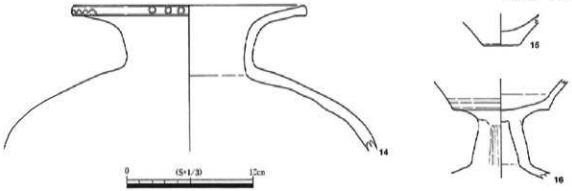


図21　66溝　出土遺物

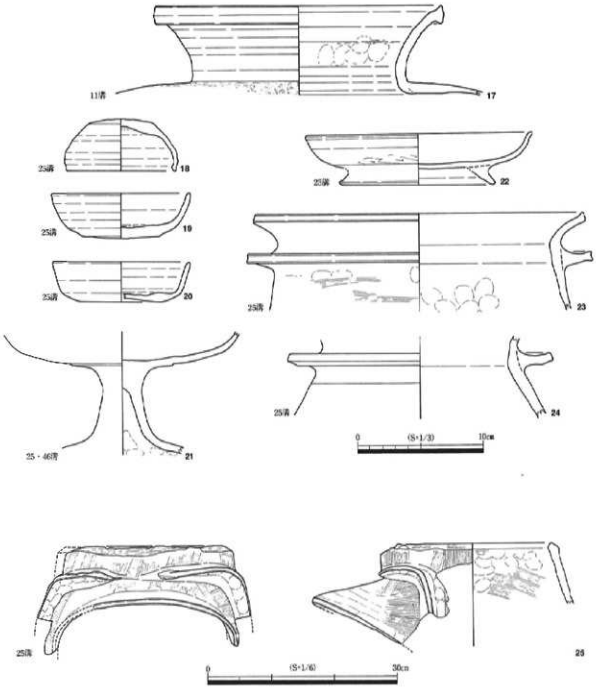


図22　11・25・46溝　出土遺物

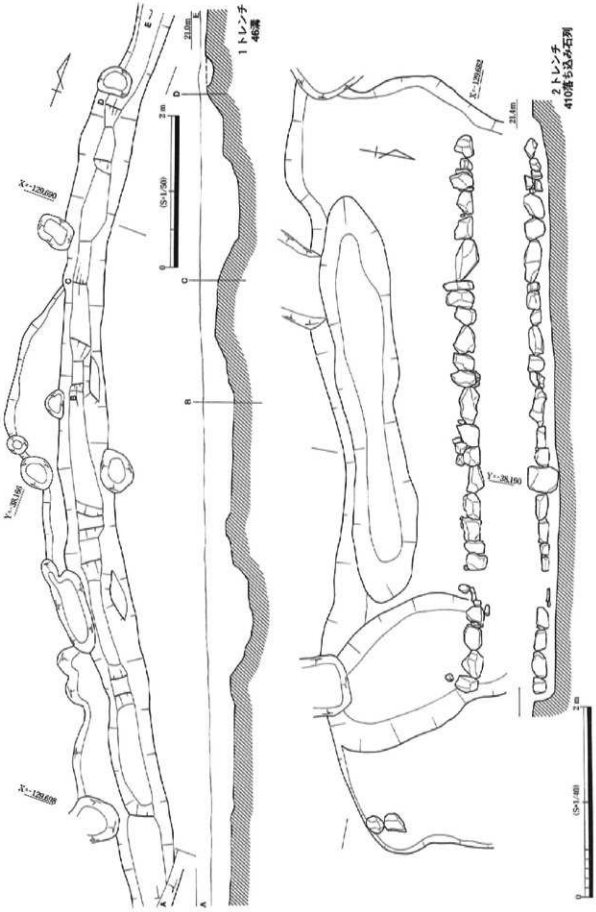


図23　46溝・410落ち込み石列　平面・立面図

線を有した2段掘りを呈しており、底面は約1.6m×0.5mを測る。底部の壁面には石組が貼り付いており、東端には3方を囲み、底面には平坦な石が設置してあった。この石は中央部に向かって約15°傾斜している。東端以外に南縁中央、南西隅、北壁中央にも石が貼り付いている。また、土坑中央の浮いた地点にも石が検出されている。このような状況から、四周に石が巡っていたことが考えられる。墓の性格が想定できる遺構である。遺物はまったく出土していないが、埋土の観察から古代に属する遺構と考えられる。

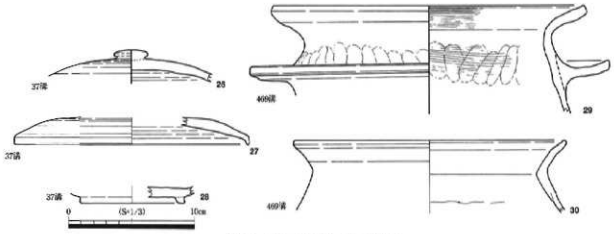


図24　37・469溝　出土遺物

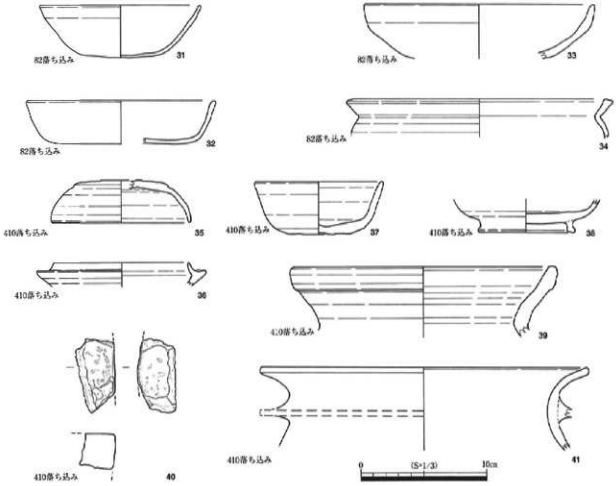


図25　82・410落ち込み　出土遺物

〔溝〕（図20・22～24　図版15・16）

11溝（図20・22　図版16）

1トレンチ北部に位置する平面カギ型の溝である。幅0.5～0.7m、深さ約0.2mである。屈曲部分で須恵器甕片（17）が出土した。外面にタタキ目痕、内面に同心円状当て具痕が認められる。

25溝（図22　図版15・16）

46溝に切られている遺構である。屈曲しながら南北方向に伸びており、調査区外の北方向へも続いていると思われる。北部分で幅1.0～1.6m、深さ約0.1m、断面形態は椀状を呈している。

遺物は、土師器皿B（22）・羽釜（23・24）・竈（25）、須恵器杯H蓋（18）・杯G身（19）・甕等が出土している。20は、須恵器杯GもしくはAか。土師器高杯（21）は46溝出土のもの、竈（25）は包含層出土のものと接合した。竈は曲げ庇と付け庇の両方を持ち、付け庇には前面部分で途切れる部分がある。破片数が少ないため、突帯の有無は不明である。7～8世紀前葉のものと思われる。

37溝（図24）

1トレンチ中央部に位置する南北方向に伸びる溝である。調査区外の南東方向へ続いていると思われる。検出長約5.8m、幅0.6～0.9m、深さ約0.1～0.3mを測り、底面のレベルは南の方が低い。

遺物は、須恵器杯B蓋（26・27）・杯B（28）のほか、土師器煮炊具、須恵器甕などの小片が出土している。

46溝（図22・23　図版15・16）

1トレンチ中央部に位置する南北方向に伸びる溝である。幅0.3～0.4mを測り、底面は約1.0m毎にブリッジ状の凸部が見られる。また、溝の南側は大阪府教育委員会調査地で検出されている溝と連なる可能性がある。

遺物は、土師器煮炊具、須恵器杯H身・甕などの小片が出土している。杯Hには「－」のヘラ記号を持つものがある。土師器高杯（21）は、25溝出土のものと接合した。時期のわかる遺物は少ないが、6世紀後葉～7世紀のものが認められる。

469溝（図20・24　図版16）

2トレンチ中央に位置する東西方向の溝である。長さ約4.3m、幅0.6～0.7m、深さ0.2～0.3mで、底面のレベルは東側が低い。

遺物は、土師器羽釜（29）・甕（30）が出土している。

〔落ち込み〕（図23・25　図版15・17）

82落ち込み（図25　図版17）

1トレンチ南端に位置する。調査区外に展開するため、全形は不明である。深さは約0.1mである。

遺物は、土師器杯A（32）・椀（31）・鉢（33）、製塩土器（241）、須恵器甕（34）のほか、土師器皿・小型甕・長胴甕などが出土している。8世紀のものと思われる。土師器片が77ピット出土のものと接合している。

410落ち込み（図23・25　図版15・17）

2トレンチ中央に位置する。東西約9.4m、南北9.0m以上の規模を有し、逆L字形を呈する。落ち込みの南端に約6.0mの石列を検出した。人頭大の石を並べ、石列北側の面を揃える。落ち込み東端にはこの石列から離れて2石が方向を90°違えて設置されていたが、本来、一連の石列と考えたい。石列南側の裏込め埋土と北側の落ち込み埋土には差がなく、褐灰色シルトである。落ち込みの平面形、石列共に建

物416・457・458・475と同一の方向を指向する。

410落ち込みは建物416・457・458との切り合い関係から後出する遺構であるが、これら建物の時期と大差ない時期にあたると考えられる。

遺物は、土師器羽釜（41）、須恵器杯H身（36）・杯H蓋（35）・杯B（38）・甕（39）、砥石（40）等が出土している。37は、須恵器杯Aもしくは杯Gか。ほかに図化できなかったが、土師器高杯も出土している。また、石列裏込めからは土師器煮炊具、須恵器甕が、石列下部からは土師器煮炊具、須恵器杯H身が出土している。7～8世紀前葉のものと思われる。

4）中世

〔柵〕（図17　図版13）

柵517〔ピット398～401〕（図18　図版13）

6トレンチ西側に位置する。N－5°－Eの方位を有する3間以上の柱列であり、総延長5.6m以上を測る。398ピットが北端となる。ピットは直径約0.4mの円形である。埋土の観察から中世の時期が考えられる。遺物は、出土していない。

〔ピット〕

140ピット

3トレンチ北部に位置する。径約0.4m、深さ約0.3mである。図化できなかったが瓦器椀の小片が出土している。和泉型で、12世紀後葉～13世紀のものと思われる。

14ピット

1トレンチ中央部に位置する。東西約0.3m、南北約0.4mの楕円形で、深さ約0.4mである。

遺物は、黒色土器A類、須恵器、白磁碗の小片が出土している。白磁碗は、口縁端部外面に小さな玉縁がつくものである。

〔溝〕

518溝

5トレンチで東西方向に伸びる幅約0.3mの溝を検出した。埋土の観察から中世の時期が考えられる。遺物は、出土していない。

小結

遺構出土遺物には、弥生時代後期、7～10世紀、12世紀後葉～13世紀のものがある。なかでも土師器の杯A・高杯・皿B・椀・鉢・甕・羽釜・竈、須恵器の杯B・杯B蓋・杯H・杯H蓋・杯G・高杯・甕、砥石等、7～8世紀のものが多くを占めている。そのほか、少数の弥生土器壺・高杯、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類椀、緑釉陶器、瓦器椀、白磁碗等がある。

弥生時代の遺構には1トレンチ南部で検出した東西方向の溝がある。弥生時代後期のものと思われる。

1トレンチ南端において竪穴住居址を7棟検出した。出土遺物はないが、東側に隣接した大阪府教育委員会調査地検出の竪穴住居址が7世紀前葉～中葉までのものと報告されており、当調査地の竪穴住居址もこれらと同様の時期と想定できる。

また、1・2トレンチを中心として合計13棟の掘立柱建物を検出した。他に柱穴列を5列検出したが、調査区が細長いため建物となるか柵となるか不明なものもある。これらの掘立柱建物・柵は6トレンチ

の柵517以外、古代に属すると考えられる。2トレンチで検出した410落ち込みは、切り合い関係から建物416・457・458より新しく位置づけることができるが、出土遺物から、大きく離れた時期のものではない。同じく2トレンチで検出した492土坑は、石組を伴う墓坑の可能性がある。

10世紀中・後葉を中心とする時期の遺構は、1トレンチ南部、中央部、北西部に分布している。比較的小規模な円形のピット群である。

5・6トレンチの柵517、518溝は、明瞭な遺物は出土していないが、周辺の既調査の成果から12～13世紀を中心とした時期が推定できる。

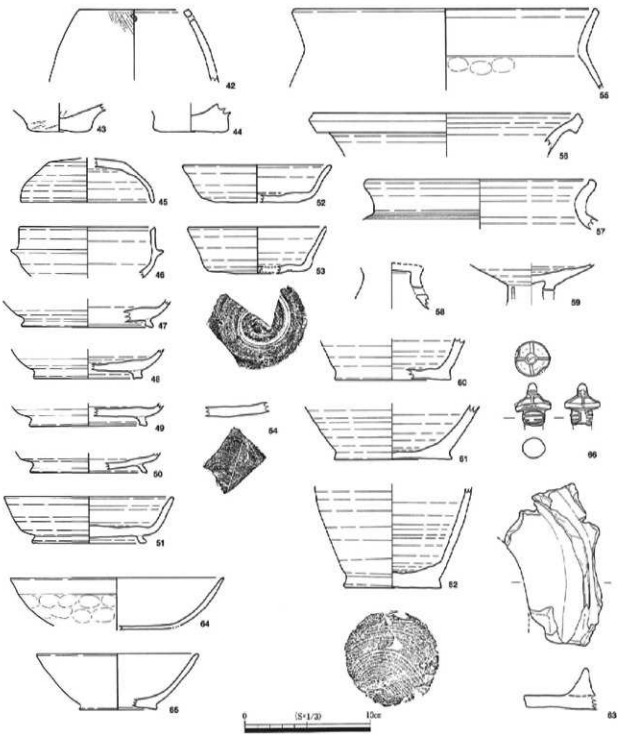


図26　包含層（1～3トレンチ）　出土遺物

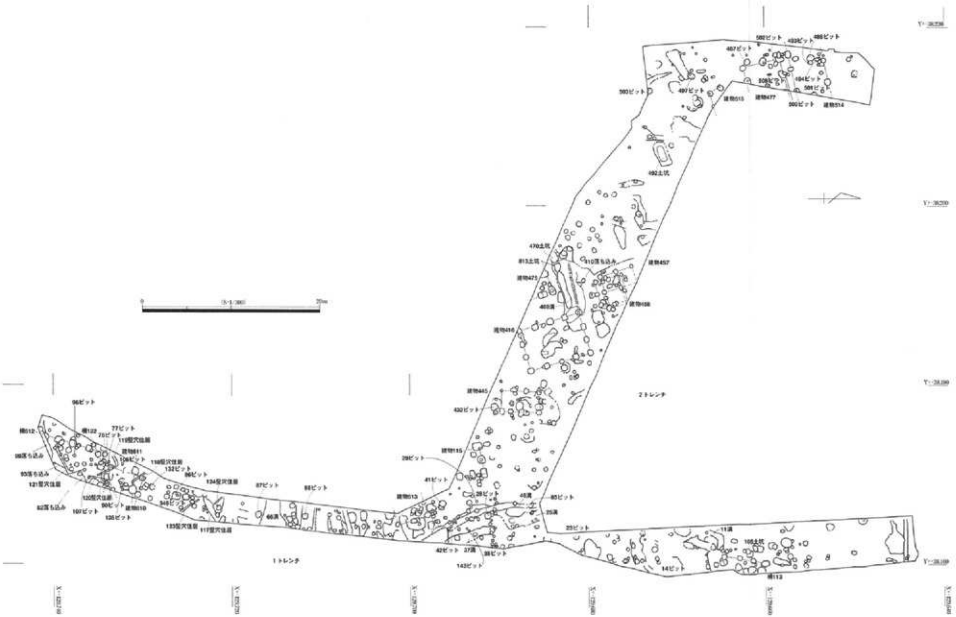


図27　1・2トレンチ　平面図

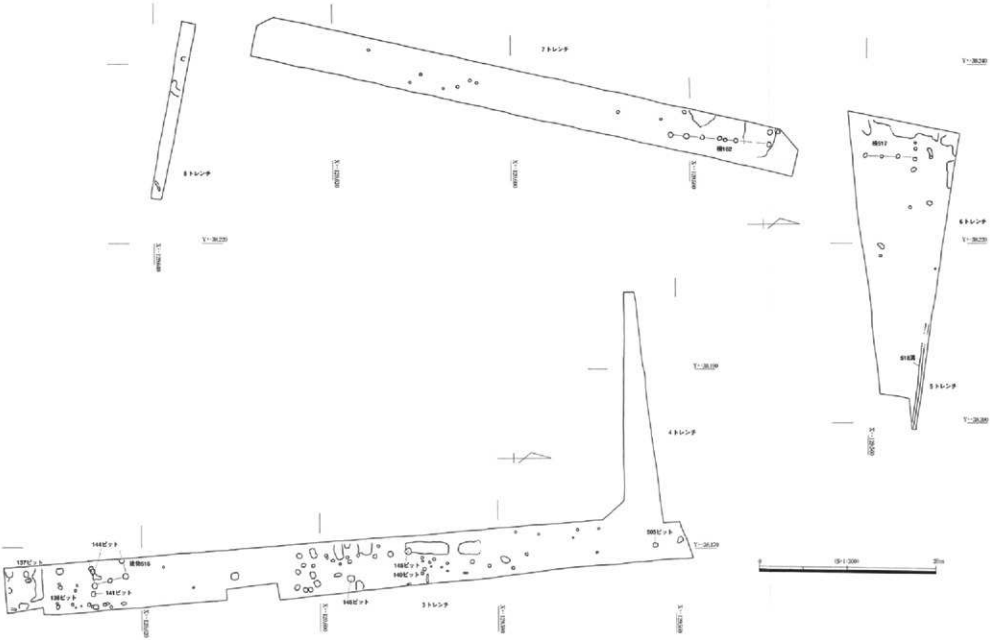


図28 3～8トレンチ 平面図

第２節　03－１調査区

第１項　層序と地形

基本層序は、表土層（第１層）、作土層（第２層）、古代包含層（第３層）、基盤層である。

表土層の土色・土質は、褐灰10YR5/1・シルト～極細砂で極細砂～細砂を少し含む、である。場所により現代の盛土、アスファルトがある。作土層は複数層存在し、その土色・土質は、灰黄褐～にぶい黄橙10YR6/2～6/4・細砂を含むシルトやシルト～極細砂等である。包含層の土色・土質は、にぶい黄褐10YR5/3・シルト～粘土で極細砂～細砂を含み、粗砂を少し含む、である。基盤層は、おおよそ最上層が細砂を含むシルト、その下層が小礫を多く含むシルト、さらに下層が礫層である。

遺構面の地形は、１トレンチ北半がT.P.約21.4mで最も高く、３トレンチ南東端から５トレンチ南部にかけてがT.P.約20.9mと低くなっている。最も低いのは、５トレンチ南部のX=-129,647～659m辺りで、T.P.約20.8mである。

包含層は３トレンチと５トレンチの最も低い部分、２トレンチ南西部分に遺存していたのみである。そのほかの大部分では包含層がなく作土層の直下が基盤層であり、さらに１トレンチ北部では作土層もなく現代表土層の直下が基盤層であった。水田造成や現代の宅地造成の際に、包含層・作土層が削平されたと思われる。削平は、全体的に包含層にとどまらず、基盤層にまで及んでいると考えられる。特に１トレンチ北半部では現代表土を除去すると基盤層でも下層の礫層が露出し、大きく削平を受けたことが想定される。この部分で遺構を全く検出しなかったのは削平の影響であろう。同様な状況は、５トレンチ北端部、２トレンチ東部・北半部にも認められる。水田、宅地と、平坦化を指向する開発が進むなかで、地形の高い箇所ほど削平が進んでいったと考えられる。なお、５トレンチ北端・南端部で、基盤層上面から深さ１m以上の確認トレンチを掘削したが、縄紋土器、旧石器等はみられなかった。

第２項　遺構と遺物

１～５の各トレンチで、ピット・土坑・溝等の遺構を検出した。最も多く検出したのはピットであり、掘立柱建物・柱列を復元した。

〔掘立柱建物〕（図31～39　図版21～25・31）

１トレンチで１棟、２トレンチで６棟、３トレンチで１棟、４トレンチで１棟、５トレンチで４棟、計13棟の掘立柱建物を復元した。

建物１〔５・14・15ピット〕（図31　図版21）

１トレンチ南端に位置する。トレンチの壁面で確認したピットを含む南北２間の柱列であるが、調査区外の南西に展開する建物と想定している。方位はN－19°－Wである。柱間は約1.7mで、ピットの平面形は径約0.7mの円形である。

遺物は、土師器小片が出土している。

建物２〔９～13ピット〕（図31　図版21・25）

３トレンチに位置する。方位はN－15°－Wで、規模は南北３間以上×東西１間以上、4.5m以上×1.9m以上である。調査区外の南東に続いていると思われる。柱間は1.3～1.9mで、南北方向では南にいくほど狭くなっている。ピットの平面形は径0.6～0.7mの円形である。

遺物は、土師器煮炊具等の小片がすべてのピットから出土している。

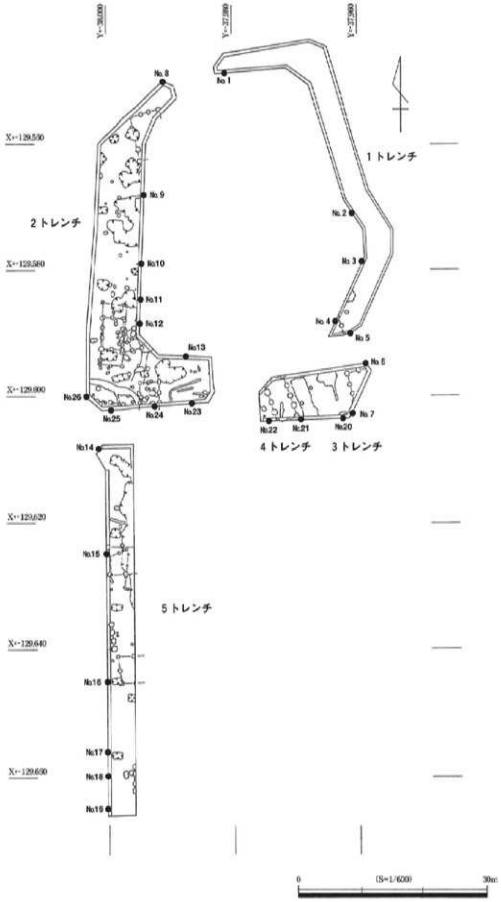

Y=-26,000
Y=-27,980
Y=-27,960
X=-129,500
X=-129,580
X=-129,600
X=-129,620
X=-129,640
X=-129,660
No.1
No.2
No.3
No.4
No.5
No.6
No.7
No.8
No.9
No.10
No.11
No.12
No.13
No.14
No.15
No.16
No.17
No.18
No.19
No.20
No.21
No.22
No.23
No.24
No.25
No.26
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
0
(S=1/600)
30m

図29　基本層序位置図

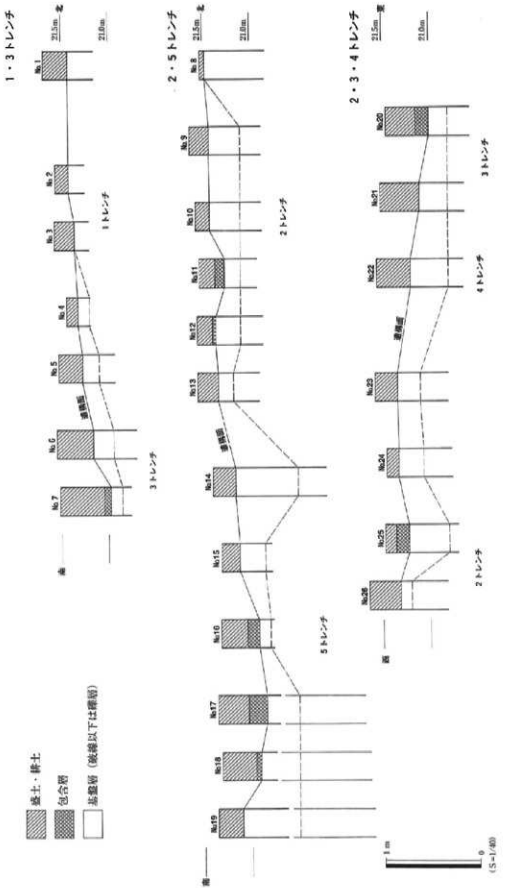

1・3トレンチ
2・5トレンチ
2・3・4トレンチ
21.5m
21.0m
1トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
4トレンチ
5トレンチ
2トレンチ
3トレンチ
遺構面
盛土・埋土
包含層
基盤層（礫層以下は標層）
1m
0
(S=1/40)

図30　基本層序

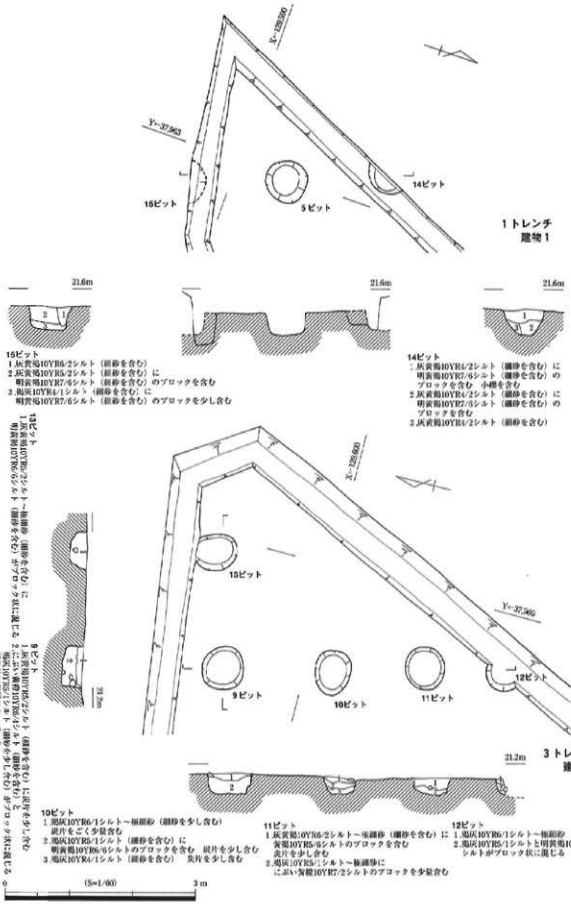


図31　建物1・2　平面・断面図

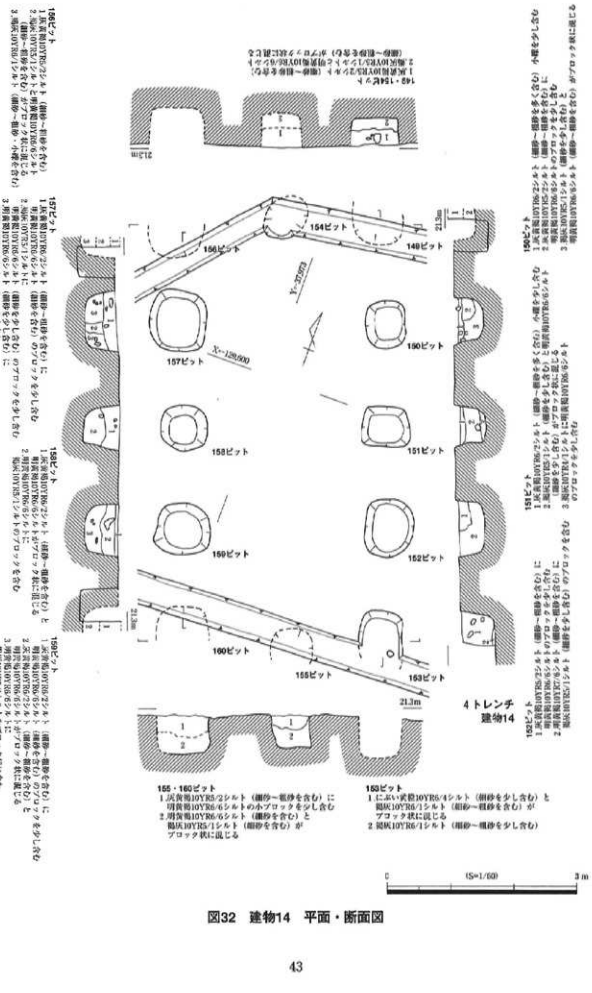


図32　建物14　平面・断面図

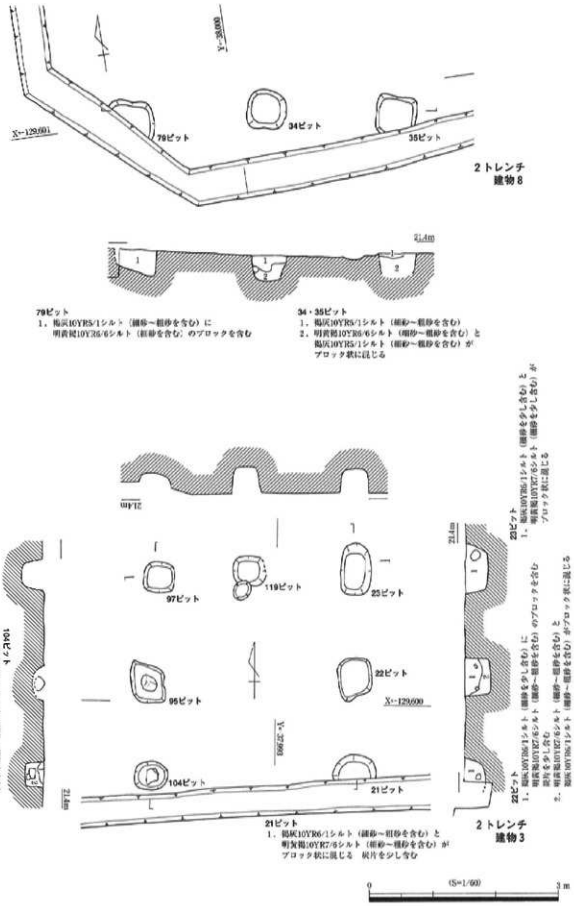


図33　建物3・8　平面・断面図

建物3〔21～23・95・97・104・119ピット〕（図33　図版22）

2トレンチ南端に位置する。方位はほぼ正方位で、規模は南北2間以上×東西2間、約3.3m以上×3.2mである。調査区外の南へ続いていると思われる。柱間は1.5～1.7mである。ピットの平面形は、1辺0.5～0.8mの隅丸方形である。95・104ピットの底面で、根石と思われる石を検出している。

遺物は、土師器杯または皿・甕・羽釜、須恵器杯B・杯B蓋・甕等が小片で出土している。須恵器杯Bが97ピットから、かえりを持たない杯B蓋が119ピットから出土している。

建物4〔36～42ピット〕（図36　図版21・25）

2トレンチ北端に位置する。方位はN－11°－Wで、規模は南北4間×東西3間、約7.4m×4.6m、面積は約35.4㎡である。調査区外の南東に続くが、調査区東壁の断面でピットを確認していないため、西辺と北辺のピットはすべて検出していると考えられる。40ピットと41ピットの間では、攪乱によってピットが1基失われたと思われる。柱間は1.3～1.9mで、一定ではない。ピットの平面形は、1辺0.5～0.7mの隅丸方形である。遺物は、出土していない。

建物5〔45・47～52・56ピット〕（図34・39　図版22・25）

2トレンチ南部に位置する。方位はN－3°－Eで、規模は南北3間×東西2間、約5.0m×3.3m、面積は約16.5㎡である。柱間は1.5～1.8mである。ピットの平面形は、0.5～0.7mの隅丸方形である。

建物6・7と重複している。建物5の51ピットが建物6の57ピットに切られており、建物5は建物6より古い。また、建物5の48ピットが建物7の71ピットを切っており、建物5は建物7より新しい。南東隅と南西隅のピットは、建物6の46・54ピットと重複していると思われる。

遺物は、土師器煮炊具等、製塩土器、須恵器の小片が出土している。52ピットからは土師器皿（67）・須恵器甕（68）のほか、小さなかえりを持つ須恵器杯蓋の小片が出土している。

建物6〔19・31・46・53・54・57・58・65・81・112・168ピット〕（図35・39　図版22・31　カラー図版4）

2トレンチ南部に位置する。方位はN－3°－Eで、規模は南北4間×東西2間、約9.7m×3.7m、面積は約35.9㎡である。柱間は、西辺では2.4m、東辺では南端が2.7mになる以外は2.3m、南辺では1.8mと一定である。ピットの平面形は1辺0.4～0.7mの隅丸方形である。

建物5・7と重複している。ピットの切り合い関係から、建物6は建物5・7より新しい。

遺物は、土師器皿・煮炊具、製塩土器、須恵器杯・杯蓋・甕等の小片が出土している。特に19ピットの埋土には比較的多数の小片が含まれていた。須恵器杯A（70）は19ピットから出土したものである。土師器皿B（71）は54ピットから出土したものである。体部内面に斜放射状暗紋を、外面に横方向の粗いヘラミガキを施す。ほかに小片で図化できなかったが、製塩土器片（251）も出土している。須恵器杯B（69）は31ピットから出土したものである。須恵器B・杯B蓋は、小片のため図化できなかったが46・57・81ピットからも出土している。また、81ピットからは須恵器杯H片が出土している。

建物7〔60～64・71・88・110・113ピット〕（図36・39　図版22・25）

2トレンチ南部に位置する。方位はN－16°－Wで、規模は東西2間×南北2間、約3.1m×3.2m、面積は約9.9㎡である。調査区東壁の断面でピットを確認していないため、調査区外の東に続いている可能性は低い。柱間は、南北方向では約1.6m、東西方向西半では約1.7m、東半では約1.5mである。ピットの平面形は、径0.5～0.8mの楕円形である。

建物5・6と重複している。ピットの切り合い関係から、建物7が最も古いと思われる。

遺物は、土師器杯・皿・甕・羽釜、製塩土器、須恵器杯・甕が小片で出土している。64ピットからは

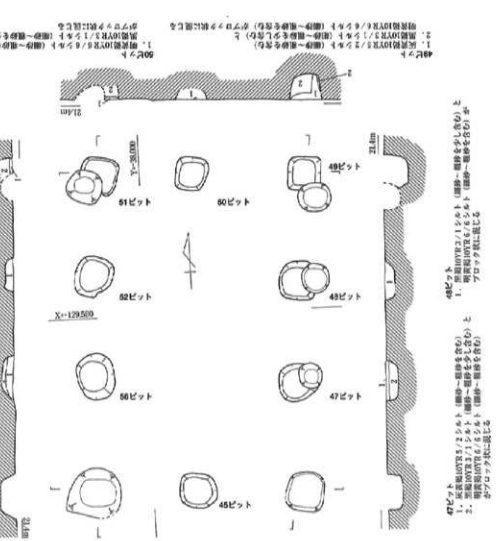


図34　建物5　平面・断面図

土師器甕（74）、須恵器杯B（73）・蓋（72）のほか、製塩土器、口縁端部の肥厚する土師器片が出土している。

建物8〔34・35・79ピット〕（図33・39　図版22）

2トレンチ南西端に位置する。東西2間の柱列であるが、調査区外に展開する建物と想定している。方位はN－8°－Eである。柱間は約2.1mで、ピットの平面形は1辺約0.6mの隅丸方形である。

遺物は、34・35ピットから土師器杯・甕、須恵器杯・杯蓋・甕の小片が出土している。土師器皿A（75）は35ピットから、須恵器杯B（76）は34ピットから出土したものである。34ピットからは須恵器杯B蓋片も出土している。

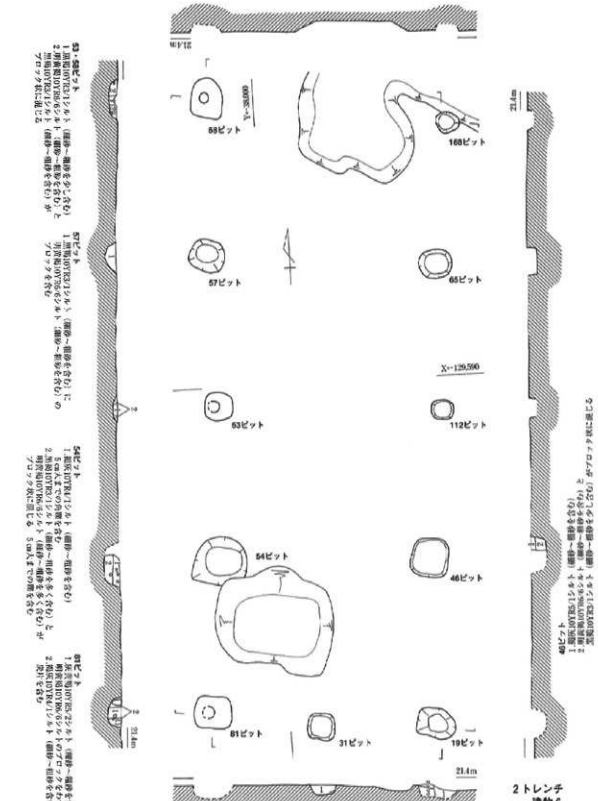


図35　建物６　平面・断面図

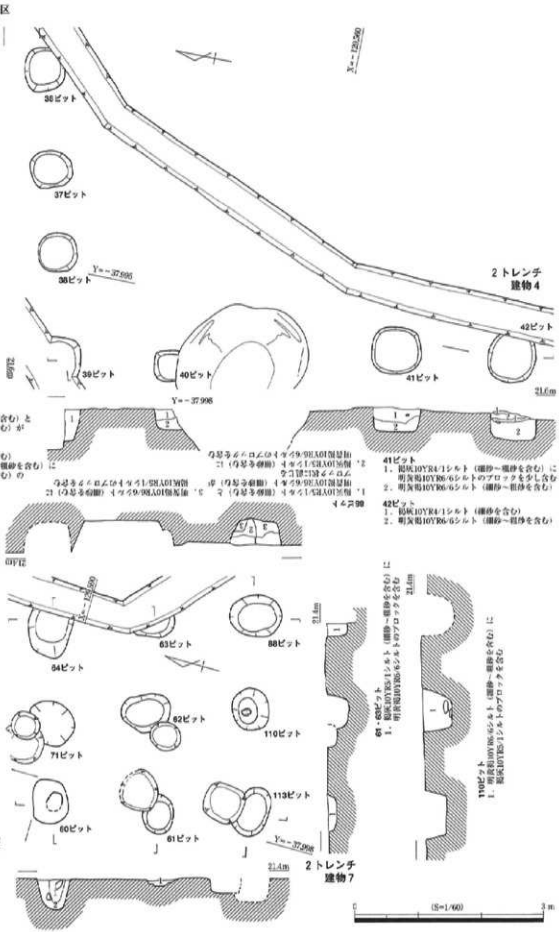
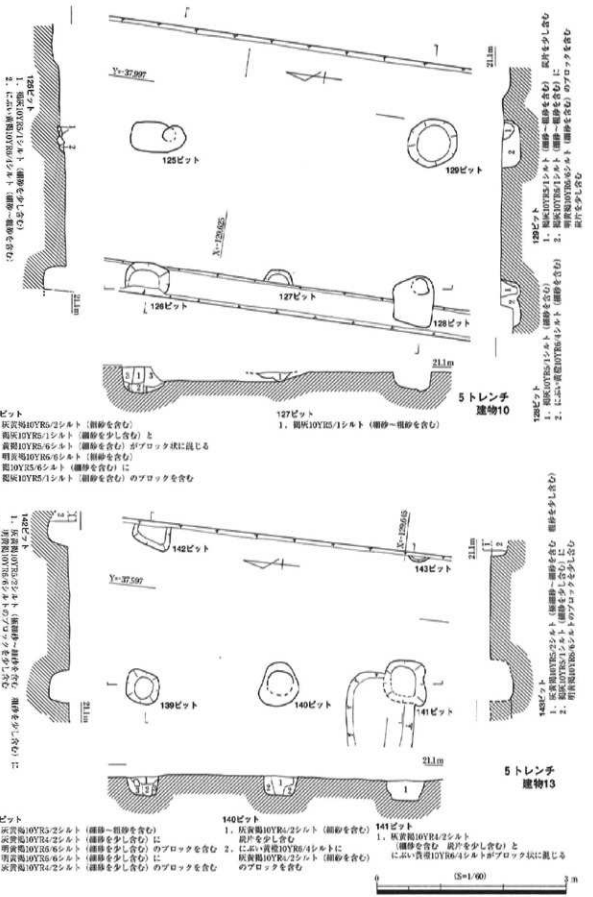


図36　建物４・７　平面・断面図



126ピット
1．灰黄褐10YR5/2シルト（細砂を含む）
2．褐灰10YR5/1シルト（細砂を少し含む）と
黄褐10YR5/6シルト（細砂を含む）がブロック状に混じる
3．明黄褐10YR6/6シルト（細砂を含む）
4．黄10YR5/6シルト（細砂を含む）に
褐灰10YR5/1シルト（細砂を含む）のブロックを含む

127ピット
1．褐灰10YR5/1シルト（細砂～粗砂を含む）

139ピット
1．灰黄褐10YR5/2シルト（細砂～粗砂を含む）
2．灰黄褐10YR4/2シルト（細砂を少し含む）に
明黄褐10YR6/6シルト（細砂を少し含む）のブロックを含む
3．明黄褐10YR6/6シルト（細砂を少し含む）に
灰黄褐10YR4/2シルト（細砂を少し含む）のブロックを含む

140ピット
1．灰黄褐10YR4/2シルト（細砂を含む　炭片を少し含む
2．にぶい黄褐10YR6/4シルトに
灰黄褐10YR4/2シルト（細砂を含む）
のブロックを含む

141ピット
1．灰黄褐10YR4/2シルト
（細砂を含む　炭片を少し含む）と
にぶい黄褐10YR6/4シルトがブロック状に混じる

図37　建物10・13　平面・断面図

建物10〔125～129ピット〕（図37・39　図版22・23・25　カラー図版2）

5トレンチ北部に位置する。方位はN－8°－Wで、規模は南北2間×東西1間以上、約4.4m×2.4m以上である。調査区外の東に続いている可能性がある。柱間は2.1～2.4mで、ピットの平面形は1辺0.5～0.9mの隅丸方形である。

柱列9・11と重複するが、先後関係は不明である。

遺物は、土師器杯・煮炊具、製塩土器が小片で出土している。土師器杯A（78）は128ピットから出土したものである。

建物12〔134～137ピット〕（図38・39　図版23～25　カラー図版2）

5トレンチ中央部に位置する。南北3間、約4.0mの柱列であるが、調査区外の西へ展開する建物と想定している。方位はN－5°－Wである。柱間は約1.3mで、ピットの平面形は1辺0.7～0.9mの隅丸方形である。

遺物は、土師器杯・煮炊具、須恵器杯・甕が出土している。土師器の把手（79）は137ピットから出土したものである。

建物13〔139～143ピット〕（図37・39　図版23～25　カラー図版2）

5トレンチ中央部に位置する。方位はN－6°－Wで、規模は南北2間×東西1間以上、約4.1m×2.5m以上である。調査区外の東に続いていると思われる。柱間は南北約2.1m、東西約2.5mで、ピットの平面形は1辺0.5～0.7mの隅丸方形である。

遺物は、土師器杯・皿・甕、製塩土器、須恵器甕等の小片が出土している。須恵器蓋（80）は139ピットから出土したものである。

建物14〔149～160ピット〕（図32　図版24・25　カラー図版2）

4トレンチに位置する。調査区北壁と南壁の断面で確認したピットを含めて建物を復元した。方位はN－20°－Wで、規模は南北4間×東西2間、約6.6m×3.2m、面積約21.1㎡である。柱間は約1.6mで、ピットの平面形は1辺0.7～1.0mの隅丸方形である。154・155ピットは全形が不明であるが、1辺0.7m程度と推定され、建物14のピットのなかでは小規模なものと考えられる。153ピットには径約5cm、長さ約15cmの木柱が遺存していた。

遺物は、土師器杯・煮炊具、須恵器杯・甕の小片が出土した。159ピット出土の須恵器片が16溝出土の杯H（146）と接合した。

建物15〔164～167ピット〕（図38　図版25）

5トレンチ南端部に位置する。南北3間、約3.9mの柱列であるが、南東側の大阪府教育委員会の調査区で検出されている東西2間、約3.5mの柱列とともに建物になる可能性が高い。その場合、面積は約13.7㎡である。164・166・167ピットは、調査区東壁面で断面を確認したのみであるため、方位は不明である。柱間は北端と南端が約1.2m、中央が1.5mである。ピットの平面形は1辺0.7～0.8mの隅丸方形である。

〔柱列〕（図38・39　図版22・23・25）

5トレンチで検出した小規模な円形ピット群から柱列を2列復元した。

柱列9〔122～124ピット〕（図38・39　図版23・25）

5トレンチ北部に位置する。方位はN－69°－Eである。規模は東西2間以上、約2.9m以上で、柱間は1.4～1.5mである。調査区外に続いている可能性がある。ピットの平面形は径約0.4mの円形である。

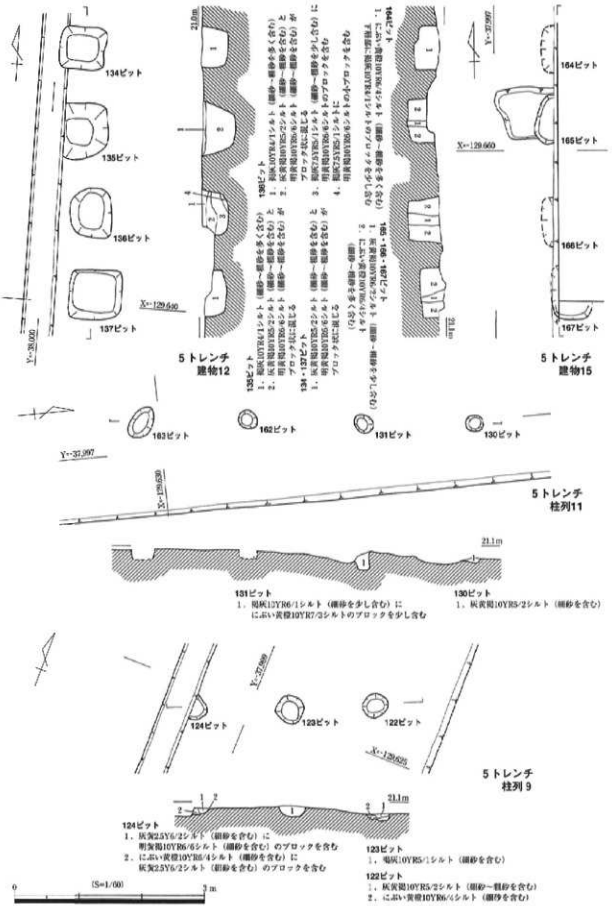


図38　柱列９・11　建物12・15　平面・断面図

建物10と重複するが、先後関係は不明である。

遺物は、土師器、須恵器の小片が出土している。須恵器杯H（77）は123ピットから出土したものである。

柱列11〔130・131・162・163ピット〕〔図38　図版22・25〕

5レンチ北部に位置する。方位はN－6°－Eである。規模は3間、約5.3mで、柱間は1.7～1.8mである。ピットの平面形は径0.3～0.4mの円形である。

建物10と重複するが、先後関係は不明である。

遺物は、土師器煮炊具等の小片が出土している。

〔ピット〕（図40）

以上の建物・柱列に復元したもの以外にも各トレンチで方形・円形のピットを検出した。

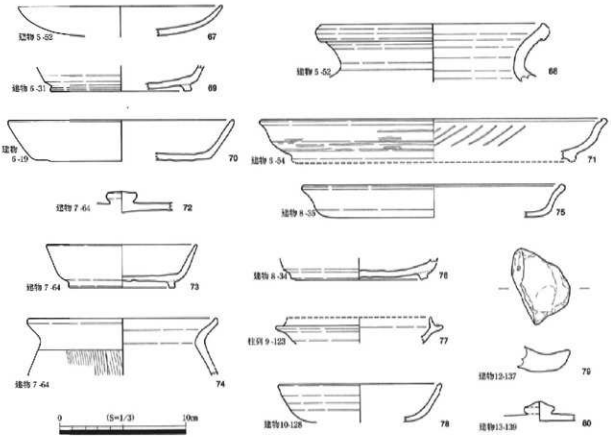


図39　建物5～8・10・12・13　柱列9　出土遺物

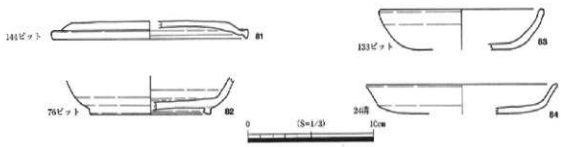


図40　76・133・144ピット　24溝　出土遺物

ピット出土遺物は、図40に実測図を掲載している。全体的に小・細片が多く、図化可能なものは少なかった。土師器、製塩土器、須恵器以外のものはみられず、時期のわかるものはすべて古代である。

須恵器には杯・杯蓋・甕がある。須恵器杯の破片のうち、器種がわかるものの多くは、杯Bである。2トレンチの**76**（82）**ピット**のほか、**93ピット**等からも出土している。須恵器杯B蓋（81）も5トレンチの**144ピット**から出土している。そのほか小片のため器種は不明であるが、かえりをもつ須恵器杯蓋の小片が2トレンチの**96ピット**から出土している。

土師器には杯・皿・甕があり、土師器杯A（83）は5トレンチ**133ピット**から出土したものである。

〔土坑〕（図41～44　図版26・31）

7土坑（図42・44　図版26）

1トレンチ南部に位置する。不定形な土坑で、西側の調査区外に南北幅を広げながら続いている。トレンチ西端で南北約3.2mである。深さは0.1～0.2mで、底面のレベルは西方向に低くなっている。土坑周辺は後世の水田造成によって大きく削平されており、本来は東側にも伸びる溝であった可能性がある。

遺物は、土師器杯・高杯・皿・甕、須恵器杯蓋の小片が出土している。須恵器は土師器に比べて出土数が少ない。93は土師器杯C、94～96は土師器高杯、97～99は土師器甕である。92は須恵器杯G蓋で、つまみが欠損する。7世紀のものと思われる。

8土坑（図42・44　図版26・31）

3トレンチ北部に位置する。東西約3.1mの不定形な土坑で、南東隅から南東方向に幅0.3～0.4mの溝が約2.4m伸びている。土坑の深さは約0.1m、溝の深さは0.03mである。溝の方位はN－16°－Wで、地形が北西から南東に低くなっているのと一致している。

遺物は、図示している土師器杯B（101）、須恵器杯G蓋（100）のほか、土師器皿・甕、須恵器甕等の小片が出土している。

28土坑（図43　図版26）

2トレンチ南端に位置する。平面形は東西約0.8m、南北約0.6mの楕円形で、深さは約0.2mである。

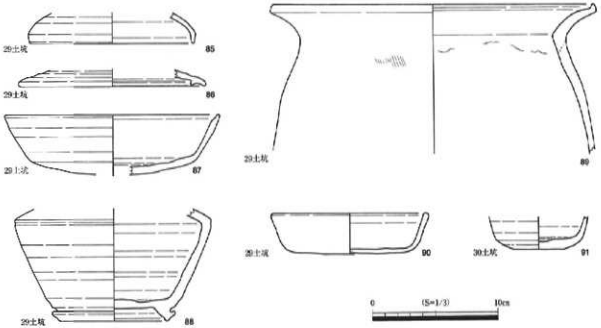


図41　29・30土坑　出土遺物

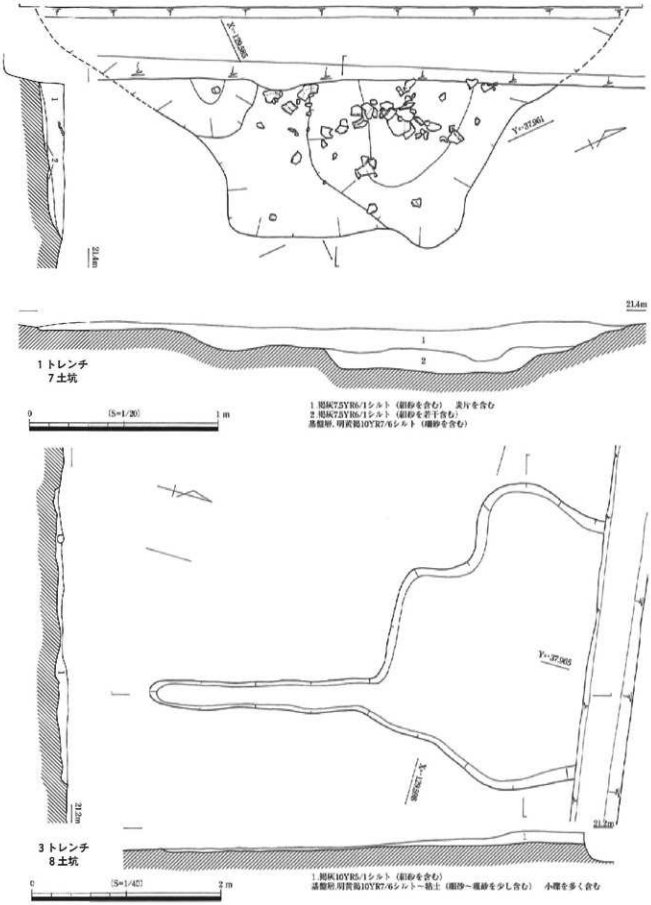


図42　7・8土坑　平面・断面図

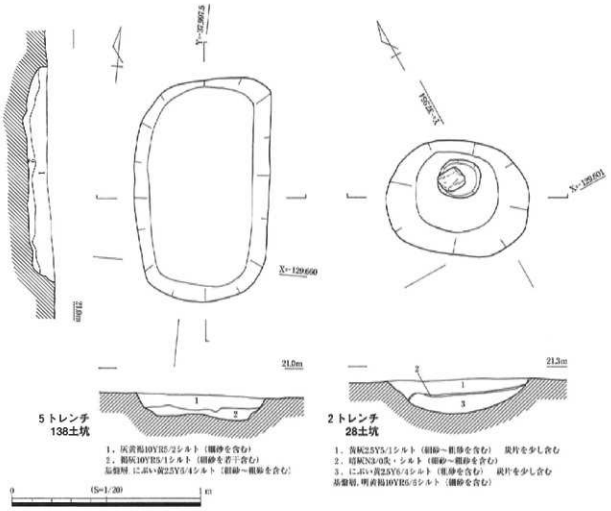


図43　28・138土坑　平面・断面図

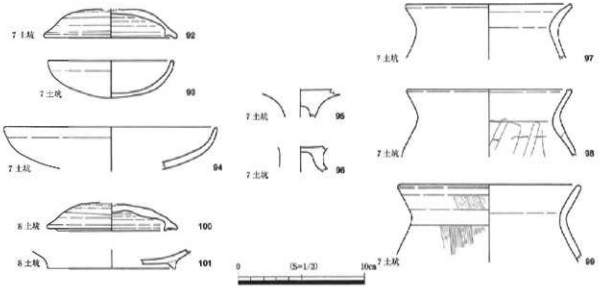


図44　7・8土坑　出土遺物

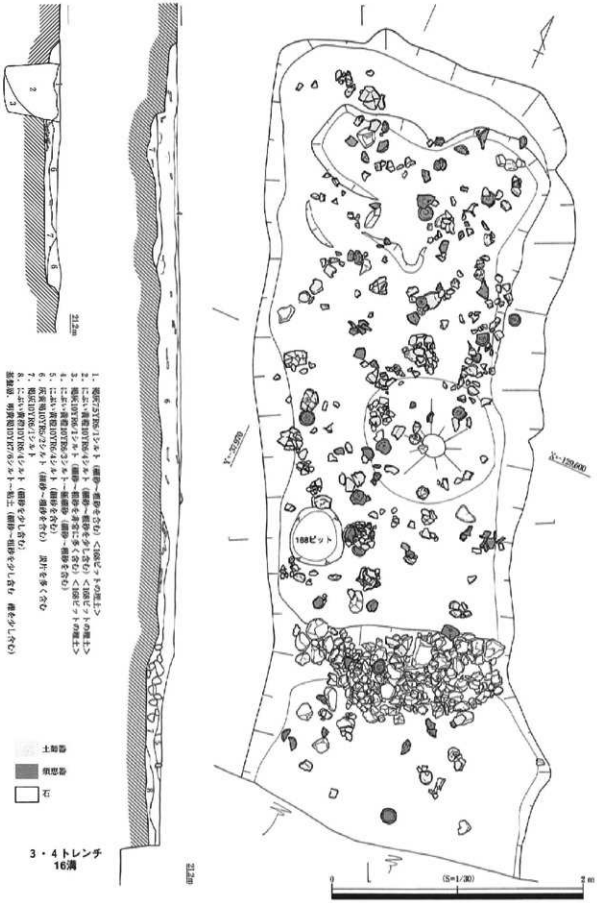


図45　16溝　平面・断面図

埋土に薄い炭層がみられる。被熱痕跡は壁面、底面ともに認められなかった。隣接するピットを切っている。

遺物は出土していない。

29土坑（図41　図版31）

2トレンチ南部に位置する。平面形は東西約1.5m、南北約0.9mの楕円形で、深さは約0.3mである。

遺物は、土師器杯A（90）・甕（89）、須恵器杯A（87）・杯H蓋（85）・杯蓋（86）・壺（88）のほか、製塩土器、須恵器杯B・甕等の小片が出土している。須恵器杯Bは、高台を底部外端に接してつけたものである。

30土坑（図41）

2トレンチ南部に位置する。北西部分が攪乱に切られ、また調査区外の北東に続いているため全形は不明である。東西1.9m以上、深さ約0.2mである

建物7の88ピットを切っている。

遺物は、須恵器杯G（91）のほか、土師器煮炊具、製塩土器、須恵器甕等の小片が出土している。

138土坑（図43　図版26）

5トレンチ南部に位置する。平面形は南北約1.1m、東西約0.7mの隅丸長方形で、深さは約0.1mである。遺物は、出土していない。

〔溝〕（図40・45～53　図版26～31）

16溝（図45～50　図版26～30　カラー図版1・3）

3・4トレンチに位置する。幅1.9～2.5m、検出長約6.8mで、調査区外に続いている。深さは約0.1mで、底面のレベルは南東方向が低くなっている。方位はN－20°－Wで、地形が北西から南東へ低くなるのと一致している。

溝の底面には凹凸がみられる。南部分に底面が北西から南東に0.3～0.4mの幅でスロープ状に低くなっている箇所があり、集石を検出した。

集石は東西約1.7m、南北約0.7mである。おおよそ上述したスロープの南端から約0.3m南までの範囲

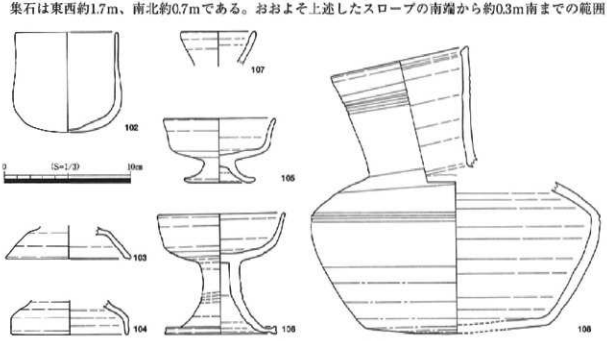


図46　16溝　出土遺物（1）

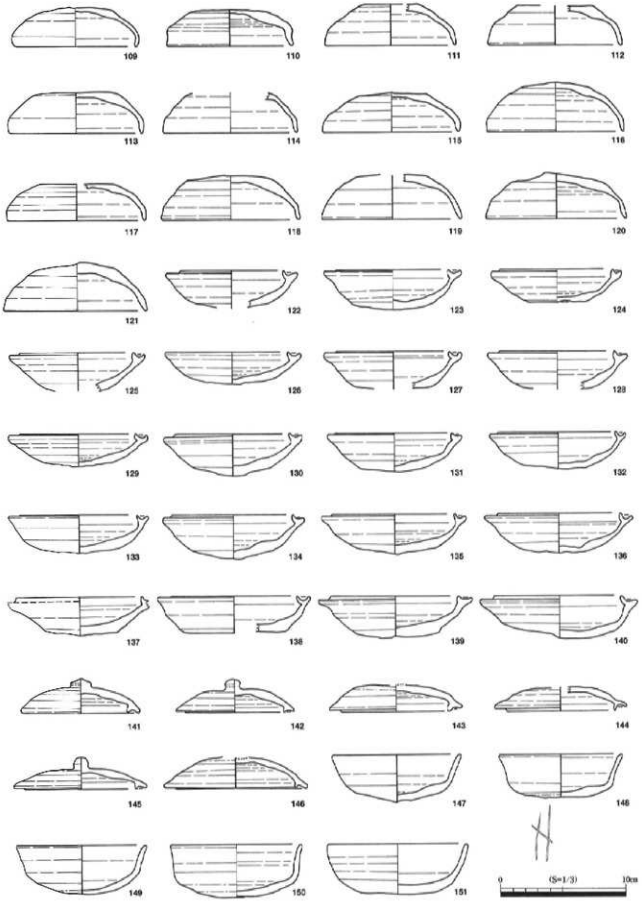


図47　16溝　出土遺物（2）

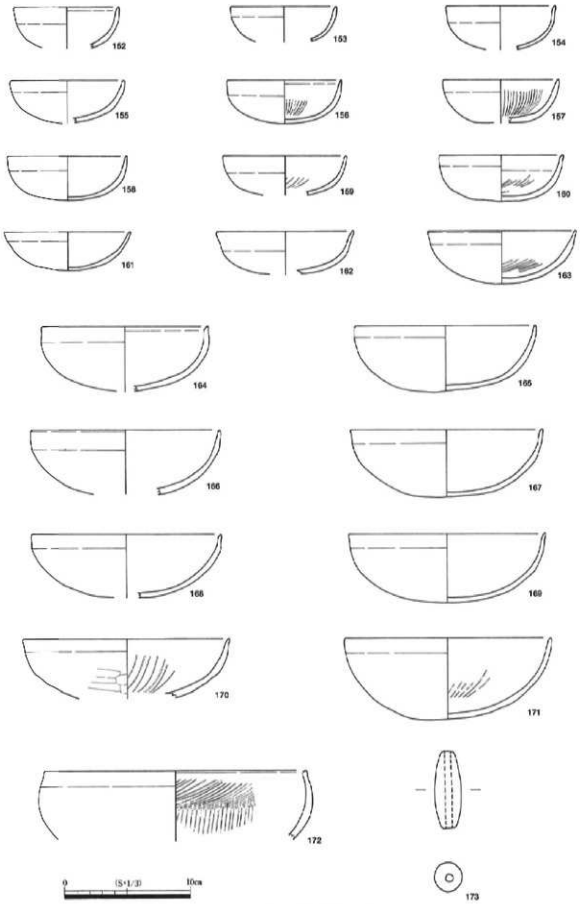


図48　16溝　出土遺物（3）

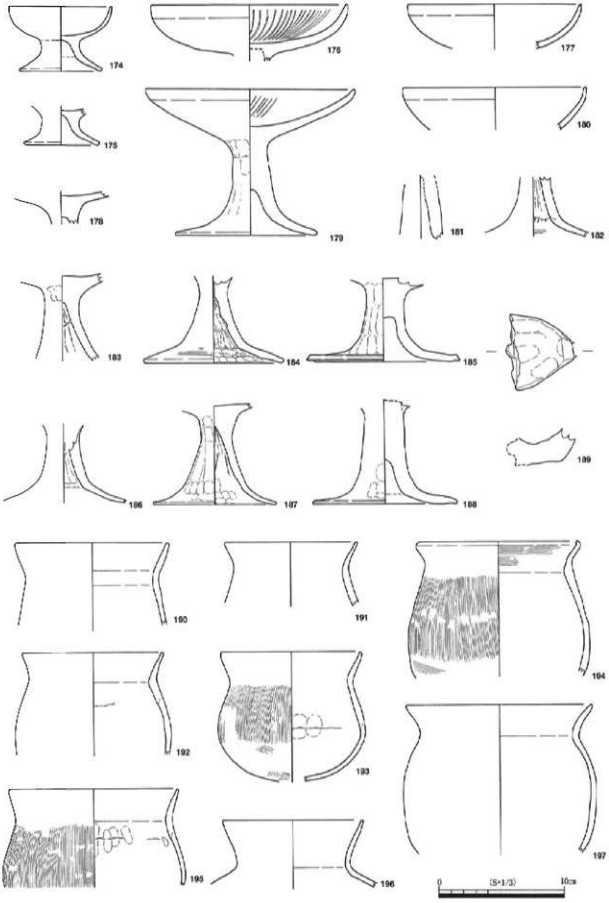


図49　16溝　出土遺物（4）

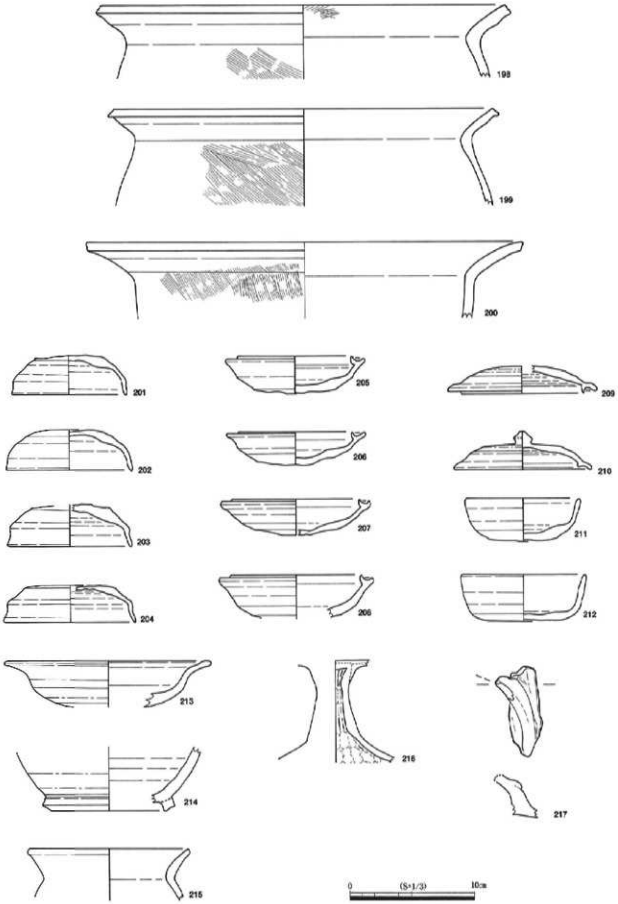


図50　16溝　出土遺物（5）　16溝直上包含層　出土遺物（201～217＝包含層）

におさまる。底面に接しているものもあるが、埋土中に含まれているものも多い。角礫で、数cm大のものから20cm大のものがみられ、形もさまざまである。スロープより南の部分では重なり合っていない部分が多いが、スロープ部分では2重になっている部分が多い。溝内では土器が多数出土しているが、集石間にはほとんどその破片はみられなかった。集石の上面で須恵器、土師器が少し出土している。

溝内からは多数の土器が出土している。溝底面に接して出土したものもあるが、多くは埋土中に含まれている。土師器、須恵器ともに溝全体に分布しており、出土位置の離れている破片が接合した例は少なくない。

長径約0.5mの楕円形の168ピットに切られている。

出土遺物は、コンテナ6箱分である。実測可能なものをできる限り掲載している。

土師器には、杯C、鉢、高杯、甕がある。摩耗した破片で出土しているため、器種構成を正確に知ることは難しい。ただ、破片の多くが煮炊具片であること、杯ではCが多くを占めているであろうことは、明らかである。図示したもの、細部の形態、調整等が不明瞭である。

杯Cは、152～171である。口径8.3～16.4cm（平均11.7cm）、器高3.0～6.5cm（平均4.3cm）である。口縁端部は内側に面をもち、やや外反する。内面に放射状または斜放射状暗紋を有す。外面の調整は、170の体部にケズリが施されているほかは不明である。

鉢は、172である。口縁端部は内側に面を持つが、わずかに肥厚している。内面に、上段が斜放射状、下段が放射状の2段の暗紋を有す。外面の調整は不明である。ほかに、小片のため図化できなかったが、口付きの鉢の可能性がある破片も出土している。

高杯は、174～188である。小型のもの（174・175）と大型のもの（176～188）がある。杯部内面に放射状または斜放射状暗紋を有す。杯部外面の調整は不明である。大型の脚部は、脚柱部が下方に向かってひらくもの（182～184・186・187）と比較的直立しているもの（179・181・185・188）にわけられる。前者では脚部内面上端が杯部と接しているが、後者では低い位置にある。前者にのみ脚柱部内面に絞り痕がみられることから、両者は成形方法が異なっている可能性がある。脚柱部外面の調整は不明であるが、脚裾部にはハケ目が認められる。

甕は、190～200である。小型のもの（190～197）と大型のもの（198～200）がある。小型のものは肩の張らないものが多く、やや肩の張る196は他のものに比べて口縁部が長い。194は比較的遺存状態が良く、口縁端部を内傾につまみ上げていることがわかる。口縁部内面に横方向、体部外面上半に縦方向、下半に不定方向のハケ目が認められる。口縁部外面、体部内面の調整は不明瞭であるが、図化できなかった小片には体部内面にケズリを施すものがある。大型のものは、肩の張らない体部に外反する口縁部がつく。口縁端部は若干の窪みを持つ面となっている。口縁部外面に横ナデ、体部外面にハケ目を施す。内面の調整は、198の口縁部にハケ目がみられる以外は不明である。

須恵器には、杯H、杯H蓋、杯G、杯G蓋、高杯、椀、平瓶があるほか、図化できなかったが、壺、甕も出土している。杯（約50点）が大半を占めており、他の器種は少数である。色調は青みを帯びない灰色のものが多い。

杯は口径が6分の1以上残存しているものはすべて掲載しており、杯Hが32個（うち蓋13）、杯Gが11個（うち蓋6）である。およそ3：1の割合で杯Hが多い。杯Bは不掲載遺物のなかにも認められない。

杯Hは、122～140である。受部径8.2～10.0cm（平均9.3cm）、器高2.6～3.5cm（平均3.0cm）である。いずれも受部が短い。内外面とも回転ナデを施す。回転ナデの後、底部内面中央に一定方向の静止ナデを施

すものが多い。底部外面は、ヘラ切り離し後に、痕跡を静止の状態でナデ消しているものが多いが、非常に粗雑である。129等、ヘラ切り離し痕の中央のみをナデ消し、周縁部はそのままのものもある。また、いくつかのものには、ナデ消し時またはそれ以降の筋状痕跡が認められる。成形・調整に伴うものではないと思われるが、成因は不明である。

137・139は、砂粒の目立つ、明らかに他と異なる胎土を持つ。この2個体は、胎土だけでなく、器形、器壁の厚み等も酷似している。

杯B蓋は、109～121である。口径9.5～11.2cm（平均10.5cm）、器高2.9～3.9cm（平均3.3cm）である。内外面とも回転ナデを施す。回転ナデの後、天井部内面中央に一定方向の静止ナデを施すものが多い。天井部外面は、ヘラ切り離し後に、痕跡を静止の状態でナデ消しているものが多いが、非常に粗雑である。110・115・116・118等、ヘラ切り離し痕の中央のみをナデ消し、周縁部はそのままのものもある。身同様、ナデ消し時またはそれ以降の筋状痕跡が認められるものがある。

杯Gは、147～151である。口径9.7～10.9cm（平均10.2cm）、器高3.4～4.2cm（平均3.8cm）である。内外面とも回転ナデを施し、底部内面中央には静止ナデを加える。底部外面は、147・151はヘラ切り離し後に粗雑な静止ナデを、148～150は回転ヘラケズリを施す。148は底部外面にヘラ記号を持つ。

杯G蓋は、141～146である。かえり径7.6～9.5cm（平均8.5cm）、器高2.5～2.7cm（平均2.6cm）である。内外面とも回転ナデを施す。回転ナデの後、天井部内面に静止ナデを加えるものが多い。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。

高杯は、105・106である。短脚のもの（105）と長脚のもの（106）がある。

椀は、102である。台付きである可能性もあるが、全体的に摩滅しているため不明である。

平瓶は、108である。口縁部は歪みが大きい。カキ目が施され、沈線3条を有す。口縁端部は内側に面を持つ。肩部と体部の境にも沈線2条を有し、肩部上半は回転ナデ、下半はタタキの後ナデ、体部上半はナデ、下半から底部は回転ケズリで仕上げる。内面は、底部が静止ナデによるほかは、回転ナデで調整している。

103・104は壺等の脚部と思われる。

そのほか、土師質の土錘（173）1点、少数の焼土塊（2～3cm大）も出土している。

良好な一括出土資料であり、7世紀中頃のものと思われる。

17溝（図51・53　図版26・31　カラー図版4）

2トレンチ南部に位置する。北西から南東に伸びる溝で、南東部分でやや南に向かって屈曲している。調査区外の西、南に続いており、幅0.8m～1.3m、検出長約9.0mである。深さ約0.2mで、底面のレベルは南東が低くなっている。

遺物は、コンテナ3箱分が出土した。土師器、製塩土器、須恵器で、小片が多い。土師器杯（225）・蓋（224）・高杯（226）、須恵器杯H（221）・杯B（222）・壺（223）のほか、土師器口付鉢、須恵器鼎等が出土している。須恵器杯B（222）は、高台を底部外端に接してつけたものである。また、小片のため図化できなかったが製塩土器片（244～250）が比較的多く出土している。内面に布目が認められるもの（244・249・250）、外面にタタキを施すもの（248）がある。249の布目は、非常に細かいものである。

44溝（図51・52）

2トレンチ南部に位置する。南北方向の溝で、幅0.9m～1.9m、検出長約2.5mである。深さは0.05mで、底面のレベルは南が低くなっている。

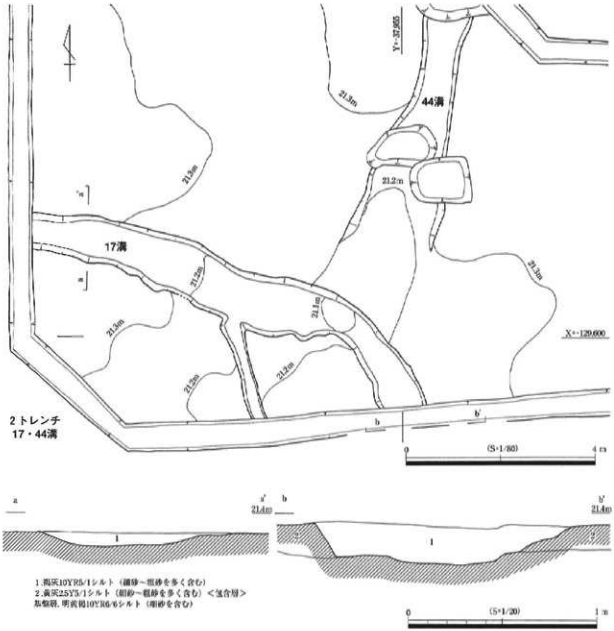


図51　17・44溝　平面・断面図

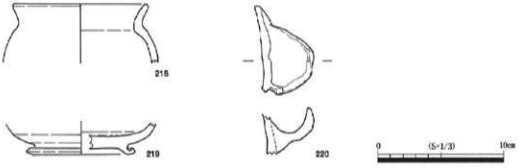


図52　44溝　出土遺物

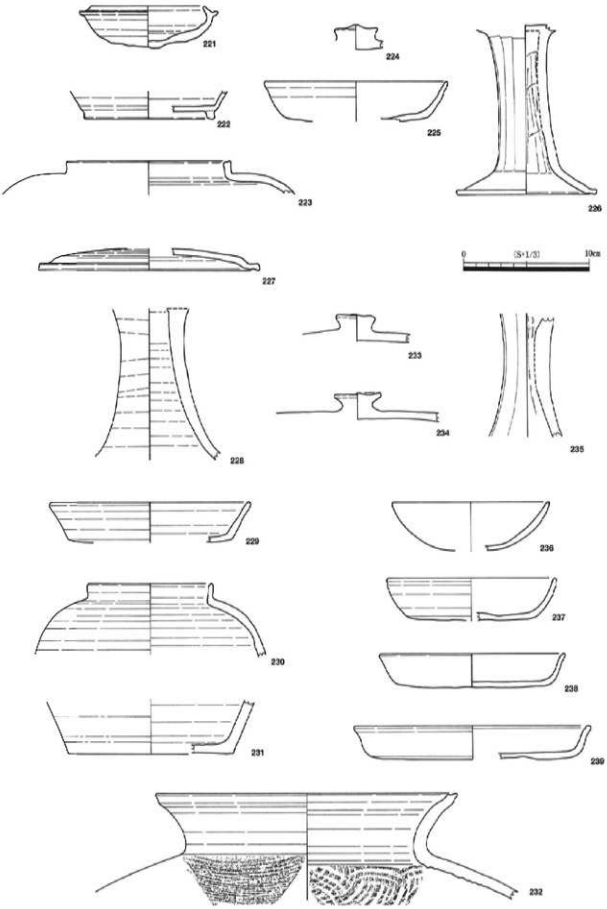


図53　17溝　17溝直上包含層　出土遺物（227～237・239＝包含層）

遺物は、土師器甕（218）、須恵器底部（219）のほか、須恵器杯・甕等の小片が出土している。

小結

遺構出土遺物は土師器、製塩土器、須恵器のみである。土師器杯A・杯C・高杯・皿A・皿B・鉢・甕・竈、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・杯H・杯H蓋・杯G・杯G蓋・高杯・椀・平瓶・壺・甕、土師質土錘等がある。時期のわかるものはすべて7～8世紀の範疇におさまる。

遺構は、全トレンチでピット、土坑、溝等を検出した。ピットには円形、隅丸方形のものがあり、掘立柱建物13棟、柱列2列を復元した。上記のような出土遺物の様相から、7～8世紀のものが多くを占めていると想定できる。しかし、遺物の多くが小・細片であるため、詳細な時期を決定できるものは非常に少ない。

調査地東部に位置する16溝（3・4トレンチ）から良好な一括資料が出土している。土師器杯C・高杯・鉢・甕、製塩土器、須恵器杯H・杯H蓋・杯G・杯G蓋・高杯・椀・平瓶等で、7世紀中頃のものである。同様に、16溝の北東に位置する7土坑（1トレンチ）も、出土遺物から7世紀代の遺構であると思われる。また、3トレンチに比較的厚く遺存していた包含層からも7世紀代の遺物が多数出土している。

東部では建物1（1トレンチ）、建物2（3トレンチ）、建物14（4トレンチ）の計3棟の建物を検出した。建物14は、隣接する16溝と同一の方位を持っており、7世紀代のものである可能性が高いと思われる。建物2は隣接する8土坑から伸びる溝とほぼ同一の方位をもっており、両者の関連が想定される。ピット掘り方の平面形は、建物2が径0.6～0.8mの円形、建物14は大型（1辺0.7～1.0m）の隅丸方形である。また、7土坑の南側、8土坑の北側に位置する建物1は、方位が建物14とほぼ同じで、ピットの平面形・規模は建物2と同様である。

上記の遺構群の西側にあたる2トレンチ南部、調査区西部中央の遺構群出土遺物は、全体的に東部よりもやや新しい傾向を示している。須恵器杯では東部ではほとんどみられなかった杯Bが認められる。各遺構の詳細な時期は不明であるものの、東部の遺構群よりも新しい遺構が分布していることが想定できる。特に溝17、土坑29出土の須恵器杯Bは高台を底部外端に接してつけたもので、8世紀代の比較的新しい時期のものと考えられる。

西部中央では多数のピットを検出し、建物3・5～7を復元した。建物5以外は、ピットから須恵器杯B片が出土している。また、ピットの切り合い関係から、建物7－建物5－建物6（古→新）の時期順が想定できる。各建物の詳細な時期は決定できないが、西部中央の建物群は東部の遺構群よりも新しい時期のものである可能性が高い。

調査区東部・西部中央では、地形に規制されてやや西に振れていた建物の方位が、より新しい時期には正方位に近いものになったことが想定できる。

そのほか、調査区北部にあたる2トレンチ北端部、南部の5トレンチでも建物を検出しているが、時期は不明である。

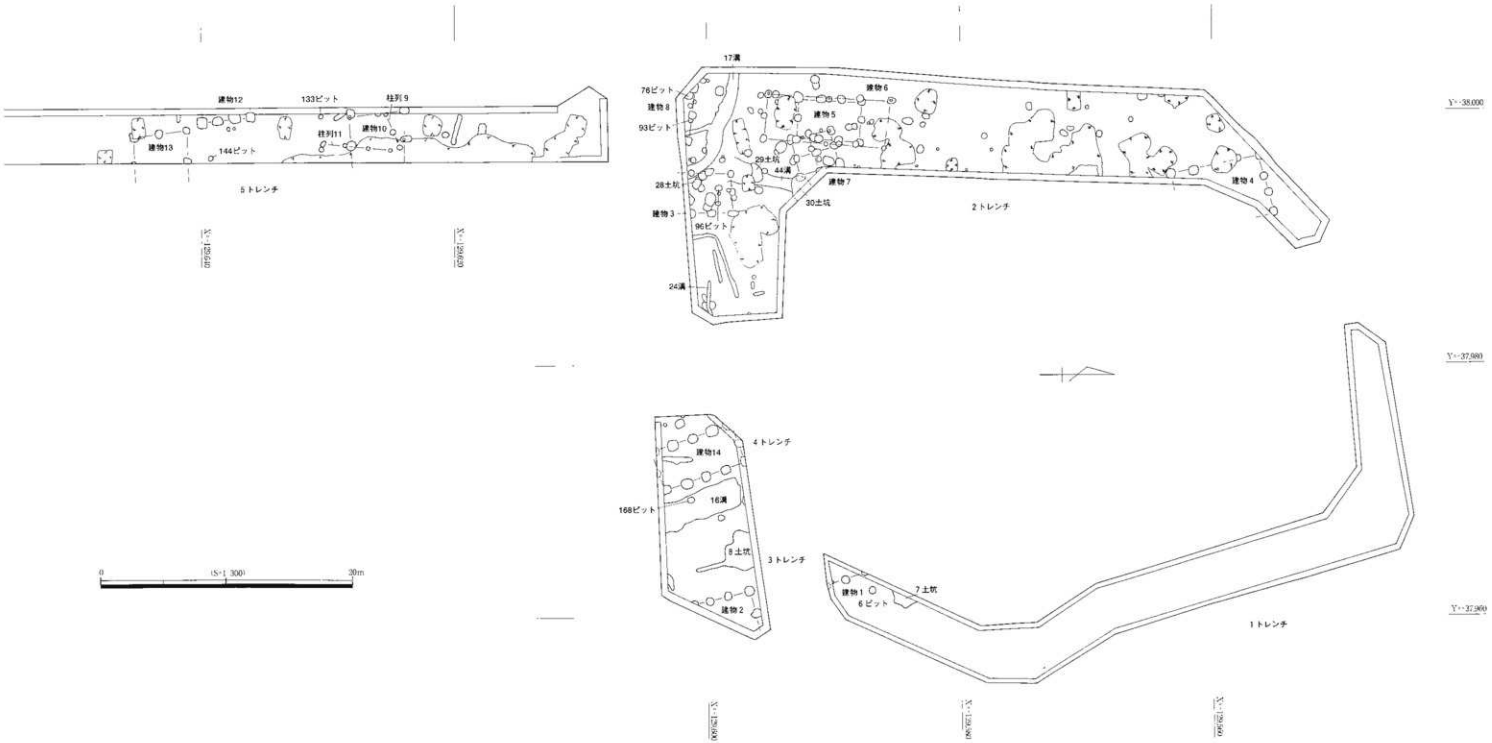


図54　1～5トレンチ　平面図

第４章　総括

第１項　遺構

02－１調査区では、弥生時代後期、７～10世紀、12世紀後葉～13世紀の遺構を検出した。

弥生時代後期の遺構は、調査区南部（１トレンチ南部）に位置する東西方向の溝（66）１条である。

７世紀代の遺構は、調査区南端部（１トレンチ南端部）に位置する竪穴住居７棟である。出土遺物はないが、隣接する大阪府教育委員会調査地の成果等から７世紀中葉以前のものと想定している。

７～８**世紀代**を中心とする時期の遺構は、調査区南部（１・２トレンチ）で確認している。溝（25等）、落ち込み（410）等のほか、13棟復元している掘立柱建物の多くも、この時期のものと想定される。492土坑は、出土遺物はないが、埋土の観察、方位等から古代に属する遺構と考えられる。長方形で、内部に石組みを伴い、墓坑の可能性がある。

10世紀代を中心とする時期の遺構は、調査区南部（１トレンチ南部・中央部・北西部）に分布している。比較的小規模なピット群である。

中世の遺構は、12世紀後葉～13世紀のピットを調査区北部（３トレンチ）で検出しているほか、埋土から中世と判断できる柵、溝等を調査区北端部（５・６トレンチ）で検出している。

03－１調査区では、７～８世紀の遺構を検出した。

７世紀代の遺構は、調査区東部（１トレンチ南部、３・４トレンチ）で確認している。溝（16）、土坑（７等）で、隣接する掘立柱建物３棟（１・２・14）も位置関係、方位等から、近い時期のものと想定できる。特に、16溝からは７世紀中頃の土器が多数出土している。

８世紀代を中心とする時期の遺構は、調査区西部中央（２トレンチ南部）で確認した。溝（17）、土坑（29）等で、掘立柱建物群も含めた周辺の遺構群にも近い時期のものがあると推定している。

03－１調査区では、建物の方位が、７世紀代には地形に規制されて西に振れていたが、より新しい時期には正方位に近いものになったことが想定できる。

以上が各時期の遺構の概略である。ただ、02－１調査区（北半部）、03－１調査区（１トレンチ北半部、５トレンチ北端部、２トレンチ東部・北半部）ともに広範囲で削平を受けている。遺構が希薄な部分はその影響で遺構が失われた可能性が高く、上述した各時期の遺構分布も、より広い範囲に及んでいたと思われる。

第２項　遺物

出土遺物は、02－１調査区でコンテナ約10箱分、03－１調査区でコンテナ約30箱分である。

02－１調査区では、弥生時代、６～10世紀、12～13世紀、近世のものが出土している。03－１調査区の出土遺物は、時期のわかるものはすべて７～８世紀の範疇におさまる。

弥生時代の遺物は、02－１調査区１トレンチの66溝から広口壺・高杯等が出土している。弥生時代後期のものと思われる。また、02－1調査区の包含層から無頸壺等が少数出土している。03－１調査区ではまったく出土していない。

６世紀代の遺物は、遺構からは出土していない。02－１調査区の包含層出土遺物中に、須恵器杯H等が散見される。

7～8世紀代の遺物は、02－1・03－1調査区の各トレンチで普遍的に認められ、出土遺物の大半を占めている。飛鳥時代のものは02－1調査区の25溝・410落ち込み、03－1調査区の7土坑・16溝等から、奈良時代のものは17溝等からまとまった資料が出土している。

特に、03－1調査区の16溝からはコンテナ6箱分の遺物が出土している。出土状況から、良好な一括資料と判断できる遺物群である。土師器には杯C・高杯・鉢・甕等、須恵器には杯H・杯G・椀・高杯・平瓶・壺・甕等の器種があるほか、土師質の土錘も出土している。須恵器杯Hと杯Gの割合は3：1で、杯Hにはヘラ切り離し後粗雑な静止ナデを、杯Gには回転ヘラケズリを施すものが多い。土師器の杯は、遺存状況が不良であるため器種の判定が難しいが、杯Cが多くを占めていると考えられる。7世紀中頃のものと思われる。

古代後期～中世のものは、02－1調査区で緑釉陶器、黒色土器A類椀、土師器皿、瓦器椀、白磁碗等が少数ではあるが出土している。器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿等、10世紀中・後葉を中心とする時期のものと、土師器皿、和泉型瓦器椀等12～13世紀のものがある。11世紀代のものは認められない。

以上が今回の調査で出土した遺物の概要である。時期・種類等は、既往の調査で出土している遺物とほぼ同様である。ただ、従来の調査と異なるのは、割合として中世の遺物が極端に少なく、7～8世紀代の遺物が多くを占めている点である。特に、今回の調査では、良好な一括出土資料である16溝出土土器群をはじめ、7世紀代のものが目立つ。これまでの調査でこの時期のものがこれほどまとまって出土した例はなく、当該期の遺跡を考えるうえで良い資料が加わったといえる。

16溝出土資料は、単に総持寺遺跡の問題にとどまらず、飛鳥地域や難波宮などの都城以外の地域で出土した資料としても重要である。遺跡との位置関係からは、当該期に操業していた吹田市域の吹田窯跡群、豊中市域の桜井谷窯跡群からなる千里古窯跡群との関連も想定される。ただ、今回の調査では、胎土・調整・形態・器種構成、いずれについても窯跡を比定できるほど十分な分析がおこなえなかった。北摂地域における7世紀代の土器流通の実態を考えるうえで、重要な問題であり、課題である。

第3項　総持寺遺跡の地形と変遷

最後に、既往の調査成果も含めて遺跡の地形、変遷について簡単にまとめておく。

総持寺遺跡は、北摂山地から南に張り出した富田台地の南西部に立地する（図2・3）。

これまでに調査がおこなわれたのは、台地上西端部分で、大阪府教育委員会が約23,500㎡を、財団法人大阪府文化財調査研究センターが約25,500㎡を調査している。今回の調査地は、北のセンター調査地、南の府教委調査地の間に位置する。今回の調査地の西側から府教委調査地の南西側は、段丘崖である。

図55は、これまでに発掘調査をおこなった約52,200㎡の測量成果に基づき、20cm間隔の等高線をひいたものである。南から北へと比較的緩やかに高くなる。おおよそ北の北摂山地から、南の沖積平野に向かう方向に谷筋が走り、それらに挟まれた部分は尾根状を呈する。同様な地形は、宅地化が進む以前、水田が拡がっていた頃の航空写真（図版2・3）からも広く読み取ることができ、富田台地上の典型的な微地形として捉えることができる。

北のセンター調査地は、南の府教委調査地と比べてやや等高線の間隔が狭くなっており、南の方がより平坦な地形であることがわかる。東部と西部には、南北方向の谷筋が走り、さらに今回の調査地（03－1調査区）からセンター調査地南西部にかけてにも谷筋が存在している可能性がある。府教委調査地南西部は、東西の谷筋に挟まれ、尾根状を呈している。

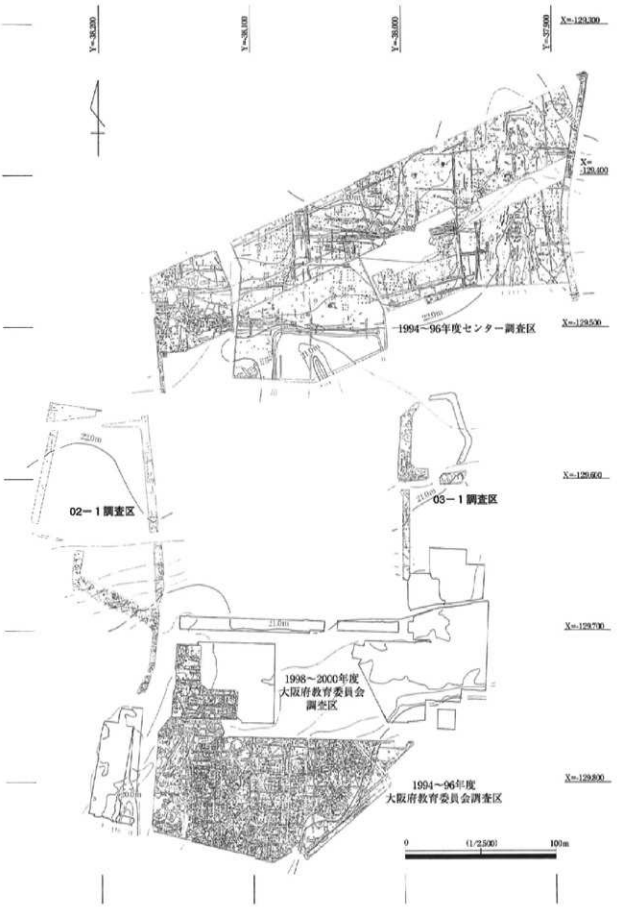


図55　総持寺遺跡　地形図

弥生時代後期から7世紀前半頃までの遺構は、調査地南部に分布する。主として、府教委調査地と今回の02－1調査区南部の範囲である。

弥生時代後期後半には、南部の尾根状地形の先端部分に、周溝墓、土器棺墓が築かれる。

古墳時代前期には、尾根筋に竪穴住居が営まれる。その後、古墳時代中期になると、尾根上に総持寺古墳群が展開する。西側、南側は台地端部で、段丘崖に望む立地である。

古墳時代後期、7世紀前葉～中葉にも竪穴住居が営まれるが、これらは東西の谷筋に立地する。これは府教委の概要報告書で指摘されているように、古墳をさけた結果であろうか。

北部にも遺構が展開するようになるのは、掘立柱建物で構成される集落の成立以降である。

7世紀以降、掘立柱建物で構成される集落が、調査地全体で展開していく。特に、8～9世紀代には、総持寺遺跡集落の第1のピークをむかえる。8世紀代は南の府教委調査地で遺構数が多いが、9世紀後半以降は北のセンター調査地に多くの遺構が展開する。集落は10世紀頃まで営まれ、既往のセンター調査地で10世紀前半の遺構群を、今回の02－1調査区で10世紀中・後葉を中心とする時期の遺構群を確認している。

11世紀代の遺構、遺物は、これまでに報告されている限りでは希薄である。府教委調査地の報告を待って判断する必要があるが、この時期に集落が途切れるか否かは、総持寺遺跡の古代と中世を考えるうえで重要である。

12世紀後半には、南部と北部で土坑墓を伴う集落が成立する。総持寺遺跡集落の第2のピークである。集落は13世紀代まで存続し、南の府教委調査地、北のセンター調査地ともに、当該期の遺構、遺物を多数検出している。それに対して、今回の調査地では当該期の遺構、遺物をほとんど確認していない。

以上、遺跡のおおまかな変遷を述べた。今後、今回の調査地周辺の調査、既往の調査の整理作業が進めば、図55にみられる微地形上に展開する、各時期の遺構分布、その変遷をより詳細に検討することが可能になると思われる。また、調査地北側に通っていたと思われる、山陽道（西国街道）との関係も、重視しなければならない。

掲載遺物一覧表

表1　掲載遺物一覧表（1）

02－1調査区

挿図	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
16	1		土師器　高杯	2	425ピット 遺物416	—	(5.6)	—	20		外：橙5YR7/6 内：灰白7.5YR8/2 脚：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明 脚部外面に刷毛を施すか 脚部内面縦方向
	2		須恵器　杯B蓋	2	486ピット 遺物515	(12.0)	(3.1)	—	10以下	反転復元	外：灰5Y6/1 内：灰白N8/0 脚：灰白5Y7/1	回転ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	3		須恵器　杯B	2	486ピット 遺物515	(13.2)	(2.9)	—	10以下	反転復元	外：灰7.5Y6/1 内：灰N5/0 脚：灰黄褐10YR5/2	回転ナデ
	4		須恵器　杯B	1	78ピット 遺512	(14.2)	3.9	(9.4)	20	反転復元	外：灰7.5Y5/1 内：灰白N7/0 脚：灰N6/0　灰白2.5Y8/2	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ（不定方向） 底部外面調整
19	5		須恵器　杯B	1	42ピット	(11.2)	(2.8)	—	10以下	反転復元	外：灰白N7/0 脚：灰白N7/0 内：灰N6/0	回転ナデ
	6		土師器　羽釜	1	90ピット	(21.0)	(12.6)	—	10以下	反転復元	外：橙5YR7/6 内：淡黄橙2.5YR8/4 脚：にぶい黄橙7.5YR6/3	摩耗しており調整不明 胎土粗い(砂粒含む)
	7		黒色土器　A類椀	1	77ピット	(14.2)	(4.8)	—	10以下	反転復元 一部転写	外：黒褐2.5Y3/1 灰褐7.5YR4/2 内：黒褐10YR3/1 脚：橙5YR7/8	内面にミガキを若干施すが、摩耗しており不明瞭 外面摩耗しており調整不明
	8	16	緑釉陶器　椀または皿	2	464ピット	—	(1.4)	(6.2)	10以下 底部30	反転復元	外：暗オリーブ7.5Y4/3(釉) 灰7.5Y5/1(露胎) 内：暗オリーブ7.5Y4/3(釉) 淡黄5Y7/4(釉) 脚：灰N6/0	見込みに沈線 高台削り出し 内面・外面体部から高台付け土施釉
	9		鉄製品　釘	2	503ピット	長（7.8）　幅0.5～0.6			—		—	頭部欠損
	10		須恵器　鉢か	1	105土坑	(13.2)	(6.3)	—	10以下	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N4/0 脚：灰N4/0	回転ナデ
	11		土師器　高杯	2	813土坑	—	(7.7)	—	30	反転復元 (一部)	外：橙5YR7/6 内：淡黄橙7.5YR8/6 脚：淡黄橙7.5YR8/4	摩耗しており調整不明
	12	16	須恵器　杯B	2	432土坑	9.6	3.5	—	70	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N6/0 脚：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面静止ナデ 底部外面ヘラ切り後不調整、ヘラ記号
	13		叩き石か	2	432土坑	長8.7　幅6.4　最大厚4.9			100		灰白N7/0	
21	14		弥生土器　壺	1	66溝	(18.2)	(11.2)	—	40 口縁60	反転復元	外：10YR8/2灰白 内：10YR8/2灰白 脚：5YR5/4にぶい赤褐	摩耗しており調整不明
	15		弥生土器　底部	1	66溝	—	(2.4)	2.8	10以下 底部80	反転復元	外：橙5YR7/6 内：淡黄橙7.5YR8/6 脚：橙7.5YR6/6 黄灰2.5Y5/1	摩耗しており調整不明
	16		弥生土器　高杯	1	66溝	—	(7.8)	—	30	反転復元 一部転用	外：赤褐2.5YR4/8 内：明赤褐5YR5/6 脚：赤褐2.5YR4/8 黄褐10YR5/2	摩耗しており調整不明
22	17	16	須恵器　甕	1	11溝	(22.5)	(6.9)	—	10以下 口縁30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰白N7/0 脚：灰赤10R4/2	回転ナデ 体部外面格子タタキ 体部内面同心円状当て具痕
	18		須恵器　杯B蓋	1	25溝	(8.4)	4.1	—	20	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N5/0 脚：赤灰2.5YR6/1	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後丸味的丁寧な静止ナデ（不定方向）
	19		須恵器　杯G	1	25溝	(10.8)	3.6	—	30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N5/0 脚：灰N6/0	回転ナデ　底部外面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整または粗い静止ナデ
	20		須恵器　杯A または杯G	1	25溝	(10.7)	3.2	—	20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 脚：灰N5/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後回転ヘラケズリを施すか
	21	16	土師器　高杯	1	25溝・46溝	—	(9.6)	—	40	反転復元 一部転用	外：橙5YR6/8 内：橙5YR6/8 脚：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明
	22	16	土師器　鼎B	1	25溝	17.8	4.1	12.4	40		外：黒褐7.5YR3/2 内：黒褐7.5YR3/2 脚：灰褐7.5YR4/2	摩耗しており調整不明瞭 体部外面ナデ
	23	16	土師器　羽釜	1	25溝	(25.1)	(7.7)	—	10以下 口縁40	反転復元	外：淡黄橙10YR8/3 内：灰白10YR8/2 脚：灰白10YR7/1	摩耗しており調整不明瞭 体部外面ハケ
	24		土師器　羽釜	1	25溝	—	(6.4)	—	10以下	反転復元	外：淡黄橙10YR8/3 内：褐灰10YR4/1 脚：灰白10YR8/6 灰白2.5Y7/1	摩耗しており調整不明
	25	16	土師器　甕	1	25溝・包含層	(25.0)	(15.6)	—	30	一部転用	外：淡黄橙7.5YR8/3 内：淡黄橙7.5YR8/3 脚：明褐7.5YR7/1	体部内外面ハケ　口付近部指オサエ、ナデ 重ね底部内面・外面基部ハケ、外面先端部横ナデ

※法量は、（ ）を付したものは復元値、＜ ＞を付したものは残存値である。
受部（かえり）をもつ器種（須恵器杯B・杯G蓋・杯B蓋）の口径は、受部（かえり）の先端で計測したものである。

表2　掲載遺物一覧表（2）

掲図	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
24	25		須恵器　杯B蓋	1	37溝	—	(2.5)	—	10以下	反転復元	外：灰N3/0 オリーブ灰2.5GY6/1 内：灰N6/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 天井部外縁稜線気味で調整不明瞭（回転ナデを施すか）
	27		須恵器　杯B蓋	1	37溝	(18.4)	(2.1)	—	20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ
	28		須恵器　杯B	1	37溝	—	(1.4)	(8.2)	10以下	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰N6/0 断：灰N3/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面の詳細不明
	29	16	土師器　須恵	2	469溝	24.6	(8.5)	—	20 口縁10		外：浅黄橙7.5YR8/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：にぶい黄橙10YR7/2	内面ハケ
	30		土師器　甕	2	469溝	(21.0)	(5.7)	—	10以下	反転復元	外：黄灰7.5YR6/8 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：黄灰7.5YR6/8	摩耗しており調整不明
25	31	17	土師器　甕	1	82 落ち込み	(12.6)	4.1	—	40	反転復元	外：橙5YR7/8 内：黄灰7.5YR7/8 断：橙5YR7/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	32		土師器　坏A	1	82 落ち込み	(14.8)	3.4	—	20	反転復元	外：橙5YR7/8 内：橙5YR7/6 断：橙5YR7/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	33		土師器　鉢	1	82 落ち込み	(18.2)	(4.3)	—	10以下	反転復元	外：黒褐7.5YR3/1 内：黒褐7.5YR3/1 断：橙5YR7/6	摩耗しており調整不明
	34		須恵器　甕	1	82 落ち込み	(20.0)	(3.1)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白2.5Y7/1 内：灰赤2.5Y7/2 断：灰白2.5Y8/2	内面回転ナデ 外面摩耗しており調整不明瞭（回転ナデを施すか）
	35		須恵器　杯B蓋	2	419 落ち込み	(10.9)	3.4	—	20 口縁30	反転復元	外：灰白2.5Y7/1 内：灰白2.5Y7/1 断：灰5Y6/1	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後不調整
	36		須恵器　杯H	2	419 落ち込み	(10.6)	(1.9)	—	10以下	反転復元	外：灰N6/3 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ
	37	17	須恵器　杯A または 杯G	2	419 落ち込み	(10.0)	4.1	—	40	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整
	38		須恵器　杯B	2	419 落ち込み	—	(2.6)	7.4	50 底部100	反転復元 （体部）	外：灰N5/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面の詳細不明
	39		須恵器　甕	2	419 落ち込み	(20.0)	(5.5)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	回転ナデ
	40	17	石製品　紡石	2	419 落ち込み	長（5.9）幅（2.6）			—		外：灰白10YR8/1 内：— 断：灰白2.5Y8/2	2面遺存、うち1面残用
	41		土師器　羽釜	2	419 落ち込み	(25.0)	(6.5)	—	10以下	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：灰白10YR8/2 断：にぶい黄橙10YR7/2 （芯）9N3/0	摩耗しており調整不明
26	42	17	弥生土器　無頸壺	1	弧倉朝	(9.8)	(6.4)	—	20 口縁40	反転復元 一部転用	外：にぶい黄橙10YR7/3 明9N3/0 内：にぶい黄橙10YR7/4 断：灰白10YR8/2	外面ハケか（摩耗のため不明瞭） 口縁部に穿孔。4箇所（2箇所残存）
	43		弥生土器　底部	1	弧倉朝	—	(2.2)	8.1	10以下 底部100		外：にぶい橙5YR6/4 内：明赤褐2.5YR5/6 断：明赤褐2.5YR5/6	
	44		弥生土器　底部	1	弧倉朝	—	(2.3)	6.0	10以下 底部100		外：明黄褐10YR6/5 内：灰N4/0 断：灰N4/0	摩耗しており調整不明
	45		須恵器　杯H蓋	1	弧倉朝	(10.4)	(3.5)	—	30 口縁20	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後調整（回転ヘラナズリを施すか）
	46		須恵器　杯H	1	弧倉朝	(10.0)	(3.9)	—	10以下	反転復元	外：青灰5B5/1 内：青灰5B5/1 断：暗青灰5B4/1	回転ナデ
	47		須恵器　杯B	1	弧倉朝	—	(2.2)	(10.4)	10以下 底部20	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：暗灰N3/0	回転ナデ
	48		須恵器　杯B	1	弧倉朝	—	(2.3)	(8.6)	10以下 底部20	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面の詳細不明
	49		須恵器　杯B	2	弧倉朝	—	(1.8)	(9.2)	10以下 底部20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰白N7/0 断：灰N5/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整または強い静止ナデ
	50		須恵器　杯B	2	弧倉朝	—	(1.7)	(9.2)	10以下 底部20	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：灰N6/2.5YR5/2	回転ナデ
	51	17	須恵器　杯B	1	弧倉朝	(13.2)	3.7	9.0	60 （底部100 高台50）	反転復元 各合転用	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：明褐N7.5YR7/1	回転ナデ 底部外面の詳細不明、工具痕あり

表3　掲載遺物一覧表（3）

地区	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作業方法	色調	備考
39	52		須恵器　杯A	1	包含層	(11.6)	3.0	(5.8)	30	反転復元	外：灰N4/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り後し後撫い砂土ナデ
	53		須恵器　杯A	2	包含層	(10.9)	3.7	7.5	30	反転復元（底部以外）	外：灰N3/0～5/0 内：灰白N7/0 断：にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り後し後撫止ナデ
	54		須恵器　杯か	1	包含層	—	—	—	10以下		外：灰N5/0 内：灰N4/0 断：赤褐2.5/1	断面図の上面回転ナデ、中央部（左側）静止ナデ 断面図の下面回転ヘラケズリ、ヘラ記号
	55		土師器　甕	2	包含層	(23.6)	(6.3)	—	10以下	反転復元	外：10YR7/3にぶい黄橙 内：10YR5/4にぶい黄橙 断：10YR5/2灰黄褐	摩耗しており調整不明
	56		須恵器　甕	2	包含層	(20.9)	(3.4)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ
	57		須恵器　甕	2	包含層	(17.5)	(3.5)	—	10以下 口縁20	反転復元 一部転用	外：灰白N7/0 内：灰白N8/0 断：灰白5Y8/1	回転ナデ 肩部外面ホキ目
	58		須恵器　高杯	2	包含層	—	(3.6)	—	10以下	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白N7/0 断：灰白N8/0	径6mmの透かしあり 摩耗しており調整不明
	59		須恵器　高杯	1	包含層	—	(3.5)	—	20	反転復元（一部） 一部転用	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰白N7/0	脚部の2方に透かしあり、 対称の位置よりややずれている
	60		須恵器　壺	2	包含層	—	(3.4)	(9.2)	10以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部外面糸切り痕し
	61		須恵器　壺	1	包含層	—	(4.3)	(9.3)	20 底部40	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部外面糸切り痕し
	62	17	須恵器　壺	1	包含層	—	(8.0)	7.7	50 底部100		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部外面糸切り痕し
	63		土師器　甕	1	包含層	—	(12.8)	—	10以下		外：明褐7.5YR5/6 内：橙7.5YR6/6 断：にぶい黄7.5YR5/4	胎土粗い（径1～4mmの砂粒多く含む）
	64		黒色土器　A類椀	1	包含層	(16.8)	(4.1)	—	20	反転復元	外：（体部）にぶい橙5YR7/4 （口縁）暗灰N3/0 内：暗灰N3/0 断：灰白10YR8/2	高台欠損 口縁端部磨滅 摩耗しており調整不明
	65	17	緑釉陶器　椀	1	包含層	(12.7)	4.4	(6.2)	20	反転復元	外：淡黄橙10YR8/4（釉） 内：淡黄橙10YR8/4（釉） 断：淡黄橙7.5YR8/3	内外面ミガキを密に施す 全体に施釉
	66	17	土製品 粘板遺具　灯竜	3	包含層	—	(3.2)	—	30		外：淡黄7.5YR8/4 内：淡黄7.5YR8/4 断：灰N8/0	下部欠損

03－1調査区

地区	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
39	67		土師器　鍋	2	52 遺物5	(16.0)	(2.3)	—	10以下	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：にぶい橙7.5YR6/4	口縁端部磨滅 摩耗しており調整不明
	68		須恵器　甕	2	52 遺物5	(17.5)	(4.5)	—	10以下	反転復元	外：N5/C様 内：N5/C様 断：にぶい橙7.5YR5/4	回転ナデ 肩部外面ホキ目か
	69		須恵器　杯B	2	31 遺物6	—	(2.0)	(11.0)	10以下	反転復元 体部転用	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ
	70		須恵器　杯A	2	19 遺物6	(17.6)	3.2	(14.1)	10以下	反転復元	外：灰白5Y8/1 内：灰白5Y8/1 断：灰白5Y8/1	摩耗しており調整不明
	71	31	土師器　皿B	2	54 遺物6	(27.0)	(3.4)	(22.4)	15以下	反転復元	外：橙5Y8/6 内：淡黄橙10YR8/3 断：淡黄橙7.5YR8/3	口縁端部・底台畿付き若干欠損 内面横ナデ、新放射状暗紋 外面横ナデ、ヘラミガキ
	72		須恵器　蓋	2	64 遺物7	—	(1.7)	—	10以下		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	内面回転ナデ、中央に静止ナデを施すか 外面回転ヘラケズリ
	73		須恵器　杯B	2	64 遺物7	(11.8)	3.4	(7.6)	30 口縁10 底部50	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白7.5Y7/1 断：灰白7.5Y7/1	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ（不定方向） 底部外面の調整不明
	74		土師器　甕	2	64 遺物7	(14.6)	(4.6)	—	10以下	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：にぶい黄橙10YR7/2	口縁部外面横ナデ 体部外面ハケ 内面摩耗しており調整不明
	75		土師器　鍋A	2	35 遺物8	(20.3)	2.6	—	10以下	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：橙5YR6/5	摩耗しており調整不明

表４　掲載遺物一覧表（４）

挿図	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	現存率(%)	作図方法	色調	備考
39	76		須恵器　杯B	2	34 建物８	—	(1.7)	(16.8)	10以下	反転復元 体部転用	外：灰7.5Y7/1 内：灰7.5Y7/1 断：灰7.5Y7/1	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面粗い静止ナデ
	77		須恵器　杯H	5	123 住居９	(11.2)	(2.6)	—	10以下	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	口縁部若干欠損 回転ナデ
	78		土師器　杯A	5	128 建物10	(12.6)	(3.0)	—	10以下	反転復元	外：浅黄橙10YR8/4 内：浅黄橙10YR8/4 断：橙5YR6/6	口縁部から体部横ナデ 底部摩耗しており調整不明
	79		土師器　椀手	5	137 建物12	—	—	—	10以下		外：浅黄橙7.5YR8/3 内：浅黄橙7.5YR8/3 断：黄灰2.5Y6/1	
	80		須恵器　蓋	5	139 建物13	—	(1.5)	—	10以下		外：灰白7.5Y8/1 内：灰白7.5Y8/1 断：灰白7.5Y8/1	回転ナデ 内面摩耗しており調整不明
40	81		須恵器　杯B蓋	5	144ピット	(13.2)	(1.4)	—	10以下	反転復元	外：灰白N7/0 （口縁部）暗N5/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	摩耗しており つまみの有無不明、調整不明瞭
	82		須恵器　杯B	2	76ピット	—	(2.9)	(9.5)	10以下	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外面の詳細不明
	83		土師器　杯A	5	135ピット	(12.8)	(3.2)	—	10以下	反転復元	外：橙5YR7/8 内：橙5YR7/8 断：橙5YR6/6	摩耗しており調整不明瞭 口縁部ナデ
	84		土師器　鉢	2	24溝	(15.1)	(2.3)	—	20 口縁30	反転復元	外：橙2.5YR7/6 内：橙2.5YR7/6 断：橙2.5YR7/6	口縁部摩耗 摩耗しており調整不明
41	85		須恵器　杯H蓋	2	29土坑	(12.8)	(2.4)	—	10以下	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ
	86		須恵器　杯蓋	2	29土坑	(12.4)	(1.3)	—	10以下	反転復元	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N5/0	回転ナデ
	87		須恵器　杯A	2	29土坑	(16.8)	(4.7)	(12.7)	10以下	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部外面摩耗しており調整の有無不明（回転ケズリ・回転ナデは施していない）
	88	31	須恵器　壺	2	29土坑	—	(8.0)	8.5	30 底部100	反転復元 （底部 以外）	外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰N4.25Y6/1	回転ナデ
	89		土師器　甕	2	29土坑	(25.3)	(11.8)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	摩耗しており調整不明瞭 体部外面ハケ
	90		土師器　杯A	2	29土坑	(12.0)	3.2	—	60 口縁26	反転復元	外：にぶい橙2.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：橙7.5YR7/6	口縁部摩耗 摩耗しており調整不明
	91		須恵器　杯Gか	2	30土坑	—	(2.6)	—	30	反転復元	外：灰白N7/0～暗N3/0 内：灰白N7/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部外面回転ヘラケズリ、後に回転ナデを施すか
44	92		須恵器　杯G蓋	1	7土坑	8.4	(2.3)	—	90 つまみ欠損		外：暗N6/0 内：灰白N7/0 断：暗N6/0	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	93		土師器　杯C	1	7土坑	(9.8)	(3.0)	—	70 口縁100	反転復元 （口縁部）	外：明赤褐5YR5/6 内：明赤褐5YR5/6 断：明赤褐5YR5/6	口縁端部摩耗 摩耗しており調整不明
	94		土師器　高杯	1	7土坑	(16.7)	(3.3)	—	20 口縁30	反転復元	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰黄褐10YR6/2 断：明赤褐5YR5/6	口縁端部摩耗 摩耗しており調整不明
	95		土師器　高杯	1	7土坑	—	(2.2)	—	10以下	反転復元 （一部）	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：浅黄橙10YR8/3	摩耗しており調整不明
	96		土師器　高杯	1	7土坑	—	(2.6)	—	10以下		外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR6/4 断：にぶい黄橙10YR6/4	摩耗しており調整不明
	97		土師器　甕	1	7土坑	(12.8)	(4.3)	—	10以下	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/4 内：灰黄褐10YR5/2 断：にぶい黄橙10YR6/4	口縁端部摩耗 摩耗しており調整不明
	98		土師器　甕	1	7土坑	(13.0)	(5.3)	—	10以下	反転復元	外：暗N10YR6/1 内：灰黄褐10YR5/2 断：灰黄褐10YR5/2	摩耗しており調整不明瞭 体部内面ヘラケズリ
	99		土師器　甕	1	7土坑	(14.0)	(6.1)	—	10以下 口縁30	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：灰黄褐10YR5/2 断：灰黄褐10YR5/2	口縁部外面ハケ後に横ナデ 体部外面ハケ 内面摩耗しており調整不明
	100	31	須恵器　杯G蓋	3	8土坑	8.4	(2.2)	—	80 口縁70		外：暗N5/0 内：暗N5/0 断：暗N5/0	つまみ欠損　口縁部の歪み顕著 回転ナデ　天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	101		土師器　杯B	3	8土坑	—	(1.5)	(10.1)	10以下	反転復元	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR6/6 断：橙7.5YR6/6	高台部摩滅著しい（削ぎ出の幅は本来はもう少し広いと思われる） 摩耗しており調整不明

表5　掲載遺物一覧表（5）

挿図	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
46	102	28	須恵器　椀	3・4	16溝	(8.0)	(9.0)	—	20 口縁部0	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白N7/0 断：灰7.5Y5/1	摩耗しており調整不明、台の有無も不明
	103		須恵器　脚部	3・4	16溝	—	(2.6)	(9.8)	10.2以下 底部30	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ
	104		須恵器　脚部	3・4	16溝	—	(2.7)	(9.0)	10.2以下 底部30	反転復元	外：灰白5Y7/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ
	105	28	須恵器　高杯	3・4	16溝	(8.6)	5.1	5.6	40 口縁30	反転復元 (杯部)	外：褐N5/0 内：褐N6/0 断：灰褐7.5YR5/2	杯部回転ナデ、底部内面中央静止ナデ、底部外面回転ヘラケズリ 脚部回転ナデ、内面上部に絞り痕
	106	28	須恵器　高杯	3・4	16溝	9.9	9.5	8.7	80 口縁70		外：灰白N7/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	杯部回転ナデ、底部内面中央静止ナデ、底部外面回転ケズリまたはヘラ切り離し痕 脚部回転ナデ、内面上部に絞り痕止ナデを強すか
	107		須恵器　平瓶または提瓶	3・4	16溝	(5.8)	(2.7)	—	10未満 口縁40	反転復元	外：褐N6/0 内：褐N6/0 断：灰白N7/0	回転ナデ
	108		須恵器　平瓶	3・4	16溝	(11.0)	(22.6)	14.9	50	反転復元 (体部) 口縁部 転用復元	外：褐N4/0 内：褐N6/0 断：褐N6/0	口縁部大きく歪む、沈線3条　肩部と体部の境に沈線2条　外部口縁部上端回転ナデ、口縁部ヨコ目、肩部上半回転ナデ、肩部下半ヨコ方ナデ、体部上半ナデ、体部下半から底部回転ケズリ　内面回転ナデ、底部静止ナデ
47	109		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(9.5)	3.1	—	60 口縁20	反転復元 (口縁部)	外：暗青灰5PB4/1 内：暗青灰5PB4/1 断：にぶい赤褐5YR5/3	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後不調整
	110	29	須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	9.9	2.9	—	100		外：灰7.5Y5/1 内：灰白N7/0 断：—	回転ナデ　天井部内面中央静止ナデ　天井部外面ヘラ切り離し後無い静止ナデ（外縁部分にはヘラ切り離し痕を残す）、底面剥離あり
	111		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.3)	(3.3)	—	20 口縁20	反転復元	外：褐N6/0 内：褐N6/0 断：にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデ 天井部外面調整の有無不明
	112		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.4)	3.1	—	40 口縁40	反転復元	外：褐N6/0 内：褐N6/0 断：褐N6/0	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデ
	113		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.4)	3.3	—	50 口縁40	反転復元 (口縁部)	外：灰白2.5YR8/2 内：灰白2.5YR8/2 断：灰白2.5YR8/2	摩耗しており調整不明
	114		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.5)	(3.1)	—	20 口縁20	反転復元	外：青灰5PB5/1 内：青灰5PB5/1 断：灰赤2.5YR5/2	回転ナデ
	115		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	10.6	3.1	—	20 口縁20	口縁部 転用復元	口縁部の歪み調整　回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデを強すか（外縁部分にはヘラ切り離し痕を残す） （—25）	
	116		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.7)	3.0	—	20 口縁20	反転復元	外：褐N5/0 内：褐N6/0 断：褐N6/0	回転ナデ　天井部内面中央静止ナデ　天井部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデ（外縁部分には ヘラ切り離し痕を残す）
	117		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.8)	(2.9)	—	30 口縁20	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデを強すか、底部剥離あり
	118		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.8)	3.5	—	60 口縁20	反転復元 (口縁部)	外：灰7.5Y5/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ　天井部内面中央静止ナデ　天井部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデ（外縁部分には ヘラ切り離し痕を残す）
	119		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(10.9)	(3.5)	—	50 口縁30	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 天井部外面中央静止ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデ
	120		須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	(11.0)	3.6	—	70 口縁30	反転復元 (口縁部)	外：褐N6/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	口縁部の歪み調整　回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ　天井部外面ヘラ切り離し後不調整か、底板痕跡あり
	121	29	須恵器　杯H蓋	3・4	16溝	11.2	3.8	—	100		外：灰白10YR7/1 内：灰白10YR8/1 断：—	摩耗しており調整不明瞭
	122		須恵器　杯H	3・4	16溝	(8.2)	(2.9)	—	20 口縁20	反転復元	外：褐N6/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外面調整の有無不明、底板痕跡あり
	123		須恵器　杯H	3・4	16溝	8.8	3.1	—	70 口縁60		外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ　摩耗しており、底部外面ヘラ切り離し後の調整の有無不明（回転ケズリ・粗転ナデは認していない可能性高い）
	124		須恵器　杯H	3・4	16溝	(8.9)	2.6	—	50 口縁50	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後不調整または粗い静止ナデ
	125		須恵器　杯H	3・4	16溝	(8.9)	(3.0)	—	30 口縁50	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後の調整の有無不明 粗（静止ナデを強すか）
	126		須恵器　杯H	3・4	16溝	9.0	2.6	—	50 口縁40	一部 転用復元	外：褐N6/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデ
	127		須恵器　杯H	3・4	16溝	(9.0)	(2.9)	—	40 口縁40	反転復元	外：褐N6/0 内：褐N6/0 断：褐N6/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後、等止ナデ

表6　掲載遺物一覧表（6）

師団	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
47	128		須恵器　杯H	3・4	16層	(9.0)	(3.0)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外面調整の有無不明
	129		須恵器　杯H	3・4	16層	(9.1)	2.6	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後中央部のみ強い静止ナデを施す由
	130	28	須恵器　杯H	3・4	16層	9.1	3.3	—	100		外：灰白N7/0 内：灰N6/0 断：—	回転ナデ　底部内面中央静止ナデ 底部外縁約縁してより調整の有無不明瞭、ヘラ切り離し後中央のみ強い静止ナデを施すか
	131		須恵器　杯H	3・4	16層	(9.2)	3.1	—	30 口縁30	反転復元 (口縁部)	外：黄褐2.5Y6/1 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後不調整か、粘状痕跡あり
	132	28	須恵器　杯H	3・4	16層	9.3	2.9	—	70 口縁70		外：灰7.5Y6/1 内：灰N8/0 断：灰N8/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ
	133		須恵器　杯H	3・4	16層	9.3	3.6	—	50 口縁50		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ
	134		須恵器　杯H	3・4	16層	9.5	3.5	—	100		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰#2.5YR5/2	回転ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ、粘状痕跡あり
	135	28	須恵器　杯H	3・4	16層	9.6	3.1	—	100		外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデまたは不調整、粘状痕跡あり
	136	28	須恵器　杯H	3・4	16層	9.7	3.1	—	100		外：灰N6/0 内：灰白N7/0 断：—	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後不調整か
	137		須恵器　杯H	3・4	16層	(9.9)	(3.0)	—	80 口縁20	反転復元 (口縁部)	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ
	138		須恵器　杯H	3・4	16層	(10.0)	2.9	—	20 口縁20	反転復元	外：灰7.5Y6/1 内：灰白N7/0 断：灰7.5Y4/1	回転ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ
	139	28	須恵器　杯H	3・4	16層	10.0	3.3	—	100		外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ　底部内面静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデまたは不調整、粘状痕跡あり
	140		須恵器　杯H	3・4	16層	(10.0)	3.4	—	50 口縁50	口縁部 転用復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部内面中央工具による静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ
	141	29	須恵器　杯G蓋	3・4	16層	7.6	2.7	—	100		外：灰白N7/0 内：明青灰5PB7/1 断：—	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	142	29	須恵器　杯G蓋	3・4	16層	7.8	2.6	—	100		外：灰N6/0 内：灰7.5Y6/1 断：—	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	143		須恵器　杯G蓋	3・4	16層	8.4	(2.1)	—	90 つまみ欠損		外：灰N5/0 内：灰N5/0 断：灰褐5YR5/2	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	144		須恵器　杯G蓋	3・4	16層	8.6	(1.9)	—	90 つまみ欠損		外：オリーブ黒2.5GY6/1 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	外面全体に自然釉付着しており調整不明 内面回転ナデ
	145		須恵器　杯G蓋	3・4	16層	(8.8)	(2.5)	—	10以下	反転復元 (つまみ上部)	外：灰白5Y7/1 内：灰白N7/0 断：灰白5Y7/1	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	146	29	須恵器　杯G蓋	3・4	16層	9.5	(2.5)	—	90 つまみ欠損		外：褐灰10YR5/1 内：灰N6/0 断：灰褐7.5YR5/2	回転ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	147		須恵器　杯G	3・4	16層	(10.0)	3.7	—	60 口縁40	口縁部 転用復元	外：灰5Y6/1 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後粗い静止ナデ
	148	29	須恵器　杯G	3・4	16層	9.7	3.4	—	100		外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：—	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面回転ヘラケズリ、ヘラ記号
	149	29	須恵器　杯G	3・4	16層	10.1	3.9	—	70 口縁70		外：灰N8/0 内：灰2.5Y6/1 断：にぶい黄5YR6/4	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面回転ヘラケズリ
	150		須恵器　杯G	3・4	16層	10.2	4.2	—	70 口縁90	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰N6/0 断：にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外縁回転ヘラケズリ
	151		須恵器　杯G	3・4	16層	10.9	4.0	—	70 口縁50		外：灰N6/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部内面静止ナデ 底部外縁ヘラ切り離し後強い静止ナデ
48	152		土師器　杯C	3・4	16層	(8.3)	(3.3)	—	10以下 口縁20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：橙5YR6/8 断：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明
	153		土師器　杯C	3・4	16層	(8.4)	(2.7)	—	10 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/4 内：浅黄橙10YR8/4 断：橙7.5YR6/6	口縁端部摩耗 摩耗しており調整不明

表７　掲載遺物一覧表（７）

挿図	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
48	154		土師器　杯C	3・4	16溝	(8.6)	(3.5)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/6 断：橙5YR6/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	155	30	土師器　杯C	3・4	16溝	(8.9)	(3.3)	—	50 口縁50	反転復元	外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/6 断：橙5YR6/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	156		土師器　杯C	3・4	16溝	(8.9)	(3.4)	—	70 口縁60		外：灰白10YR8/2 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：橙5YR5/3	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 内面剥離状態硬化
	157		土師器　杯C	3・4	16溝	(9.0)	(3.4)	—	20 口縁10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：橙5YR5/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 内面剥離状態硬化
	158		土師器　杯C	3・4	16溝	(9.4)	(3.5)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白10YR8/2 内：灰白10YR8/2 断：橙7.5YR7/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	159		土師器　杯C	3・4	16溝	(9.8)	(3.1)	—	20 口縁10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断：明赤褐5YR5/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 内面剥離状態硬化
	160	30	土師器　杯C	3・4	16溝	9.8	3.6	—	100		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：橙5YR6/6	摩耗しており調整不明 内面剥離状態硬化 体部外面に黒斑
	161		土師器　杯C	3・4	16溝	(10.0)	(3.0)	—	30 口縁10	反転復元	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙7.5YR7/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	162		土師器　杯C	3・4	16溝	(10.7)	(3.4)	—	30 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR6/3 内：にぶい黄橙10YR6/3 断：明赤褐5YR5/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	163		土師器　杯C	3・4	16溝	(11.7)	(4.2)	—	40 口縁20	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：浅黄橙10YR8/4 断：明赤褐5YR5/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 内面剥離状態硬化
	164	30	土師器　杯C	3・4	16溝	(13.0)	(5.1)	—	50 口縁50	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：明赤褐5YR5/6	摩耗しており調整不明
	165	30	土師器　杯C	3・4	16溝	14.2	5.2	—	90 口縁90		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：にぶい黄橙10YR7/3	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	166		土師器　杯C	3・4	16溝	(14.8)	(5.1)	—	40 口縁40	反転復元	外：橙5YR7/6 内：にぶい黄橙10YR7/2 断：橙5YR7/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	167		土師器　杯C	3・4	16溝	15.2	5.5	—	90 口縁80		外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 断：浅黄橙7.5YR8/4	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	168		土師器　杯C	3・4	16溝	(14.8)	(5.0)	—	30 口縁30	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：橙5YR6/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	169		土師器　杯C	3・4	16溝	(15.5)	(5.6)	—	40 口縁20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/3 断：橙7.5YR7/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	170		土師器　杯C	3・4	16溝	(16.2)	(4.7)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明瞭 内面剥離状態硬化 体部外面ヘラケズリ
	171		土師器　杯C	3・4	16溝	(16.4)	(6.5)	—	30 口縁40	反転復元 (底部以外)	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：橙5YR6/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 内面剥離状態硬化
	172	30	土師器　鉢	3・4	16溝	(20.6)	(5.4)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：橙5YR6/6 断：橙5YR6/6	摩耗しており調整不明 内面２段剥離状態・板状状硬化
	173		土製品　土錘	3・4	16溝	長さ5.1　最大径2.2			100		外：明灰10YR4/1 内：— 断：—	
49	174	30	土師器　高杯	3・4	16溝	(8.0)	(5.2)	5.4	60 脚部90	反転復元 (脚裾部以外)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：明黄橙10YR7/6 断：にぶい黄橙10YR7/2	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	175		土師器　高杯	3・4	16溝	—	(3.1)	(5.0)	40 脚部70	脚裾部 転用復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：浅黄橙10YR8/3 断：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明
	176		土師器　高杯	3・4	16溝	(15.4)	(4.3)	—	30 口縁70	反転復元 (口縁部～体部)	外：浅黄橙7.5YR8/4 内：橙5YR6/8 断：にぶい橙7.5YR7/4	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 杯部内面剥離状態硬化
	177		土師器　鳥杯	3・4	16溝	(13.6)	(3.5)	—	20 口縁30	反転復元	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙7.5YR7/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 鉢底との接合部で破損
	178		土師器　鳥杯	3・4	16溝	—	(2.4)	—	10以下	一部 転用復元	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙7.5YR7/6	摩耗しており調整不明
	179	30	土師器　鳥杯	3・4	16溝	(16.3)	(11.6)	11.2	70	反転復元 (杯部)	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 杯部内面剥離状態硬化

表8　掲載遺物一覧表（8）

挿図	遺物番号	図版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	現存率(%)	作図方法	色調	備考
49	180		土師器　高杯	3・4	16層	(14.4)	(3.4)	—	10以下口縁10	反転復元	外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/6 脚：橙5YR6/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	181		土師器　高杯	3・4	16層	—	(5.2)	—	10以下		外：橙5YR6/6 内：橙5YR6/5 脚：淡黄橙7.5YR8/4	摩耗しており調整不明
	182		土師器　高杯	3・4	16層	—	(4.7)	—	30脚部70		外：淡黄橙10YR8/3 内：淡黄橙10YR8/3 脚：明赤褐5YR5/6	摩耗しており調整不明瞭 脚部内面縦ヘラ痕、脚裾部内面ハケ
	183		土師器　高杯	3・4	16層	—	(5.6)	—	30脚部60		外：にぶい黄橙10YR7/3 内：にぶい黄橙10YR7/3 脚：明赤褐5YR5/6	摩耗しており調整不明 脚部内面縦ヘラ痕
	184	30	土師器　高杯	3・4	16層	—	(5.8)	(11.1)	20脚部50	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/3 内：明赤褐5YR5/6 脚：明赤褐5YR5/6	脚部内面縦ヘラ痕、指オサエ 脚部外面摩耗しており調整不明、脚裾部外面ハケ
	185		土師器　高杯	3・4	16層	—	(5.5)	(12.2)	20脚部50	脚裾部転用復元	外：橙5YR6/6 内：灰白10YR8/2 脚：灰白10YR8/2	摩耗しており調整不明
	186		土師器　高杯	3・4	16層	—	(6.2)	—	20	反転復元（一部）	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 脚：にぶい黄橙10YR7/4	摩耗しており調整不明 脚部内面縦ヘラ痕
	187		土師器　高杯	3・4	16層	—	(7.9)	(9.7)	30脚部80	反転復元（脚裾部）	外：橙5YR6/8 内：淡黄橙10YR8/4 脚：淡黄橙10YR8/4	脚部内面縦ヘラ痕 脚裾部内面指オサエ 外面摩耗しており調整不明
	188		土師器　高杯	3・4	16層	—	(8.2)	11.5	30脚部80		外：灰白2.5Y8/2 内：にぶい黄橙10YR7/4 脚：灰白2.5Y8/2	摩耗しており調整不明 脚裾部内面ハケ
	189		土師器　鉢手	3・4	16層	—	—	—	10以下		外：淡灰2.5Y8/3 内：— 脚：にぶい橙7.5YR6/4	指オサエ・ナデ
	190		土師器　甕	3・4	16層	(12.0)	(6.5)	—	10以下口縁10	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 脚：にぶい黄橙10YR7/4	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	191		土師器　甕	3・4	16層	(10.4)	(5.1)	—	10以下口縁10	反転復元	外：にぶい橙7.5YR8/3 内：にぶい橙7.5YR8/3 脚：にぶい橙7.5YR8/3	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 体部外面ハケを施すか
	192	30	土師器　甕	3・4	16層	(11.0)	(8.0)	—	30口縁60	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/4 内：にぶい橙7.5YR7/4 脚：にぶい橙7.5YR7/4	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 体部内面ナデ痕を残すか
	193		土師器　甕	3・4	16層	(13.0)	(10.2)	—	70口縁20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR8/3 内：灰褐橙10YR6/2 脚：橙2.5YR6/5	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明瞭 体部外面ハケ
	194		土師器　甕	3・4	16層	(12.6)	(10.7)	—	10口縁20	反転復元	外：灰黄褐10YR6/2 内：灰黄褐10YR5/2 脚：灰黄褐10YR5/2	摩耗しており調整不明瞭 口縁部内面・体部外面ハケ
	195		土師器　甕	3・4	16層	(13.2)	(7.6)	—	20以下口縁30	反転復元	外：灰黄褐10YR4/2 内：灰黄褐10YR8/4 脚：灰黄褐10YR4/2	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明瞭 体部外面ハケ
	196		土師器　甕	3・4	16層	(11.0)	(5.4)	—	10以下口縁20	反転復元	外：にぶい橙7.5YR7/3 内：にぶい橙7.5YR7/3 脚：橙5YR6/8	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	197		土師器　甕	3・4	16層	(14.6)	(11.7)	—	10以下口縁10	反転復元	外：にぶい橙7.5YR8/3 内：にぶい黄橙10YR7/4 脚：にぶい黄橙10YR7/4	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明 体部内面板状工具によるナデを施すか
50	198		土師器　甕	3・4	16層	(31.8)	(5.8)	—	10以下口縁10	反転復元	外：淡黄2.5Y7/4 内：淡黄2.5Y7/4 脚：灰白2.5Y8/1	口縁部内面・体部外面ハケ 口縁部外面・体部内面摩耗しており調整不明
	199		土師器　甕	3・4	16層	(30.0)	(7.7)	—	10以下口縁20	反転復元	外：橙5YR6/8 内：灰白10YR8/2 脚：灰白10YR8/2	口縁部外面縦ナデ 体部外面ハケ 内面摩耗しており調整不明
	200		土師器　甕	3・4	16層	(34.4)	(6.1)	—	10以下口縁20	反転復元	外：褐灰7.5YR4/1 内：にぶい橙7.5YR6/4 脚：にぶい橙7.5YR6/4	口縁部外面縦ナデ 体部外面ハケ 内面摩耗しており調整不明
	201		須恵器　杯H蓋	4	作土層～弘安期（16世紀上）	(8.0)	(3.1)	—	70口縁20	反転復元（天井部以外）	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 脚：灰白N7/0	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り痕し後不調整
	202		須恵器　杯H蓋	3	弘安期（16世紀上）	(9.8)	(3.2)	—	50口縁40	反転復元	外：青灰10BG6/1 内：青灰10BG6/1 脚：青灰10BG6/1	口縁部の沿み顕著 回転ナデ　天井部内面中央指止ナデ 天井部外面ヘラ切り痕し後粗い静止ナデ
	203	29	須恵器　杯H蓋	3	弘安期（16世紀上）	9.8	3.3	—	80口縁80	口縁部転用復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 脚：灰白N7/0	回転ナデ 天井部外面ヘラ切り痕し後粗い静止ナデ、稜状痕跡あり
	204		須恵器　杯H蓋	3	弘安期（16世紀上）	(10.3)	2.9	—	50口縁55	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 脚：灰白N7/0	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面ヘラ切り痕し後粗い静止ナデ
	205		須恵器　杯H	3	弘安期（16世紀上）	(9.0)	2.9	—	50口縁55	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 脚：灰7.5Y5/1	回転ナデ 底部外面ヘラ切り痕し後粗い静止ナデ、第3次痕跡あり

表9　掲載遺物一覧表（9）

挿図	遺物番号	図版	器種・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
50	206	29	須恵器　杯H	3	包含層(16溝直上)	9.0	2.6	—	30 口縁30		外：灰白7.5Y7/1 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ　底部内面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後強い静止ナデ、第状痕跡あり
	207		須恵器　杯H	3	包含層(16溝直上)	(10.0)	2.8	—	45 口縁30	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し後中央部のみ強い静止ナデ
	208		須恵器　杯H	3	包含層(16溝直上)	(10.3)	(3.3)	—	35 口縁30	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 底部外面ヘラ切り離し（中央部のみ静止ナデを施すか）
	209		須恵器　杯G蓋	3	包含層(16溝直上)	(9.6)	(2.2)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白N7/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	210		須恵器　杯G蓋	3	包含層(16溝直上)	(8.8)	(3.0)	—	20 口縁20	反転復元（つまみ以外）	外：灰白5Y8/1 内：灰白5Y7/1 断：灰白5Y7/1	回転ナデ 天井部内面中央静止ナデ 天井部外面回転ヘラケズリ
	211	29	須恵器　杯G	4	包含層(16溝直上)	(9.0)	3.4	—	70 口縁30	反転復元（口縁部）	外：灰白N7/0 内：灰白7.5Y7/1 断：灰白7.5Y7/1	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後粗い静止ナデ
	212		須恵器　杯G	3	包含層(16溝直上)	(9.7)	(3.6)	—	40 口縁部40	反転復元	外：灰N4/0 内：灰褐2.5G5/1 断：灰N4/0	回転ナデ 底部内面中央静止ナデ 底部外面調整しており調整の有無不明
	213		須恵器　盤	3	包含層(16溝直上)	(16.4)	(3.6)	—	20 口縁30	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白7.5Y7/1 断：灰N6/0	回転ナデ　底部内面静止ナデ　底部外面上半回転ヘラケズリを施すか　底部外面下半静止ナデを施すか
	214		須恵器　壺	3	包含層(16溝直上)	—	(5.0)	(10.5)	10以下	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：暗灰1CYR6/1	回転ナデ 体部外面回転ヘラケズリ
	215		土師器　甕	4	作土層－包含層(16溝直上)	(12.5)	(4.1)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰黄2.5Y6/2 内：灰黄2.5Y6/2 断：灰黄2.5Y6/2	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	216		土師器　高杯	3	包含層(16溝直上)	—	(8.1)	—	40 脚部60	反転復元（一部）	外：浅黄橙10YR8/3 内：橙2.5YR6/8 断：橙2.5YR6/8	脚部内面縦方向 脚部外面指痕すかエス 外面摩耗しており調整不明
	217		土師器　鍋か	3	包含層(16溝直上)	—	(7.2)	—	10以下		外：にぶい黄橙10YR6/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断：にぶい黄橙10YR7/4	
52	218		土師器　甕	2	44溝	(16.2)	(4.7)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：浅黄橙7.5YR8/4 断：にぶい褐7.5YR6/3	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	219		須恵器　壺か	2	44溝	—	(2.5)	(8.5)	10以下 底部30	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部外面詳細不明
	220		土師器　甑か	2	44溝	—	(3.7)	—	10以下		外：暗7.5Y3/6 内：灰白10YR8/2 断：灰白10YR8/2	指オサエ
53	221		須恵器　杯H	2	17溝(東半)	(9.0)	(3.3)	—	40 口縁30	反転復元（受部）	外：灰N6/0 内：灰N5/0 断：暗灰10YR5/1	回転ナデ　底部内面中央静止ナデ 底部外面ヘラ切り離し後強い静止ナデを施すか
	222		須恵器　杯H	2	17溝(東半)	—	(2.2)	(10.3)	10以下 底部10	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ 底部外面詳細不明
	223		須恵器　短頸壺	2	17溝(東半)	(12.5)	(2.7)	—	10以下 口縁10	反転復元	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N7/0	回転ナデ 肩部外面摩耗しており調整不明
	224		土師器　甑	2	17溝(東半)	—	(1.9)	—	10以下	一部反転復元	外：橙5YR5/8 内：橙5YR5/8 断：橙5YR5/8	
	225		土師器　杯	2	17溝(西半)	(14.2)	(3.1)	—	20 口縁30	反転復元	外：明黄褐10YR7/6 内：明黄褐10YR7/6 断：明黄褐10YR7/6	口縁端部摩滅 摩耗しており調整不明
	226	31	土師器　高杯	2	17溝(西半)	—	(13.4)	(11.1)	40 脚部70	反転復元（脚端部下半）	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙7.5YR7/6	摩耗しており調整不明瞭 脚部外面調整り 脚部内面縦ケ痕、粘土接合痕
	227		須恵器　杯B蓋	2	包含層(17溝直上)	(17.4)	(1.7)	—	20 口縁20	反転復元	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	回転ナデ
	228		須恵器　高杯	2	包含層(17溝直上)	—	(11.9)	—	30	反転復元（一部）	外：灰白N8/0 内：灰白N8/0 断：灰白N8/0	回転ナデ 脚部内面上部回転ヘラケズリ
	229		須恵器　杯A	2	包含層(17溝直上)	(15.6)	(3.2)	(13.0)	30 口縁30	反転復元	外：灰白N7/0 内：灰白7.5Y7/1 断：灰白7.5Y7/1	回転ナデ 底部外面静止ナデを施すか
	230		須恵器　短頸壺	2	包含層(17溝直上)	(9.0)	(5.7)	—	15以下 口縁10	反転復元	外：暗7.5Y3/1 内：暗N6/0 断：暗N6/0	回転ナデ 体部外面自然釉付着しており調整不明瞭
	231		須恵器　壺	2	包含層(17溝直上)	—	(4.5)	(13.0)	15以下 底部20	反転復元	外：灰白7.5Y7/1 内：灰白7.5Y7/1 断：灰白7.5Y7/1	体部外面回転ヘラケズリ 内面回転ナデ

表10　掲載遺物一覧表（10）

地区	遺物番号	遺版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
53	232		須恵器　甕	2	包含層(17清直上)	(25.8)	(8.3)	—	10以下口縁10	反転復元	外：灰7.5Y6/1 内：灰N7/0 断：灰N7/0	櫛原ナデ 体部外面格子状タタキ 体部内面同心円状当て具痕
	233		土師器　甕	2	包含層(17清直上)	—	(2.2)	—	10以下	反転復元(つまみ及外)	外：橙5YR6/8 内：灰白10YR8/2 断：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明
	234		土師器　甕	2	包含層(17清直上)	—	(2.3)	—	10以下	反転復元(つまみ及外)	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：橙5YR6/8 断：橙5YR6/8	摩耗しており調整不明
	235		土師器　鉢形	2	包含層(17清直上)	—	(9.7)	—	30		外：橙7.5YR7/6 内：橙5YR6/8 断：にぶい黄橙10YR6/4	摩耗しており調整不明瞭 櫛部外面刷毛？ 櫛部内面刷毛？痕
	236		土師器　椀	2	包含層(17清直上)	(12.2)	(3.8)	—	40 口縁40	反転復元	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：明赤褐5YR5/6 断：にぶい黄橙10YR7/4	口縁部摩滅 摩耗しており調整不明
	237		土師器　杯A	2	包含層(17清直上)	(13.2)	(3.3)	—	30 口縁30	反転復元	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙7.5YR7/6	口縁部摩滅　摩耗しており調整不明瞭 口縁部から体部内面横ナデを粗すか 底部外面指ナデか
	238		土師器　皿	2	17溝	(14.6)	2.7	—	80 口縁40	反転復元(口縁部一体復)	外：橙5YR6/8 内：橙5YR6/8 断：橙5YR6/8	口縁部摩滅 摩耗しており調整不明
	239		土師器　皿	2	包含層(17清直上)	(18.4)	(2.6)	—	30 口縁20	反転復元	外：浅黄橙10YR8/3 内：橙5YR6/6 断：橙5YR6/6	外面摩耗しており調整不明瞭（口縁部から体部横ナデ、底部指ナデか） 内面は着物のため調整不明

図版のみ掲載分

調査区	遺物番号	遺版	種類・器種	トレンチ	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率(%)	作図方法	色調	備考
02-1	240	16	黒色土器　A類椀	1	107ピット	—	(4.7)	—	20 口縁10	—	外：(口縁部)黒N2/0 (体部)浅黄2.5Y7/3 内：黄橙2.5Y5/1 断：黒N2/0	口縁端部内面沉線 摩耗しており調整不明
	241	17	製瓦土器	1	82 部ち込み	—	(7.5)	厚(1.7)	10以下	—	外：灰5Y5/1 内：にぶい褐2.5YR5/4 断：にぶい褐7.5YR5/4	内面有目 4 mまでの砂粒含む
03-1	242	31	須恵器　杯H蓋	4	竪土層	10.3	3.5	—	90 口縁80	—	外：灰N6/0 内：灰N6/0 断：灰N6/0	口縁部の沿み調著 回転ナデ 天井部外面ヘラ切り離し後丁寧に静止ナデ
	243	31	土師器　甕	5	竪土層	(18.2)	(11.2)	—	10以下 口縁40	—	外：浅黄橙7.5YR8/6 内：にぶい黄橙10YR7/3 断：浅黄橙10YR8/3	把手付　摩耗しており調整不明瞭 口縁端内面ケズリ 体部内面ケズリを施すか
	244	31	製瓦土器	2	17溝	—	(4.9)	厚(3.9)	10以下	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断：にぶい黄橙10YR7/4	内面布目
	245	37-4	製瓦土器	2	17溝	—	(10.5)	厚(2.8)	10以下	—	外：にぶい赤橙2.5YR6/3 黄灰2.5Y5/1 内：赤褐10R5/4 断：黄灰2.5Y5/1	摩耗しており調整不明 10mまでの砂粒含む
	246	37-4	製瓦土器	2	17溝	—	(6.0)	厚(2.5)	10以下	—	外：橙7.5YR7/6 内：橙7.5YR7/6 断：橙7.5YR7/6	内面指オサエ 3 mまでの砂粒含む
	247	37-4	製瓦土器	2	17溝	—	(4.7)	厚(4.7)	10以下	—	外：橙7.5YR6/6 内：明赤褐10YR7/6 断：明赤褐10YR7/6	摩耗しており調整不明 外面タタキを粗すか 5 mまでの砂粒含む
	248	37-4	製瓦土器	2	17溝	—	(4.7)	厚(2.8)	10以下	—	外：橙7.5YR6/6 内：橙7.5YR6/8 断：橙7.5YR6/8	外面タタキ 4 mまでの砂粒含む
	249	37-4・31	製瓦土器	2	17溝	—	(4.8)	厚(1.1)	10以下	—	外：にぶい褐7.5YR5/4 内：にぶい橙2.5Y6/4 断：にぶい黄橙10YR6/3	内面布目 6 mまでの砂粒含む
	250	37-4	製瓦土器	2	17溝	—	(6.0)	厚(0.8)	10以下	—	外：にぶい褐7.5YR7/4 内：にぶい褐7.5YR7/4 断：にぶい褐7.5YR7/4	外面指オサエ 内面布目 2 mまでの砂粒含む
	251	37-4	製瓦土器	2	54ピット基盤6	—	(5.7)	厚(1.1)	10以下	—	外：にぶい黄橙10YR7/2 内：浅黄橙10YR8/3 断：灰白10YR7/1	口縁部 摩耗しており調整不明 4 mまでの砂粒含む
	252	37-4	製瓦土器	3-4	包含層(16溝直上)	—	(4.6)	厚(1.2)	10以下	—	外：褐灰10YR5/1 内：灰5Y5/1 断：灰5Y5/1	口縁部 内外面指オサエ 直径1 mまでの砂粒含む
	253	37-4・31	製瓦土器	3-4	包含層(16溝直上)	—	(4.4)	厚(0.8)	10以下	—	外：にぶい黄橙10YR7/4 内：にぶい黄橙10YR7/4 断：にぶい黄橙10YR7/4	外面指オサエ 内面布目 器壁はとんど含まない

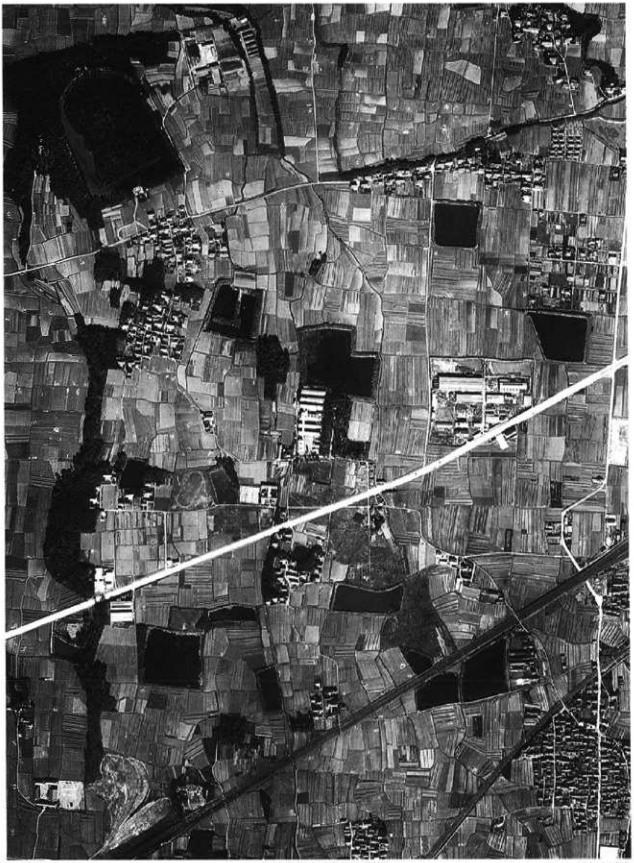
図　　版

図版１　調査地遠景

南西から

西から

図版２　総持寺遺跡周辺航空写真（１）



1942年撮影

©大阪市計画局計画部都市計画課所有

（上が北）

図版３　総持寺遺跡周辺航空写真（２）

1952年３月撮影　　©国土地理院所有（M34－３－20－M）　　（上が北）

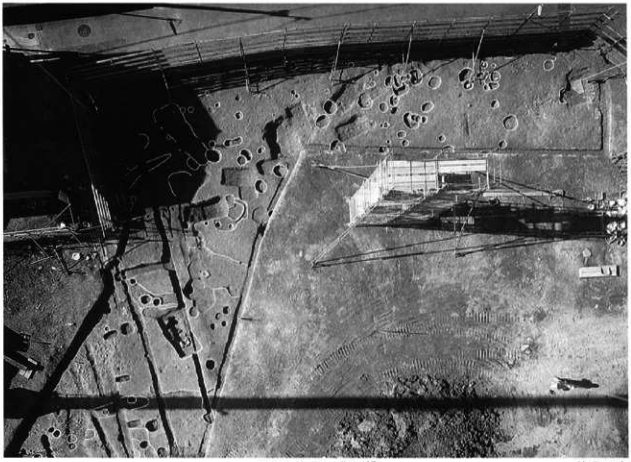
図版４　02－１調査区全景（１）

１トレンチ　　北から

１トレンチ　　南西から

図版５　02－１調査区全景（２）

２トレンチ　南東部　　北西から



２トレンチ　北西部　　航空写真

図版6　02－1調査区全景（3）

3トレンチ　北西から

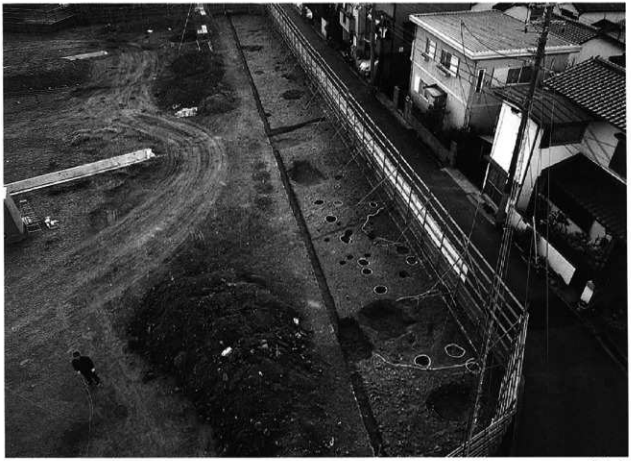
4トレンチ　航空写真

図版７　02－１調査区全景（４）

５トレンチ　東から

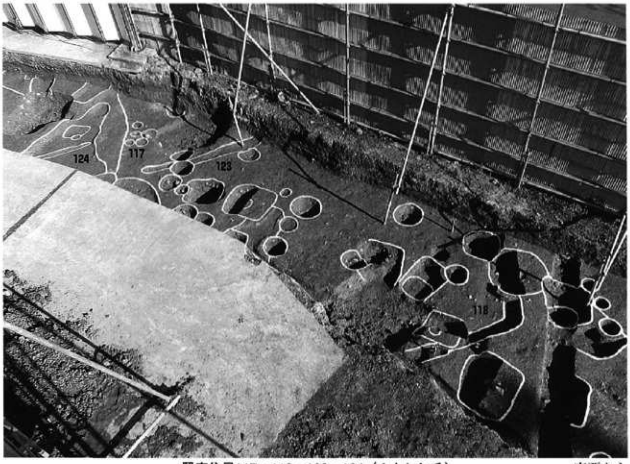
６トレンチ　東から

図版８　02－１調査区全景（５）

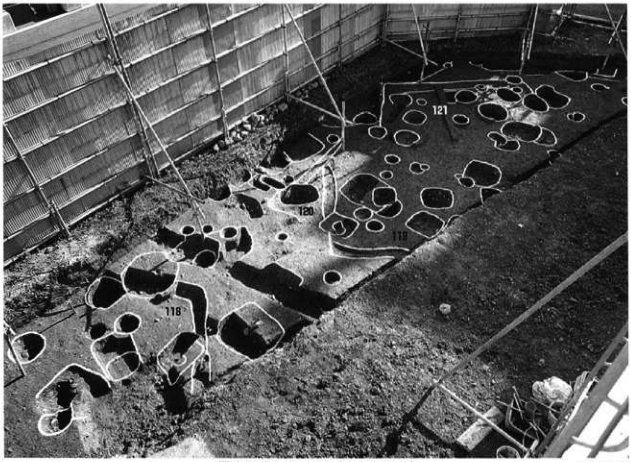


７トレンチ　北から

８トレンチ　東から

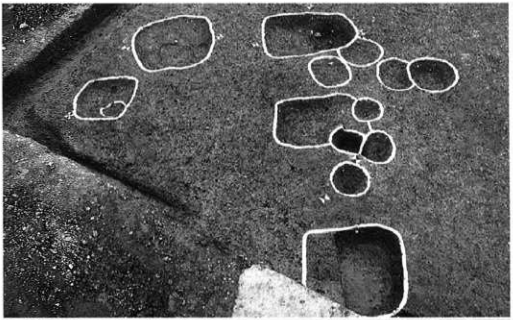


竪穴住居117・118・123・124（１トレンチ）　南西から

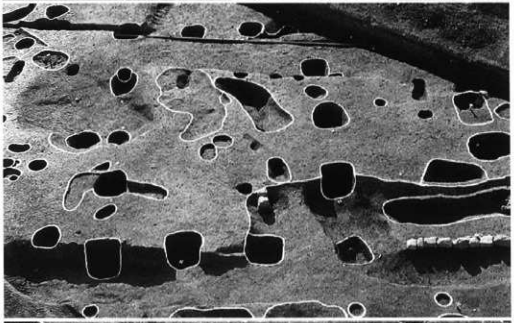


竪穴住居118～121（１トレンチ）　北西から

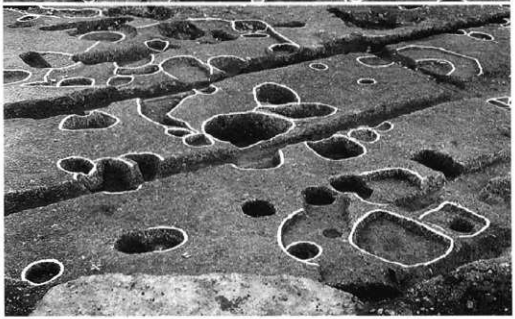
図版10　02－1調査区　掘立柱建物（1）



建物115
（1・2トレンチ）
南から

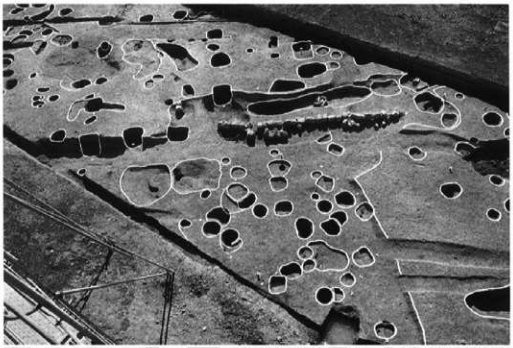


建物416
（2トレンチ）
北西から

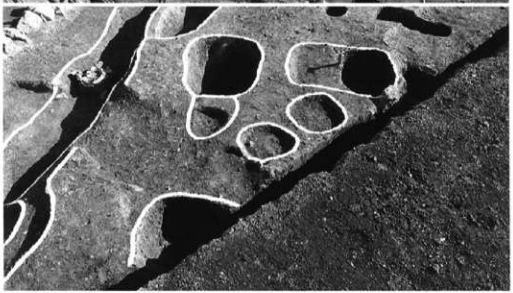


建物445
（2トレンチ）
南から

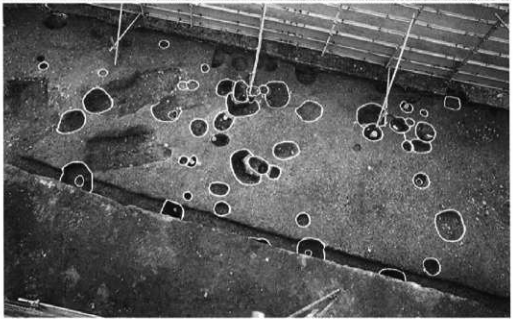
図版11　02－１調査区　掘立柱建物（２）



建物416・457・458・475（２トレンチ）北西から

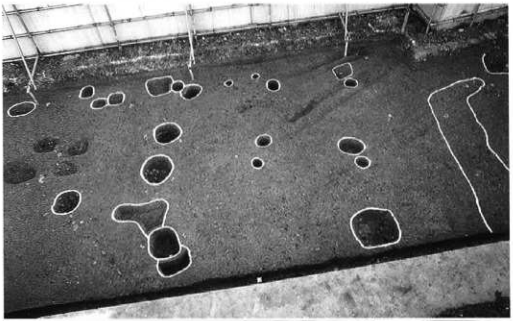


建物475（２トレンチ）南西から



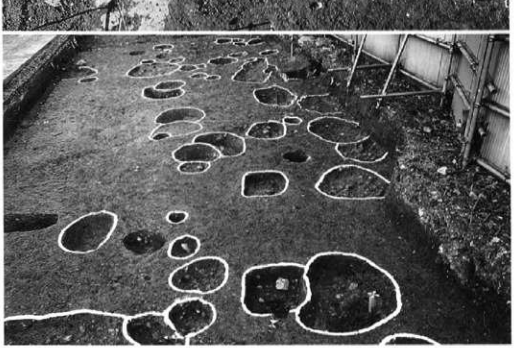
建物477・514（２トレンチ）東から

図版12　02－1調査区　掘立柱建物（3）



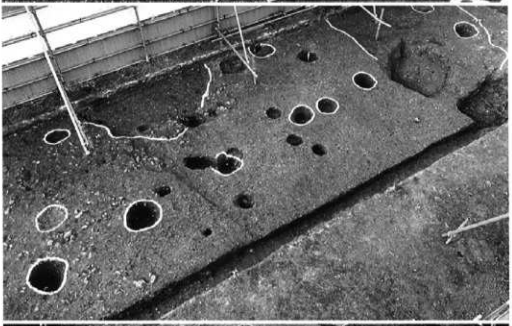
建物516
（3トレンチ）
西から

建物810・811
柵122・512
（1トレンチ）
航空写真

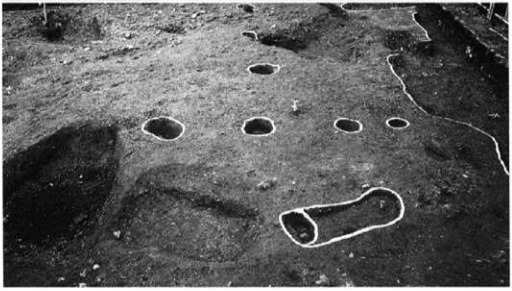


柵113
（1トレンチ）
南から

柵122
（1トレンチ）
南西から



柵162
（7トレンチ）
南東から



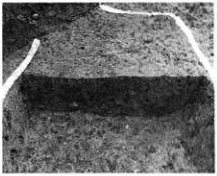
柵517
（6トレンチ）
北から

図版14　02－1調査区　ピット

建物416　419ピット　東から

建物416　449ピット　北から

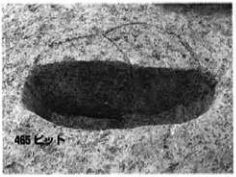
建物416　450ピット　北から


建物115　31ピット　東から

建物445　427ピット　東から

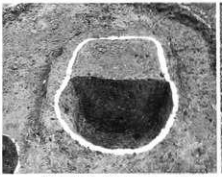
建物457　455ピット　南から

建物458　461ピット　西から



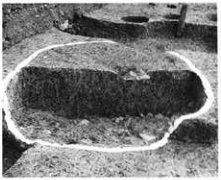
建物458　465ピット　東から

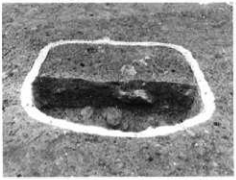
建物477　479ピット　南から


建物513　61ピット　東から

建物514　484ピット　南から

建物514　485ピット　493・494ピット　東から


建物811　75ピット　北から


柵113　3ピット　東から

柵162　153ピット　東から

図版15　02－１調査区　溝・土坑・落ち込み

25・46溝（１トレンチ）　西から

25・46溝　北から

492土坑（２トレンチ）　北西から

492土坑東端部石組　西から

410落ち込み（２トレンチ）　北西から

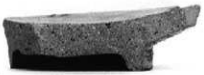
410落ち込み内石列　北東から

図版16　02－1調査区　出土遺物（1）

11溝　17

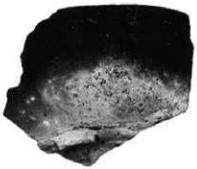
432土坑　12

25溝　22



494ピット　8

25・46溝　21



107ピット　240

25溝　23

469溝　29

25溝

25

図版17　02－1調査区　出土遺物（2）

410落ち込み　37

82落ち込み　31

410落ち込み　40

82落ち込み

241

包含層　66

包含層　42

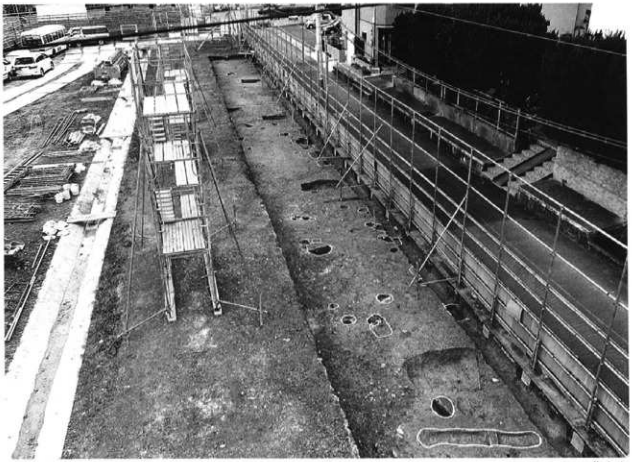
包含層　65

包含層　51

包含層　62

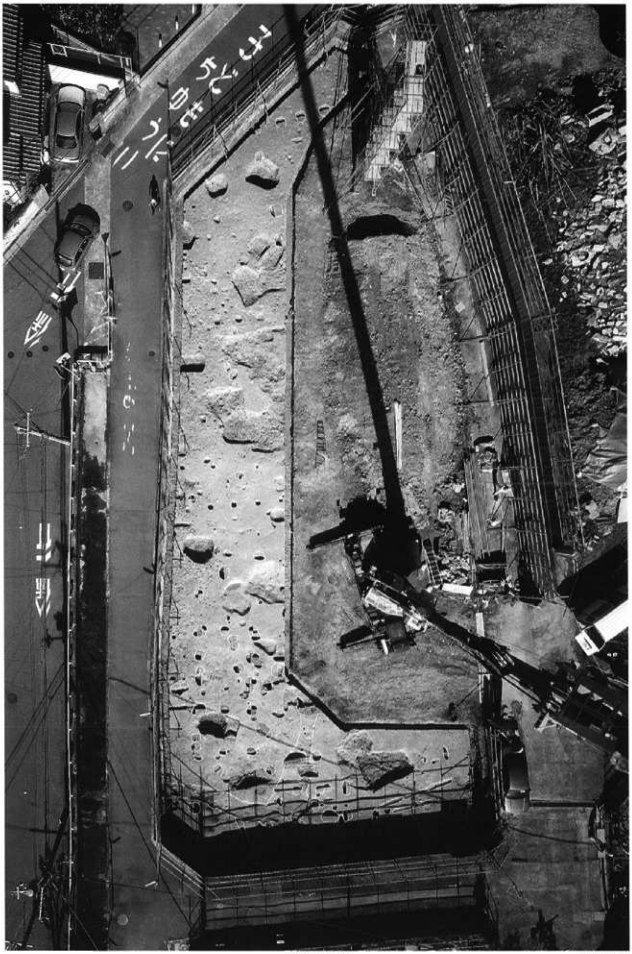
図版18　03－１調査区全景（１）

１トレンチ　　南から



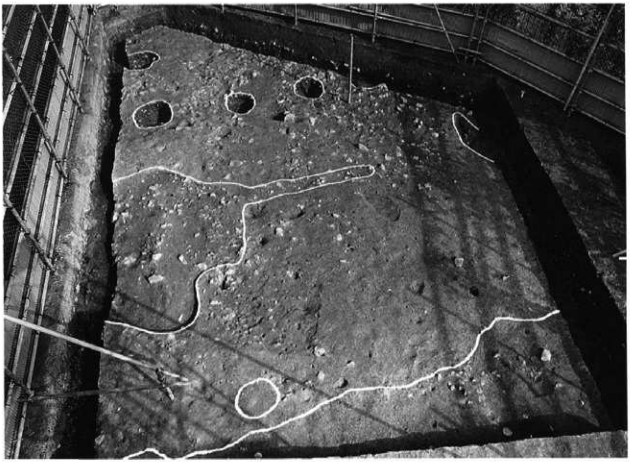
５トレンチ　　北から

図版19　03－1調査区全景（2）

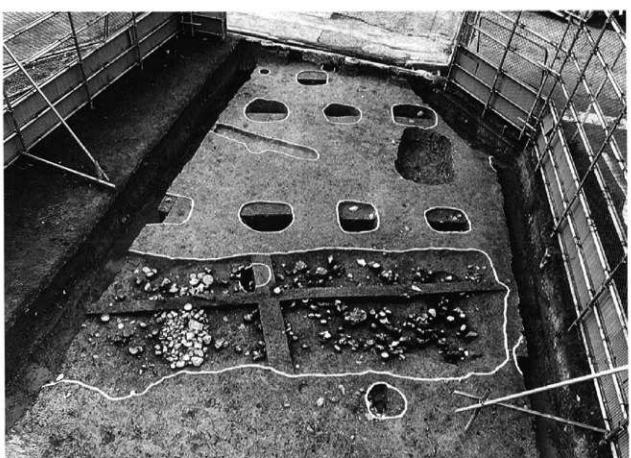


2トレンチ　　航空写真

図版20　03－1調査区全景（3）



3トレンチ　西から

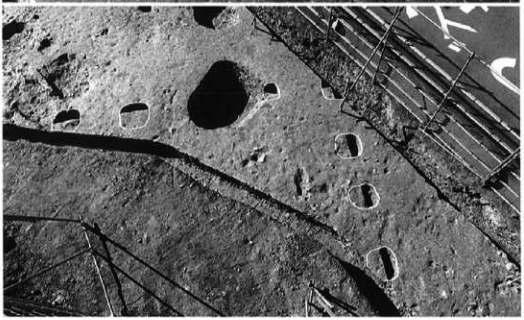


4トレンチ　東から

図版21　03－1調査区　掘立柱建物（1）

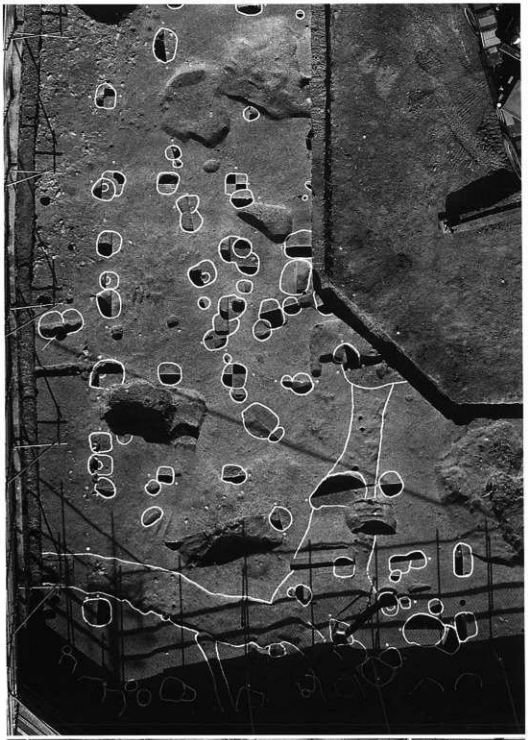
建物1
（手前は6ピット）
（1トレンチ）
北から

建物2
（3トレンチ）
西から



建物4
（2トレンチ）
東から

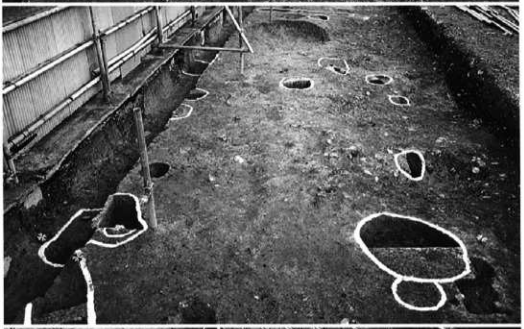
図版22　03－１調査区　掘立柱建物（２）



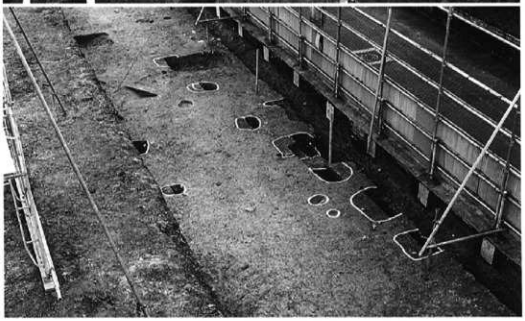
建物３・５～８
（２トレンチ）
航空写真

建物10　柱列11
（５トレンチ）
東から

柱列9
（5トレンチ）
南から

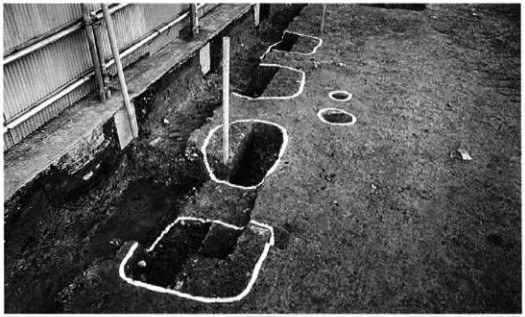


建物10
（5トレンチ）
南から



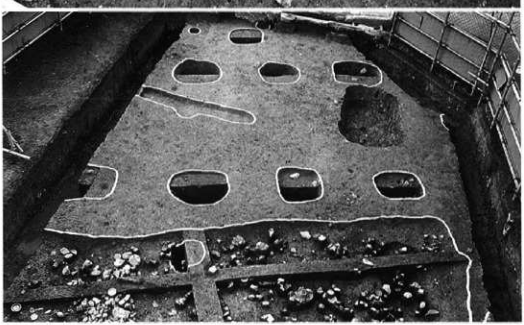
建物12・13
（5トレンチ）
北東から

図版24　03－１調査区　掘立柱建物（４）



建物12
（５トレンチ）
南から

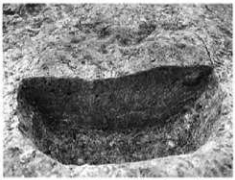
建物13
（５トレンチ）
南西から



建物14
（４トレンチ）
東から

図版25　03－1調査区　ピット

建物2　9ピット 南東から


建物4　38ピット　北から

建物7　88ピット　東から

建物5　45ピット　南から

建物5　48ピット　西から

柱列9　124ピット 南東から

建物13　140ピット　西から

建物13　142ピット　西から

建物10　126ピット　東から

建物14　157ピット　西から

建物14　160ピット　北から

柱列11　130ピット　東から

建物15　165ピット　西から

建物15　167ピット　西から

建物12　136ピット　東から

図版26　03－1調査区　土坑・溝

7土坑（1トレンチ）　北西から

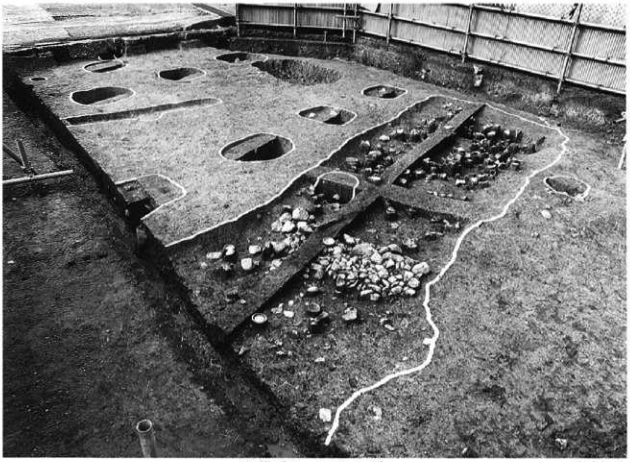
8土坑（3トレンチ）　西から

138土坑（5トレンチ）　北東から

28土坑（2トレンチ）　南西から

17溝断面（2トレンチ）　北から

16溝集石（3・4トレンチ）　南から



16溝（3・4トレンチ）　南東から

16溝　南から

図版28　03－1調査区　出土遺物（1）

102

130

132

105

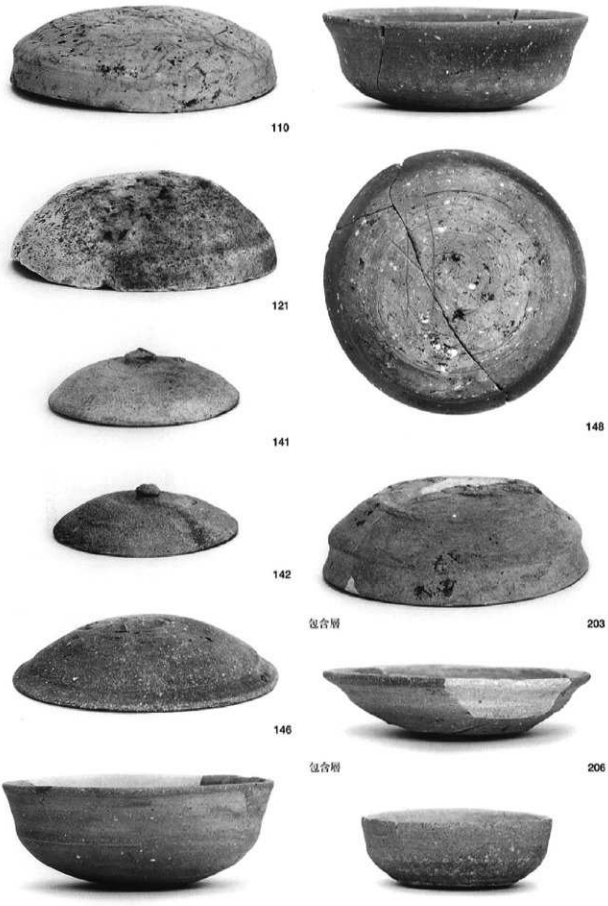
135

106

136

139

16溝（1）



16溝（2）　16溝直上包含層

図版30　03－1調査区　出土遺物（3）

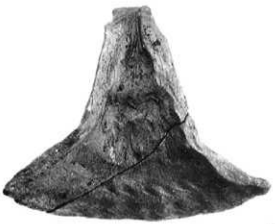
155

174

160

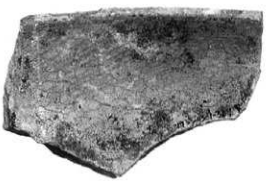
179

165



184

164



172

192

16溝（3）

8土坑　100

作土層　242

17溝　226

29土坑　88

作土層　243

建物6－54　71

17溝　249

17溝　244

16溝直上包含層　253

報告書抄録

ふりがな	そうじじいせき　に
書名	総持寺遺跡Ⅱ
副書名	大阪府営茨木三島丘住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第117集
編著者名	市本芳三・信田真美世・小野亜由美
編集機関	（財）大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105　大阪府堺市竹城台３丁21番４号　電話072-299-8791
発行年月日	2004年９月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
そうじじいせき 総持寺遺跡	おおさかふ　いばらきし 大阪府茨木市 みしまおかいっちょうめ・にちょうめ 三島丘一丁目・二丁目	27211	32	北緯 34°50′37″ 東経 135°34′73″	2002．10．29 ～ 2003．11．28	3，113	大阪府営茨木三島丘住宅（建て替え）建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
総持寺遺跡	－	弥生時代 （後期）	溝	弥生土器	
	集落	古代 （7～8世紀）	竪穴住居・掘立柱建物・ピット・土坑・　溝・落ち込み	土師器・須恵器・製塩土器・土錘・砥石	7世紀の一括出土土器 石組みを伴う方形土坑 （墓坑か）
	集落か	古代 （10世紀）	ピット	土師器等	
	集落	中世 （12～13世紀）	柵・溝・ピット	土師器・瓦器等	

(財)大阪府文化財センター調査報告書　第117集

総持寺遺跡Ⅱ

大阪府営茨木三島丘住宅（建て替え）建設工事に伴う発掘調査報告書

発行年月日　／　2004年９月30日

編集・発行　／　財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市竹城台３丁21番４号

印刷・製本　／　明新印刷株式会社
奈良市南京終町３丁目４６４番地